

第1回笛吹市歴史フォーラム

山梨県最大の方墳、竜塚の謎に迫る

記録集

2011

笛吹市教育委員会

序

本書は、平成 19 年度に行った第 1 回笛吹市歴史フォーラム「山梨県最大の方墳、竜塚の謎に迫る」の記録集です。竜塚古墳は、笛吹市八代町米倉の丘陵上にありますが、いろいろな謎に満ちた古墳であります。まず、規模が方墳の中では大形であること、さらに古墳時代の前期および中期と時期を絞ってみると、方墳としては東日本最大級のものとなることです。

山梨県内に方墳は 3 基存在しますが、竜塚古墳に比べ規模はかなり小さくなります。ただ、いずれも内容が充分に把握されていませんので、今後の調査により相互の関連が指摘できる可能性を秘めています。ちなみに竜塚古墳は平成 12 年度から 15 年度にかけて発掘調査が実施され、5 世紀前半に造られた古墳で、墳丘の 1 辺の長さが 55m～56m あり、高さが 7.4m あることが判明しました。遺体を埋葬した墓坑は墳頂のほぼ中央にあり、下方に掘り込んだ堅穴式でした。上記調査では墓坑を確認して記録にとどめました。今後整備を進めていく上でより詳細なデータが必要になれば、墓坑そのものを調査することになるでしょう。そのとき副葬品が発見されれば、「竜塚の謎」の解明は一気に進むものと期待されます。

さて、今回行ったフォーラムでは、古墳研究の前衛にいらっしゃる研究者の方々をお迎えして、ご講演とパネル・ディスカッションをお願いしました。竜塚古墳が方形を呈するということはいったいどのような意味を持っているのか。また、曾根丘陵上に数多く点在する諸古墳とはどのような関係を持つのか。さらに、山梨県ひいては東日本の古墳文化において、いかなる位置付けができるのかという難解な問題に挑みながら、市民をはじめ多くの研究者に本古墳の重要性を訴えかけ、保存活用を推進していくきっかけ作りになればと願っております。

笛吹市には重要な古墳が数多くありますが、古墳以外の注目すべき史跡・遺跡も多く地中に埋もれています。これらを保存し、未来の子供たちにいかに受け渡していくかは文化財行政の要でもありますが、多くの方々のご理解ご協力が無ければ無力に等しいとも言えます。どうぞ皆様、これからも積極的に教育委員会へ提言くださるようお願いいたします。

最後になりましたが、本フォーラムの開催から本書刊行に至るまでご協力を賜った明治大学名誉教授大塚初重先生、専修大学教授土生田純之先生、新潟大学教授橋本博文先生、帝京大学山梨文化財研究所の宮澤公雄先生、またフォーラム開催に際し、ご後援をいただいた山梨県教育委員会、山梨県考古学協会、山梨郷土研究会、笛吹市文化協会連合会、財団法人いさわ文化スポーツ振興財団、関係者の方々に深く感謝申し上げます。

平成 23 年 3 月 31 日

笛吹市教育委員会

教育長 山田 武人

第1回笛吹市歴史フォーラム

「山梨県最大の方墳、竜塚の謎に迫る」開催当日のプログラム

日時 平成20年3月1日（土）9：30分から16：00

会場 笛吹市石和スコレーセンター 集会室

日程 9：30 開会・あいさつ

9：45 記念講演「日本における方墳の研究と竜塚古墳」

大塚初重氏 明治大学名誉教授

10：45 基調報告「竜塚古墳の調査と成果」

伊藤修二 笛吹市教育委員会

11：30 基調講演「甲府盆地における古墳の出現と発展」

宮澤公雄氏 帝京大学山梨文化財研究所

13：15 基調講演「西日本の方墳－竜塚古墳との対比から－」

土生田純之氏 専修大学教授

14：00 基調講演「東日本における竜塚古墳の歴史的位置付け」

橋本博文氏 新潟大学教授

14：45 討論

コーディネーター 大塚初重氏

パネリスト 土生田純之氏、橋本博文氏、宮澤公雄氏、伊藤修二

16：00 閉会

目 次

記念講演 「日本における方墳の研究と竜塚古墳」	1
基調報告 「竜塚古墳の調査と成果」	22
基調講演 「甲府盆地における古墳の出現と発展」	38
基調講演 「西日本の方墳－竜塚古墳との対比から－」	56
基調講演 「東日本における竜塚古墳の歴史的位置付け」	71
討論	92

写真資料

- 写真資料 1 フォーラムで講演を行う大塚初重氏、フォーラムの討論で発言する土生田純之氏、
フォーラムで講演を行う橋本博文氏
- 写真資料 2 フォーラムで講演を行う宮澤公雄氏、フォーラムで行われた討論の様子、講師の
話を熱心に聞くフォーラム参加者
- 写真資料 3 竜塚古墳の近景（南西側から）、竜塚古墳の近景（北西側から）
- 写真資料 4 第 21 トレンチの北側墳丘斜面で検出された葺石（左斜めから）、第 21 トレンチ
の北側墳丘斜面で検出された葺石（正面から）
- 写真資料 5 第 8 トレンチの墳丘斜面で検出された葺石（右斜めから）、第 8 トレンチの墳丘
斜面で検出された葺石（正面から）
- 写真資料 6 第 3 トレンチでの周溝検出状況、第 3 トレンチで検出された周溝の完掘状況
- 写真資料 7 第 31 トレンチでの周溝検出状況、第 31 トレンチで検出された周溝の完掘状況
- 写真資料 8 第 21 トレンチ北側調査区の全景、第 21 トレンチ南側調査区の全景
- 写真資料 9 墓坑検出状況、第 21 トレンチ墳頂部におけるサブトレンチの調査状況

記念講演

日本における方墳の研究と竜塚古墳

明治大学名誉教授 大塚初重

皆さん、おはようございます。大塚でございます。

1947年、というと昭和22年、静岡の登呂遺跡の発掘が戦後始まった年なんですが、私は学生で登呂遺跡の発掘調査に4年間参加しておりました。その2年目の1948年、昭和23年の時に、発掘隊に一緒にしておりました國學院大学の永峯光一先生、もう國學院大学をご定年になりましたけれども、永峯先生と発掘中、夜お酒を飲んだ時に、「ところで永峯さん、あなたの考古学で何を勉強したいんですか。」と私が聞いたところ、「ぼくは笛吹川流域の古墳群の勉強をしたいんですよ。」って飲みながら言ったんですね。私は大学2年生でしたけれども、國學院の永峯さんがもうすでに自分の研究、勉強する目標を笛吹川流域の、私は当時笛吹川ってどこかよく知りませんでしたが、笛吹川流域の古墳の研究をやりたいってことを明確に決めていたということで、私は大変なショックを受けました。つまり、おれは何をやっていたのか。これから考古学を勉強しようというのに、考古学の何を自分で勉強するのかってさえもまだ掴めていない。掘って、掘って、掘りまくっているだけという自分の惨めさというか、それで9月の初めに登呂遺跡の発掘が終わって帰ってきて、私はすぐに中央線に乗って甲府駅に参りました。駅を降りて右側に小沢自転車店という自転車屋さんがありまして、そこに学生証を渡して「おじさん自転車貸してよ。」って、自転車屋さんから自転車を借りて、今の平和通り、県庁前をずっと真直ぐ走っていました。そして、笛吹川の土手に着いて、甲斐銚子塚古墳といわれている全長169mの大型前方後円墳が見えてきて、永峯さんはこの古墳を勉強したいんだってことで、私は桑畑だったと思いますが、甲斐銚子塚古墳の墳丘に上がったことがございます。それから数十年たって、今日、笛吹川流域の旧八代町の、今、笛吹市になりましたが、この竜塚古墳のこういうシンポジウムに自分が参加できるってことは、非常に懐かしい思いもしております。

そこで、私の講演ではなるべく易しく、面白く、面白くっていうのはなかなかできないんですが、古墳時代の話でなぜ竜塚古墳が問題になるのかということをお話ししようと思っております。それに到達するためには、日本における古墳の研究、とりわけ竜塚古墳は四角い古墳なんですね。丸いのは円墳、四角いのは方墳、そして皆さんご承知のように後ろが丸くて前に方形部が付いているのが前方後円墳というように、いろんな名前が付いています。いったい日本列島にこういう古墳、古代の有力者のお墓がどのくらいあるのかってことは文化庁でもよく分からんんですが、25万基以上という人もいるし、30万基位だつていう方もいますが、およそ30万基前後の大小の古墳があると言われています。また、北海道には北海道式古墳と名がついたものがありますが、私は古墳の範疇に入れてもいいと思っているんですが、わずか数基、江別とその周辺地域に分布しています。全国的な分布では、東北の青森県から南九州まで全国的に分布をしておりまして、今言ったように円墳、方墳、前方後円墳、あるいは前方後方墳とか、その他に上円下方墳とか、八角形墳とか、六角

形墳とかいうように、非常にバリエーションというか、変化に富んでいます。世界でこんなに古代の墳墓が、いろんな種類が交じっていて、しかも、一つある地域の古墳群に前方後円墳あり、円墳あり、方墳あり、しかも大小があるというこんなに多様な古墳が存在している地域はあまり例がないのではないかと思います。東京大学の東洋史の故西島定生先生は、『岡山史学』第10号に「古墳と大和政権」という論文をお書きになって、そういう前方後円墳、円墳、方墳って形が違うものが併として構成されている意味を考え、古墳とは何ぞやってことから始まって、もしかすると古墳のそういう形の違いは社会でのステータス、地位とか、身分とかそういうものによって、墳墓の形が違うということがあり得るんじゃないかなと考えたんです。

古墳というのは、政治的な性格をもったものになるという解釈がございます。一番多いのは何かというと、やっぱり円墳なんですね。では前方後円墳は全国でどのくらいあるかというと、これは難しいんですね。岡山大学名誉教授の近藤義郎先生が中心になって、全国の研究者が応援して全国の『前方後円墳集成』という膨大な出版物を山川出版社から出してますが、それをざっと計算すると私の計算では約6900基くらいなんです。約7000基の前方後円墳があって、後の大半は円墳なんです。では、方墳はどれくらいあるかというと、これがなかなか分からんんですね。

今日のテーマが竪塚古墳だから、ああいう四角い古墳、方墳の学術的な研究というのは、一体いつごろから始まつたのかということを調べてみると、これは後ほどたぶん他の先生の方の話に出てくるかもしれません、私が調べたのは絶対的に正しいかどうか別といたしまして、大正元年から大正2年頃に東京大学と京都大学が、宮崎県知事の肝いりで宮崎県の西都原古墳を調査しています。戦前は日向の国が皇室の発祥の地ということで、日本の古代神話のうえで非常に重要な所だと教えられたんですが、その日向の国における古墳群として代表的なものというと西都原古墳群なんです。全部で311基か317基だったか、300基を超える古墳があって、今、国の特別史跡になっています。それで、最近その中の男狭穂塚古墳とか女狭穂塚古墳という宮内庁が指定しています陵墓参考地の測量が宮崎県によって行われました。戦前は、太政官符令などによって古墳をみだりに掘ることはならないということだったんですが、それを宮崎県知事が宮内庁の許しを得て、皇祖発祥の地を明らかにすることで西都原古墳の学術調査に踏み切るんです。それに京都大学の内藤虎次郎先生ですか、東京大学の黒坂勝美先生とか、白鳥庫吉先生とか著名な明治、大正の学者たちが宮崎県に集まって西都原古墳を調査するんです。今、西都原古墳に行ってみると、きれいに保存されていますが、坂道に札が立っています。この坂道が内藤虎次郎先生や黒坂先生などの先生方が鍼を担いで、スコップを持って調査のために毎日上がってきた坂だと説明しています。これも史跡になったわけじゃないけども、そういう由緒ある所になっているんですね。それで、西都原古墳についていろいろ調べてみると、方墳が1基しかないんです。現在、171号墳、かつては210号墳という番号が付いていたんですけども、今は171号墳という方墳です。それを宮崎県教育委員会が整備のために最近調査して、墳丘を一皮剥いでみたところ、ちゃんと葺石でもってきれいに四角になっていました。つまり、西都原古墳群では前方後円墳が34基、円墳が296基、方墳が1基、だから311基の古墳群の中で方墳が1基というのが、これまた問題なんですね。西都原古墳群の171号墳の持っている年代観と性格論、1基だけ何でぼつんと西都原古墳群の中に登場し

たのかっていうことは問題なんですが、実は良く分かりません。同じように竜塚古墳も、山梨県の古墳の中で、あの八代町の、あの岡・銚子塚古墳から 600m離れたあの地域に、単独で 5 世紀代に出現してくるということが問題になるんですね。

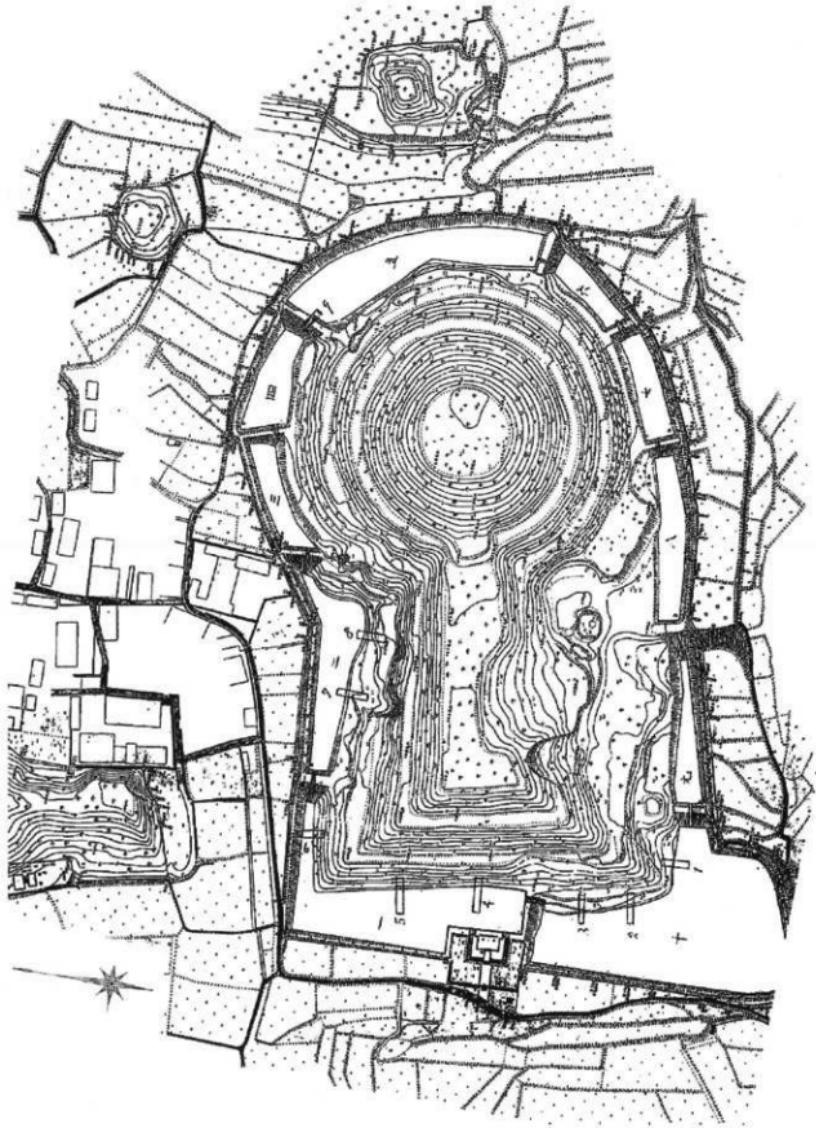
では、日本で方墳はどれくらい研究がされてきたのかということを調べてみると、昭和 12 年、1937 年に京都大学の梅原末治先生が、有名な飛鳥の蘇我馬子の墓ではないかという言い伝えのある石舞台古墳、上円下方墳と言われているんですが、下が四角で、上方に丸い上饗頭が乗っかっているその石舞台古墳の報告書の中で、「日本方形古墳集成表」というのをお作りになっているんです。東は栃木県から、西の方は 10 府県にわたって、なんと四角い著名な古墳が 36 基ある、36 基しかないというか、だから古墳の全体の数からいくと、方墳が少ないということです。ということで、そういう少ない方墳の研究をまとめるという人は少なかったんですね。ところが、戦争に負けました。1945 年 8 月 15 日以降、日本の古代史研究というのは、それまでの皇国史観から解き放たれて、考古学研究などの実際の資料に基づいた古代史研究というものが、非常に見直される時期になります。そういう時に、島根大学の先年亡くなりました山本清先生がおられまして、島根大学文理学部紀要に「出雲国における方形墳と前方後方墳について」という論文をお書きになっています。私の学生時代ですよ。明治大学の図書館で島根大学の紀要を見たら、山本清先生がお書きになっているんです。1948 年か、1949 年でしたかね。コピーの無い時代なんで、大学ノートに全部写しました。それは、今、私の記念品になっています。大学ノート 1 冊に山本清先生の論文を全部手書きで、図面は鉛筆でもってトレーシングペーパーに写して、それを貼り付けて。そして、後で手紙を出したら、先生から抜き刷りを送って頂きました。その山本先生の論文を見ますと、出雲に方形墳が 32 基ある。前方後方墳が 9 基ある。前方後方墳というのは、後ろの方形部に前方部がついた古墳なんですが、今、全国で約 500 基前後あるといわれている前方後方墳、その前方後方墳が 9 基、方墳が 32 基あるということが書いてありました。円墳の数のほうが少ないくらいです。だから、古代の出雲国が方墳や前方後方墳など、四角い古墳にこだわっている地域だということが言えると思ったのです。

それよりも、もう少し前の大正時代ですが、1917 年、大正 6 年、それから 1918 年、大正 7 年に京都大学の梅原末治先生が、主任教授の浜田耕作先生の出張の時に「お前も付いて来い」といわれて、京都府綾部市、それから亀岡市の地域調査を行きます。大正 6 年に綾部市で聖塚という古墳を目にします。歩測で計ったら一辺約 45m の四角い古墳であって、地元の人が掘ってしまったんですけど、内部主体は粘土構造だったのです。それから聖塚古墳の側の菖蒲塚古墳、「あやめづか」って読むんですけども、そういう古墳もあります。今度は、翌年の大正 7 年、亀岡市では滝ノ花塚古墳と耕塚古墳、これも梅原先生が見ると、地元の人が掘った後んですけども、一辺 30m の方墳で、つまり、京都府の亀岡市とか綾部市には四角い古墳があり、しかも一辺 30m を前後するような四角い古墳で、地元の人が掘ってみたところによると粘土構造であって、出てきた遺物を見てもそんなに新しい古墳ではなく、ほぼ西暦 5 世紀代ころ、古墳時代を前期、中期、後期と三つに分けていた當時でいうと中期の 5 世紀代に、日本には四角い古墳があるんだということを京都大学の梅原先生なんかが考古学的に認識していたんですね。

ところが、古代史学者の喜田貞吉先生などは、古代史研究をしていくと天皇陵でも用明天皇陵とか、推古天皇陵とか、大智天皇陵とかそういう時期の御陵の形態は方形墳で、清寧天皇陵とか敏達天皇陵とか、そういう天皇の墳墓は前方後円系、後ほどお話になる土生田先生は専修大学にお見えになる前は官内庁の書陵部におられましたから、たぶん天皇陵についてはお詳しいと思うんですけども、そういう日本の古代の歴史の中心軸になるような大王、後に天皇と言われるような方達の墳墓は、前方後円系であったものが6世紀の後半から7世紀代に入ってくると方墳になる。だから、日本列島における方墳は後期古墳だよ。新しい古墳だよ。というのを喜田貞吉先生がすでに古くからおっしゃっていたことなんですね。だけど、梅原先生は、京都府の綾部市や亀岡市で調べたら、「あるよ、四角いのが。粘土構の方墳があるよ。5世紀代から方墳はあるんだ。」ということで、考古学的に方墳の認識というものが、古代史の用明天皇が方墳だから四角い古墳はみんな後期古墳、新しい古墳だということではなくて、古い古墳もあるという認識になったんですが、ではそういう四角い古墳を正式にというか、学会挙げて方墳の大研究をするなんていうことは無かったんです。

今度、笛吹市でこのフォーラムがあるのでちょっと調べてみたら、方墳の研究の論文が少ないんですね。余りやってないんですね。私の後輩になるんですが、亡くなられた岡山にいた西川宏君は、広島大学の途中から明治大学に来たんですが、その西川宏君の明治大学での卒業論文が方墳の研究でした。それで、後藤守一先生に就いて指導を受けたんですが、彼は明治大学の学生時代、若かつたからどんどん片っぽしから有ると聞けばそこへ飛んでいって調べたんです。彼が卒業論文に集めた時には全国で211基でしたよ。日本には、今方墳がどのくらい有るんでしょうか。私には分かりませんけど、300基や400基という数ではないと思います。

では、どういうふうに方墳があるのかと見ると、竜塚古墳はぼつんと一つ、大方墳が、あの岡・銚子塚古墳から600mほど離れた丘陵の突端に、甲府盆地を見下ろすような所に威風堂々と構えています。葺石があって、5世紀代という年代が与えられるような内容の古墳で、一つぼつんと孤立して、独立的にあるということなんですね。では、全国の他地域での方墳は、ということで調べてみると、これは後々検討を要することなんですが、あるいは土生田先生のご意見も受けなければならないけれども、第1図の渋谷向山古墳、これは山辺道上陵といわれていて、官内庁指定の景行天皇陵に今日指定されている大前方後円墳です。墳丘の長さが310mくらいありますが、その後円部側の堀のすぐ東側に1基、赤坂古墳というのがありますし、25mから30mくらいの方墳といわれています。これが方墳らしく測量図では見えるけれども、確認調査をしないと100%言い切ることはできませんが、方墳の可能性は大だと私は思っています。ただし、これが渋谷向山古墳、景行天皇陵のすぐ後円部側の山の上の方に1基あるので、渋谷向山古墳の陪塚、つまりご主人の亡骸に付隨して一緒にあの世に旅立って行くという、その陪塚ではないかと言われています。この在り方からいって、もし陪塚としてよければ、すでに渋谷向山古墳の年代が推測されていますから、自らの年代が決められてきます。関西大学に模様を彫った立派な古代の石枕が収蔵されています。これはこれまでの研究で、この渋谷向山古墳から出たのではないかといわれているものです。この石枕の特徴から見れば、5世紀代まではドらないけれども、4世紀代の後半くらいでこの景行天皇陵の年代はよろしいのではないかと思います。もし、この赤坂古墳が陪塚ならば、4世紀の後半くらいにこ



第1図 渋谷向山古墳

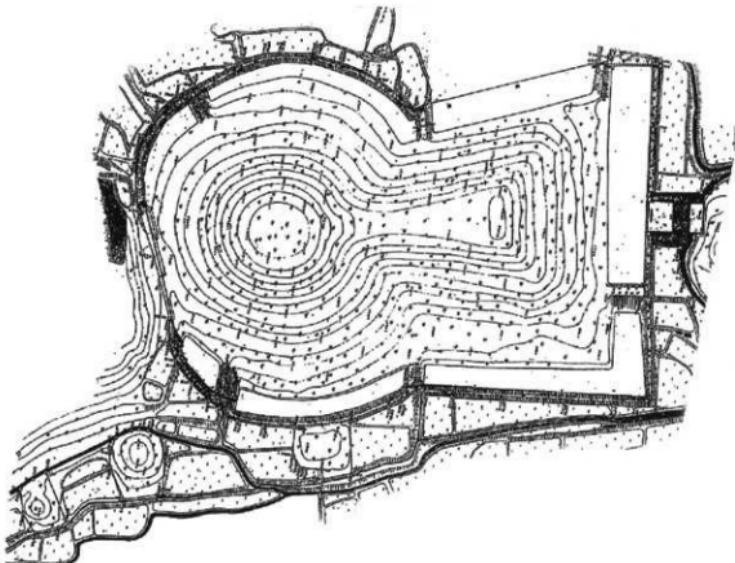


第2図 佐紀石塚山古墳

ういう方形の古墳の陪塚が出現しているのではないかということにもなるんです。これはまだ推測にすぎません。

第2図を見ると、これは奈良県の佐紀石塚山古墳、つまり狭城盾列池後陵で、成務天皇陵に今日指定されているものです。この成務天皇陵についても、後円部側、狭い堀がある北側にいくつか古墳があります。これも側にあるから陪塚かどうか問題ですけども、方墳ではないかと言われています。これも調査をしなければ確実なことは分かりませんが、こういう200mを超えるような大古墳、今日、天皇陵とされている古墳の一部にこういう陪塚としてよい古墳が付き従う、それが方墳であるということが前方後円墳とプラス陪塚としての方墳論になっていくわけです。

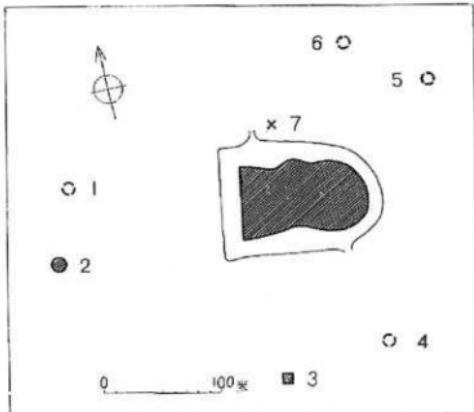
それから第3図を見ていただきたいのですが、これはつい先日新聞発表がございましたが、日本考古学協会を始めとする16の学会代表が、宮内庁の許可を得て渡り土手から中に入って、この五社神古墳、すなわち神功皇后陵の一番下段、裾の所を歩いて観察をしたというニュースを皆さんご承知かと思います。この五社神古墳、つまり神功皇后陵、私も先年周りを歩いたことがございますけども、周りに古墳があるんです。方墳といわれれば、なるほど等高線が方形かなと見えてくるんです。円くしたいなと思うと、円く見えてくるんですね。だから、危ないんです。人間の目はね。したがって、確認調査をして、四角かどうかってことを調べなければ何とも言えないけれども、少し問題になる古墳がこういう五社神古墳、つまり、神功皇后陵なんかにも有ると言うことを触れておきたいのです。



第3図 五社神古墳の図

ところが第4図、これは大阪府の黒姫山古墳という有名な前方後円墳です。これは木永雅雄先生と森浩一先生等が調査をされていますが、前方部から竪穴式石室が発見されて、短甲と背が24セット発見された著名な古墳です。5世紀代の古墳です。この図は、黒姫山古墳の報告書から引用した図ですが、さる山古墳と、さばやま古墳、2番と3番、この図面ではさる山古墳が円墳になっていますが、最近の関西の研究者は、さる山古墳もさばやま古墳も両方とも方墳だと言っています。ただ、そこにございますように、1、2、3、4、5、6、7と古墳の周りに点々と分布していますが、これも全部陪塚かどうかは不明確です。ですから、これは側にあるから全部陪塚かというと、神奈川県川崎の日吉の加瀬古墳、慶應義塾大学が昭和12年頃に調査をした南関東でも古い前方後円墳がございます。その加瀬古墳のすぐ後円部の脇に第六天古墳という円墳があります。これは陪塚だということで掘ってみたら、時代が全然違う。横穴式石室を持った7世紀代に下る古墳であったことから、側にあるから全部陪塚だとは言えないということですね。そういうことになると、私が話した天皇陵のすぐ側にある方墳が全部陪塚かどうかということは分からぬ、大型前方後円墳に従属して側に方墳があるよ、ということを言いたかったんです。

そこで、第5図と第1表をご覧になりますと、これは北野耕平先生が大阪大学から刊行している報告書『河内における古墳の調査』からですね、応神天皇陵とアリ山古墳の調査から引用したもので、図の真ん中が誉田御廟山古墳といわれている応神天皇陵です。その平面図をご覧になると、東側に栗塚古墳、馬塚古墳、盾塚古墳といい立貝古墳、珠金塚古墳、有名な丸山古墳、それから西側の方にアリ山古墳、東山古墳、つまり下の表をご覧になつても分かりますように方墳があります。そして、この応神陵の堀との関係からいって、アリ山古墳や東山古墳などはこの応神陵に伴う陪塚とこれまで考えられています。そのアリ山古墳の発掘報告が出てますが、膨大な鉄製品が埋納されておりまして、さすが陪塚いろいろなものを旅立つのにあの世に持っていくかせるということで、たくさんのものを入れています。それが方墳だということで、つまり、河内の応神陵、この誉田御廟山古墳といわれている応神陵を、西暦5世紀代の時期に位置付けるとすれば、その時期にこういう方墳を伴う、しかも東山古墳、アリ山古墳など表を見ると一辺の長さが50m、もしくは45m、高さ4mまたは5m、あるいは高さ7mというようなデータを持っていますから、まあ、



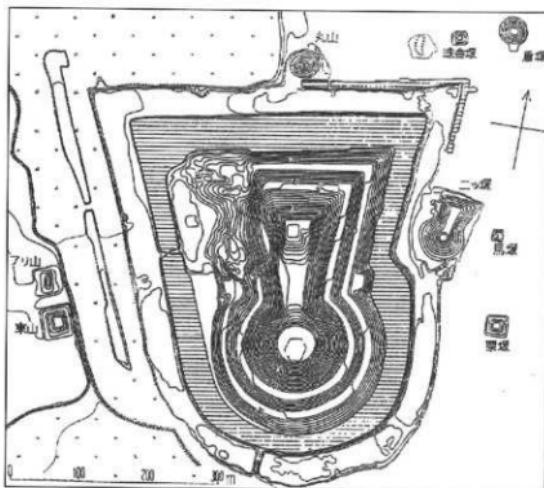
(實線は調査當時現在。1.けんけん山、2.さる山、3.さば山
4.名前不明、5.どん山、6.鎮守山、7.子持勾玉出土地)

第4図 黒姫山古墳陪塚配置図

竜塚古墳が 55m～56m ということで、こういう大型の古墳があるということは、5世紀代に大型前方後円墳の陪塚として伴うということがあり得ます。となると、方墳がそこに伴うってことは、どのような意味があるのかあらためて問題になると思います。

ところが、竜塚古墳は、さっきから何度も同じことを言って申し訳ないのですが、岡・銚子塚古墳、92m の大型前方後円墳があって、そのすぐ側の前方部側に盃

塚古墳という円墳があつて、もっと昔は周りに点々と古墳があったようですが、いまはもう削平されて姿がない。もう保存されているのはこの 2 基だけ。それから直線で約 600m 離れた所に竜塚古墳がある。それが大方墳であるという、つまり独立的な、1 基だけが個々を保って、丘陵の縁辺に鎮座しているということは、在り方として何なんだ、竜塚古墳の被葬者ってどういう人物で、どういう性格で、そして、岡・銚子塚古墳の首長とどういう関係があるんだということが、当然誰し



第 5 図 応神天皇陵とアリ山古墳の関係図

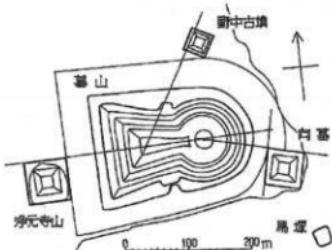
墳名	方向	距離	墳形	規格	出土遺物
大鳥塚	北	75	前方後円墳	全長 107m 後円部径 73m 前方部高 44m 後円部高 9m 前方部高 5m	菱形彫文鏡・刀劍・鉄船
*丸山	北	15	円墳	直径 45m 高さ 6m	短甲・刀・面角製刀装具・金刷鍔金具等
清水山	北	40	不明	不明	不明
珠玉塚	北東	55	方墳	辺長 29m 高さ 4m	環状乳突鏡等 4 面・玉類・短甲・馬工具等
権塚	北東	75	帆立貝式古墳	全長 63m 後円部径 43m 前方部径 19m 後円部高 6m 前方部高 1m	菱形彫文鏡・玉類・石劍・病劍・圓形彫文鏡・船形・面角付骨・刀劍・鞍子・農工具・短甲等
萩塚	北東	130	円墳	直径 35m 高さ 4.5m	方格銀鏡四神鏡・王冠・短甲・銀製馬具等
*二ツ塚	東	10	前方後円墳	全長 106m 後円部径 68m 前方部径 58m 後円部高 10m 前方部高 5m	未詳
*馬塚	東	110	方墳	辺長 19m 高さ 4m	未詳
*栗塚	東	70	方墳	辺長 37m 高さ 4m	未詳
茶臼塚	南西	190	方墳	辺長 26m 高さ 不明	未詳
東山	西	80	方墳	辺長 50m 高さ 7m	未詳
アリ山	西	90	方墳	辺長 45m 高さ 4.5m	本報告書収載
*三段山	北西	270	円墳連続?	直径 15m 高さ 14m 直径 21m 高さ 4 m	未詳

応神天皇陵周辺の古墳一覧表 備考 方向は応神陵を基準としたもの。距離は応神陵内海外堤より各古墳に至る距離。(単位: m) 地印を附した古墳は応神陵陪塚指定場。

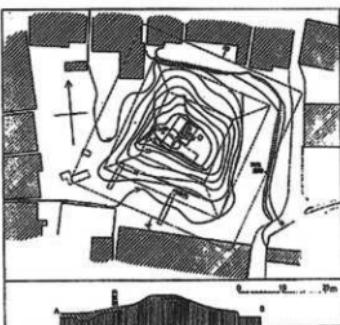
第 1 表 応神天皇陵周辺の古墳一覧表



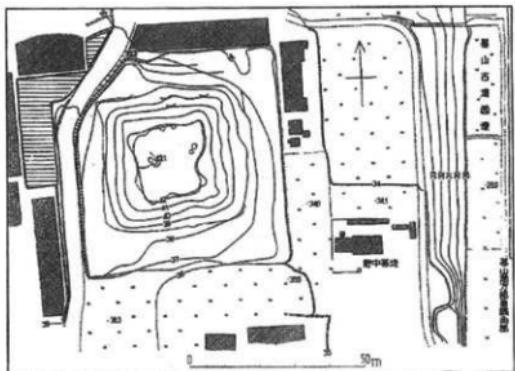
第6図 野中古墳と古市古墳群付近地形図



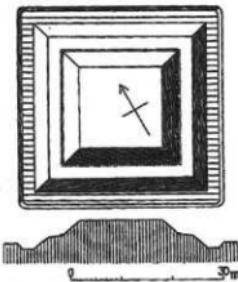
第7図 墓山古墳と周辺の3古墳との位置関係



第8図 野中古墳外形実測図



第10図 淨元寺山古墳外形実測図



第9図 野中古墳墳丘復原図

も頭に浮かんできます。ということになれば、少し考古学に興味を持っている方なら、竜塚古墳なり岡・銚子塚古墳に立って西の方を見ると丘陵があつて、たくさんアンテナが立っています。放送用のアンテナとか携帯電話でしょうか。たくさんアンテナの立っている丘陵の向こう側には曾根丘陵の古墳群があつて、有名な甲斐銚子塚古墳、169mの大前方後円墳があります。その前方部側に、今度は丸山塚古墳という直径 72mの大型円墳があります。岡・銚子塚古墳は 92m、ちょっと小さいけれども立派な前方後円墳の前方部側の直ぐ近接した所に盃塚古墳という円墳があります。だが小さい。この古墳は、先年、整備の時に掘られています。今朝、盃塚古墳から出たという鉄鎌を拝見いたしました。かなり大型の鉄鎌でありまして、まあ、5世紀代であることは間違いないんですね。そういう 2つの前方後円墳と円墳の関係は丘陵を越えた、甲斐銚子塚古墳の 169mとその前方部側にある 72mの大円墳、丸山塚古墳との関係と、団体の大小があるけども在り方としては同じだというように言われますね。ところが、那次はどうなるのかというふうになると、甲斐銚子塚古墳の場合には、かんかん塚古墳とかいくつか古墳があるんですが、岡・銚子塚古墳の次はたぶん盃塚古墳でいいのではないかと思うのです。盃塚古墳の次が竜塚古墳か。いや、もしかすると岡・銚子塚古墳の次は竜塚古墳だと。どちらにしても、なんで竜塚古墳をあんな四角い大型古墳にしたのかと疑問に思うのです。「おれは四角でなきや嫌だよ。」という首長が居たのかもしれません。あるいは古墳造りの集団が方墳にこだわったのかもしれません。なぜ方墳にこだわったのかということは、クエスチョンマークなんです。考古学というのは、そういう実例をいくつか、同じパターンを各地域、全国的に見ていくて、比較、検討しながら解釈していくというのがオーソドックスな研究法ですが、他にあまり類例がないんですね。長野県東御市に中曾根親王塚古墳という大型方墳があるんですが、内容がよく分からないです。それで、個別に単独でぽつんとある大方墳があるんですが、第 11 図を見ていただきますと、考古学の研究では大変有名な奈良県橿原市の新沢千塚という古墳群がございます。新沢千塚古墳群というのは、この図面にございますように、平野部に独立的な丘陵があつて、その丘陵上に 370 基の大小の古墳が、ここでは黒く塗り潰してありますね、この白石太一郎先生の『古墳と古墳群の研究』からの引用図では。それをよく見ると、円墳もあるし、方墳もあるし、長方墳もあるし、その新沢千塚古墳群のすぐ側に鳥屋ミサンザイ古墳、これは宮内庁治定の宣化天皇陵です。その鳥屋ミサンザイ古墳のすぐ南南西に樹山古墳というのがあります。これが方墳です。一辺 85m、本によつては 100mとされ、日本最大の方墳なんですね。この倭彦命の墓だといわれている樹山古墳の年代がまた問題ですね。つまり、大型の前方後円墳である宣化天皇陵に指定されている鳥屋ミサンザイ古墳の近くにあるこの大方墳と、この前方後円墳との関係論というのが、これまた問題になるかと思うのですね。

千塚山に分布している新沢千塚の 370 基の古墳群全体を見てみると、前方後円墳が 9 基、前方後方墳が 2 基あります。方墳が 15 基あります。その他は全部円墳ですが、橿原考古学研究所がこのうちの約 130 基を調査しています。その中で、とりわけ 126 号墳の内容が方墳を考える場合に私は重要だと思っています。長辺 24m、短辺 17mの長方形の古墳は、森浩一先生などが発掘したのですが、割竹形木棺の主体部から純金製の方形冠飾り、中国遼寧省の博物館に行きますと、中国の遼寧省から吉林省の古墳から出た純金製の透かし彫りのある四角い、真四角な 10cm 四方くらいの



第11図 奈良県鳥屋ミサンザイ・耕山古墳と新沢千塚古墳群

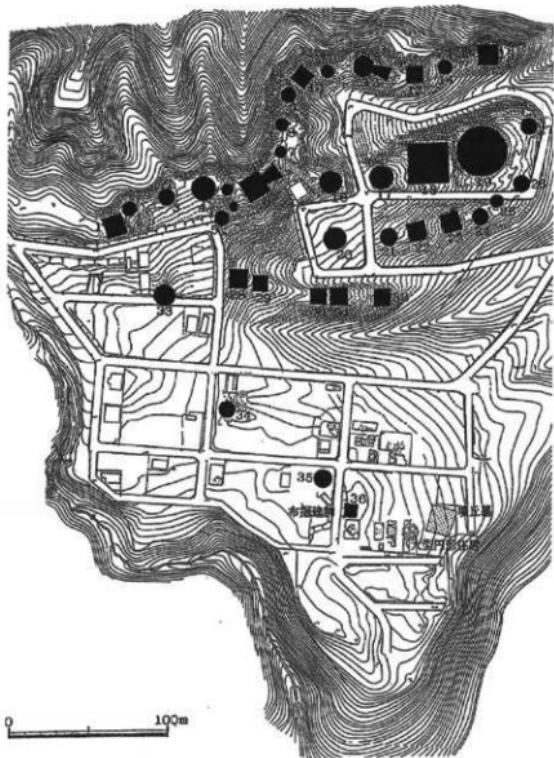
純金製の飾り板が展示されています。これは何かといって見ると、冠の正面に取り付けられているものなんです。そういうものが何例かございます。それと同じような純金製の透かし彫りを持った冠飾りが、126号墳から出ている。あるいは、純金製の螺旋状の長さ20cm近いイヤリングですね。重ね下がるイヤリングです。伝統的な古代日本人の耳飾とか、冠飾りとは違って、中国北方の鮮卑や高句麗との関係が近いような副葬品が出土してきています。それとガラスのお椀とお皿が出ていて、安閑天皇陵から江戸時代に出たガラスのお椀というものは非常に有名なんですが、それと同じようなガラスのお椀と、何とブルーの色をしたお皿が出ているこのお墓に葬られた人は、まあ直感なんですが、地元の人ではないそういう大陸的な朝鮮半島と繋がる様な遺物を持っている人物だと直感的には思うんです。もっとそういう遺物の研究をしなければいけませんが、ガラスの椀とか皿とか、冠飾り用の歩瑠がついた金製品、金銅製品が出ていて、朝鮮半島の高句麗をはじめ、新羅や百濟や伽耶、そういう系統の遺品がたくさん入っている126号墳の被葬者は、おそらくそういう先進地域の進んだ技術を持って日本にやって来た技術者集団の有力者ではないかと思うのです。それが長方形古墳なんです。だから方墳、新沢千塚古墳群において、四角い古墳にこだわっているということについては、被葬者はそういう渡来系集団に係わる方かもしれません。となると日本全国にあるその方墳の性格論というものは、好みに応じて方墳にしたり円墳にしたりしたのか、地位とか、身分とか、職業とかいろいろな違いによってご自分のお墓の形式が変わるということになるのか、実はいろいろな問題がここに登場してきます。

滋賀県の琵琶湖の南東部の能登川町に、神郷亀塚古墳という最近の調査によって前方後方墳とい

うことがはっきりした古墳がございます。この神郷亀塚古墳から出た土器が古いというので、前方後方墳の出現は琵琶湖周辺の能登川町あたりからスタートしたのだという考え方の人もいらっしゃいます。

ところが、今度は琵琶湖西岸、第12図にございますように、最近合併して滋賀県高島市、旧高島郡新旭町だったのが、今、高島市になっていますが、熊野本古墳群というのがあるんです。これも、だいぶ住宅のいろんな整備等で壊されたりしているんですが、その熊野本古墳群の分布図によると、大型方墳や円墳等と同時に前方後方墳があります。その中央部の丘陵上にある前方後方墳、熊野本第6号墳というんですが、この前方後方墳の確認調査をしたら墳丘から土器が出てきました。この土器は、さっき言った能登川町の神郷亀塚古墳から出た土器より形式的に古いことから、前方後方墳のスタートは琵琶湖の東ではなくて、琵琶湖の西だという説があるんです。そして、その周りに方墳が付随している。じつは、日本の弥生時代には方形周溝墓とか、低墳丘の方形の墳丘墓がございまして、古墳の出現後にそういう墳墓形態がございますので、日本における方形周溝墓は寛倉里遺跡の例があるように朝鮮半島から入ってきたと私は考えているんですが、九州から東北まで日本の弥生時代の前期末から中期段階以降、方形周溝墓という墓制が全般に展開します。そういう方形の墓のプランが伝統的に後々まで残れば、日本の古墳時代に方墳が前期の初めから前方後円墳なんかと同等に出現してきても、理論的にはおかしくないんですね。

しかし、今、我々が問題にしている大型の竜塚古墳は、そうではなくて5世紀代の前半という時期に、突如としてこの地域に大型方墳として出現てくる。方墳を追求していくといろんな在り方をしている。つまり、琵琶湖の西岸の熊野本古墳群、あるいは、



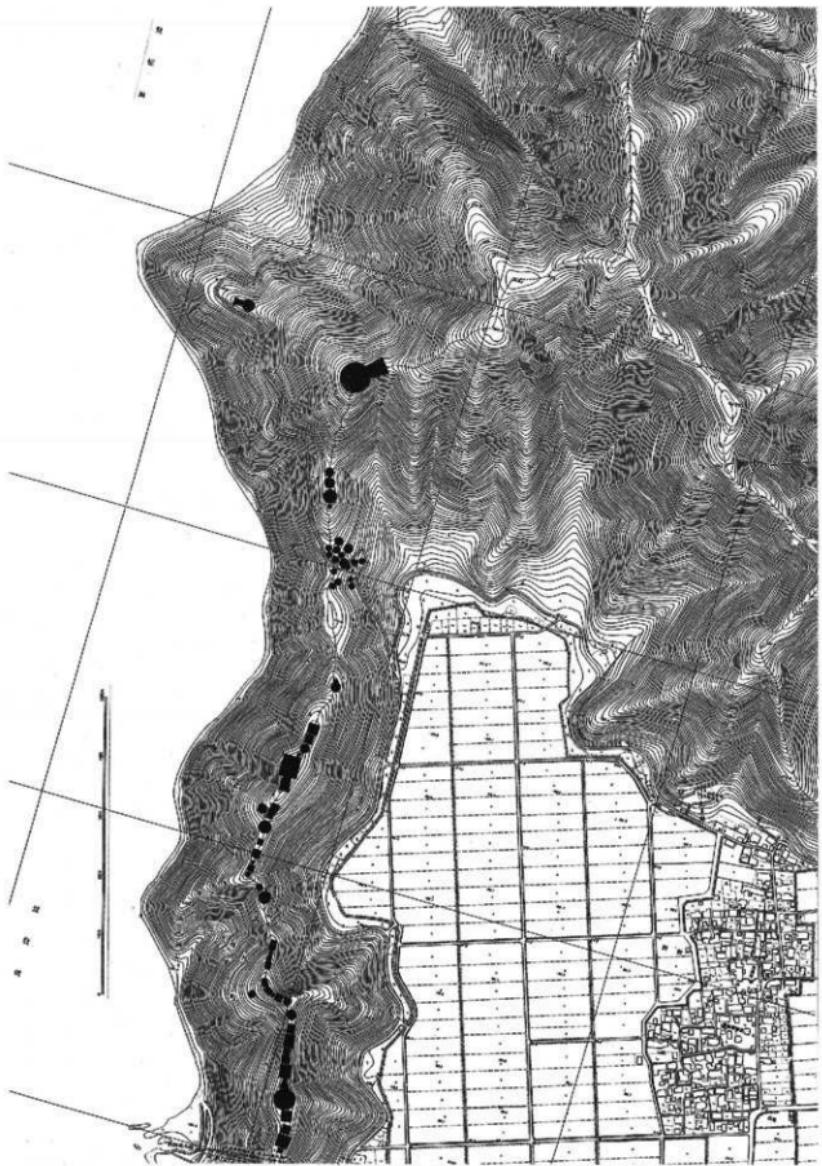
第12図 熊野本古墳群、熊野本遺跡分布図

東の能登川町の古墳のようなそういう在り方もしている。かと思うと、これまた最近見学してきたのですが、古保利古墳群、これは琵琶湖のいちばん北、高月町の塩津地域です。その琵琶湖北岸の丘陵尾根上に古墳が造られています。その古墳の図面が第 13 図にございますが、そのちょうど真ん中あたりに前方後方墳の小松古墳があります。小松古墳、これは確認調査をした時に、墳丘の裾から土器と鏡が出ています。中国製の鏡、內行花文鏡と同時に土器も出ています。その出ている土器を見ると、受口口縁という土器、後に S 字状口縁を持った台付甕型土器という問題の土器が実は出てくるんですけども、そういう S 字口縁の土器の起源になるんじゃないかといわれている受口口縁といわれる土器の口縁部の形態を示した土器が含まれていて、この高月町で調査した関係者は、能登川町、高島市の熊野木古墳群のそれよりも小松古墳の前方後方墳の方が少し古い。つまり、前方後方墳の出現は琵琶湖北岸にある。ということになると、今度は丹後に抜ける街道筋ということだから、日本海側と関係が出てきます。そうすると、これから北陸と山陰地域の方墳の系列とも、これがまた関係してくることになります。竜塚古墳から考え始めてくると複雑ですね。

私も保存整備に関わった栃木県の那珂川の上流、最近地名が変わって、栃木県那須郡那珂町の吉田温泉神社古墳群と那須八幡塚古墳群、第 14 図ですが、この古墳群の東側断崖の下に那珂川が流れています。つまり那珂川の断崖上に古墳群があります。一番南の吉田富士山古墳、その北側に有名な那須八幡塚古墳、昭和 28 年に三木文雄先生が発掘し、雙鳳鏡を出土した木棺直葬で粘土郴を簡略化したものが出てきた前方後方墳があります。それとやや別に、北の方に方墳が 20 基並んでいます。まったく円墳を含まない。方墳ばかり。その真ん中に吉田温泉神社古墳という社殿を祀った前方後方墳がございます。その 1 号墳の後方部側の一端で竪穴住居跡が出てきて、その一隅に祭壇らしき遺構が出てきましたから、吉田温泉神社の前方後方墳の古墳築造に際して、墳丘の裾のところで、葬送の祭祀が行われたということを示す珍しい例なんです。その後に続く古墳が全部方墳だということになると、これ前方後方墳と方墳との関係というのも、これまた問題になってくると思います。

そういうことで、参考資料としましては、第 15 図に北九州の福岡県の祇園山古墳のような古墳出現期に係わるような方形墳もあります。また、まだ内容が良く分かりませんけども、第 16 図の山城八坂古墳ありますとか、第 17 図の大正時代に梅原先生などが問題にした兵庫県の長持型石棺を持った塙場山古墳、前方後円墳の陪塚としての小山古墳、第 18 図が方墳であります。つまり、これもさっき言ったウワナベ古墳とか、コナベ古墳とか、磐ノ媛古墳など佐紀盾列古墳群の 200m クラスの大前方後円墳の脇に方墳が幾つか並列する。つまり、大型前方後円墳に従属する陪塚として大型方墳が 5 世紀代に登場することは間違ひありません。では、大型方墳は 5 世紀代に大古墳に追従して生まれてくるそういう性格を持った古墳であるというふうに考えられるかというと、今、私が指摘したように、それとは異なる条件のものがあります。近年問題になりました群馬県の成塚向山古墳という低い丘陵上にあります方墳、重圓文鏡などを出した古い方墳がございます。島根県、つまり、出雲国は前代から四角い古墳にこだわっている地方だと思います。

今度は問題の竜塚古墳にもどりますと、そういうように日本における方墳の研究というものを、大正時代から今日までまとまって体系的に研究した例はあまり無いんですね。単発的な古墳の報告



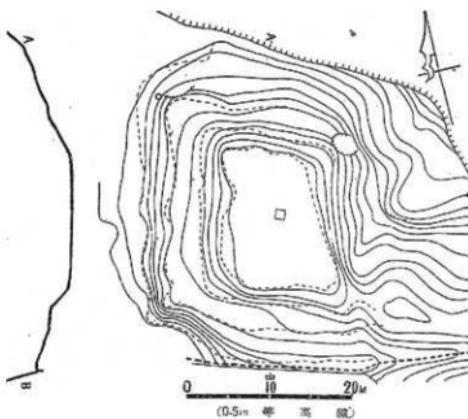
第13図 滋賀県伊香郡高月町 古保利古墳群



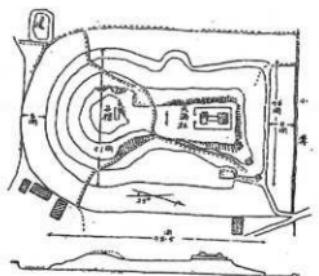
第14図 吉田温泉社古墳群と
那須八幡塚古墳群全体
図と地籍図



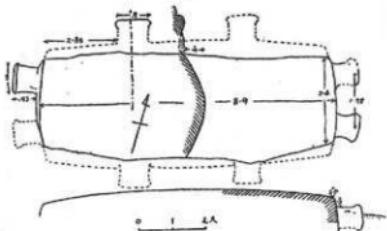
第15図 犬飼山古墳とその外周遺構配置図



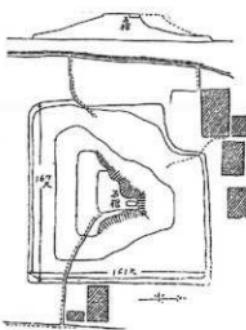
第16図 山城八坂古墳



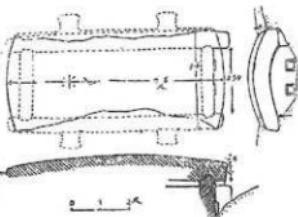
圓形外墳古山塚群



第17図 墓場山古墳外形図、石棺実測図



圓形外墳古山小



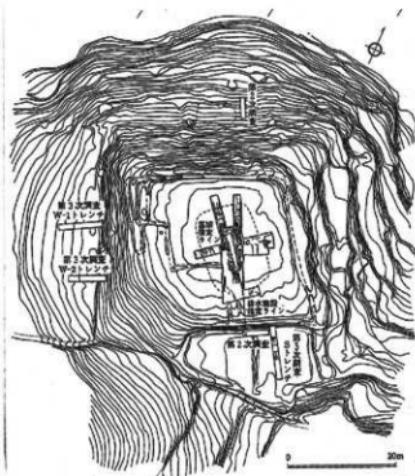
第18図 小山古墳外形略図、石棺実測図



第19図 荒島古墳群と仲仙寺墳墓群



第20図 造山1号墳測量図



第21図 大成古墳発掘区配置図

卉、そういうものはございますが、体系的にやったものではないと私は思います。そこでもう一回、さっきもちよと触れましたけども、古墳時代でも7世紀代に入つくると、中央、畿内だけではなくて、東日本においても同じように前方後円墳が消滅して方墳になっていきます。最近の東日本では、千葉県の印旛沼のほとりで千葉県が調査した浅間山古墳という80m近い前方後円墳がございます。その浅間山古墳の発掘をした結果、冠や馬具などがいろいろ出土しまして、114基の竜角寺古墳群の中で最後の前方後円墳はその80m未満の浅間山古墳だということがはっきりいたしました。浅間山古墳をもって、千葉県では前方後円墳はピリオドを打つ。では、後はどうなるのかというと、同じ竜角寺古墳群の中に岩屋古墳という一辺80mの大方墳が出てきます。これは国の史跡になっています。その岩屋古墳は、すでに江戸時代から発掘されておりまして、横穴式石室が2つ残っているだけです。ところが、浅間山古墳の内部主体と、この岩屋古墳の内部主体とは同じ横穴式石室なんですが、7世紀初頭の浅間山古墳の内部主体は筑波山の周辺から運んできた輝石片岩、片岩系の板石で造った7m近い立派な横穴式石室なんです。7世紀の半ばか、前半の終わりころの岩屋古墳という方墳は、地元千葉県の貝化石を含んだ軟質の凝灰岩質砂岩、親指で強く押せば溶むくらいの柔らかい石なんです。そういう地元の石で構築しているということで、前方後円墳から方墳へ、前方後円墳の石室石材は百数十km以上離れた筑波山周辺から運んできているにもかかわらず、次の一辺80mの岩屋方墳は柔らかい地元産の石をレンガ状に切って積み上げているというよう様相が変わっていきます。

しかし、今口ここで問題にするのは、そういう日本の古墳時代の後半期、終わりに近い時期の方墳論ではなくて、5世紀代の方墳論ということになるわけです。甲府盆地周辺の古墳群形成で、問題となるのは曾根丘陵の古墳群です。従来の山梨県の研究者の編年観に立てば、小平沢の前方後方墳を最も古い例として、大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳、丸山塚古墳、140mの天神山古墳という円墳を含んだ前方後円墳の系列が中心軸になります。しかし、この小平沢の前方後方墳が、中道往還のあの米倉山に登場する前は、今日お見えになっている山梨県埋蔵文化財センターの末木健さんが中心となって調査をした上の平の方形周溝墓群がありますから、こここの地域では前方後方墳が出現する前に、方形周溝墓群が弥生時代の終末から古墳出現期に延々と百数十基の墳墓が代々造られていました。これらの周溝墓群は、切り合つてない。一番大きなものは、一辺30m位の大型方形周溝墓です。上の平のような方形周溝墓群、さらに北山、東山など県立考古博物館の周辺、裏の丘陵の最近の調査で低墳丘の方形墳が出ていて、馬の骨が出土したりしています。4世紀代の後半に四角い低いマウンドを持ったものがあり、上の平と東山北とそういう弥生の最終末から古墳の出現期の四角い墓制から小平沢の前方後方墳との繋がりが迫れるとすれば、それが大丸山古墳や甲斐銚子塚古墳では方墳ではないんですね。前方後円墳と円墳で、曾根丘陵の古墳群が形成されていく。では、一方、笛吹市の八代の方では、岡・銚子塚古墳はどうかというと、岡・銚子塚の前方後円墳の隣が盃塚古墳、岡・銚子塚古墳と盃塚古墳という順序で、その次が竜塚古墳か、あるいは、岡・銚子塚古墳から盃塚古墳からダイレクトに竜塚古墳、竜塚古墳から盃塚古墳、まあ私の考え方では、たぶん岡・銚子塚古墳から盃塚古墳という系譜が迫れて、盃塚古墳の次にあの地域で自分の大きな墓を造った首長は、何と、四角にした。それは自分の好みなのか、集団の好みなのか、性格なのか、親の遺言

なかなか分かりませんけども、とにかく事実は四角い古墳を出現させたということです。笛吹市の岡・銚子塚古墳と竜塚古墳は、同一系譜上の地域首長の墳墓と考えてきたが、墳丘の長さ 92m を算する岡・銚子塚古墳が、甲斐銚子塚古墳に次ぐ世代の首長墳だとすると、岡・銚子塚古墳と甲斐銚子塚古墳、つまり考古博物館に近い方の 169m の大きな甲斐銚子塚古墳と岡・銚子塚古墳との関係論はどうなんでしょう。そういう関係、道筋が辿れるとすれば、その次に現れる竜塚古墳が何で方墳なのか。依然として、竜塚古墳の突発的な方形墳というのはクエスチョンマークです。それで、墳丘長 92m を算する岡・銚子塚古墳が甲斐銚子塚古墳に次ぐ世代の首長だとすると、画文帶神獸鏡・石劍・短冊形鉄斧などを出土した堅穴式石室の状況からも、甲斐銚子塚古墳との系譜的なつながりが強く感ぜられます。私は、甲斐銚子塚古墳と岡・銚子塚古墳は系譜的に、また同族的な地域的なつながりがあるが、しかし、両者間に丘陵が挟まり、深い谷があるから支配領域が違うのか、甲斐銚子塚古墳の首長の政治的な領域と、岡・銚子塚古墳がやや時代が少しずれながら支配していた地域とは違うのか、そういう小地域で違いがあったのかどうかということになってくるんです。そうしますても、岡・銚子塚古墳の支配領域の中で、突如として 55m ~ 56m の竜塚古墳が出てくるということは、甲斐銚子塚古墳に続く直径 72m の大型円墳、丸山塚古墳に対して、八代地区の一辺 55m ~ 56m の方墳という数値は、物理的に一方の優位が想定されるけれども、一系列的な首長層の継承であったとすると、竜塚古墳の示す 5 世紀代前半の突発的な方墳の出現に、墓制上は勿論のこと被葬者の時代的特性としての見方、方墳に拘泥した契機があったのかも知れません。

昭和 55 年、1980 年に花田勝弘氏は方墳の論文を書いています。この論文の中で、近畿地方周辺の方墳一覧表を挙げています。120 基近く古墳を挙げているんですね。この中で、花田氏が注目しているのは、奈良県五条市の猫塚古墳とかいくつかあるんですけど、やや独立的な、他の古墳とはちょっと離れて独立して存在している方墳です。例えば、猫塚古墳が一辺 45m の方墳なんですが、これじつは地元の方が掘ってしまって、出土したものを農家の縁側の下に置いてあったんです。それを後藤守一先生が、たまたま関西の学会の後、五条のあたりを歩いていて、農家の縁側の下に置いてあった甲冑などを発見されたのです。その背の中に、蒙古鉢形冑とか、つまり、大陸系のものがあって、その猫塚古墳は鈎帶金具というか、バックル、金銅の透彫りを持った帶金具、そういうものがあって、極めて中国の晋代、東晋のような時期の鎔帶金具とも関係があるような、大陸的な匂いがぷんぷんとしたものを持っている四角な古墳、やや独立して存在するというような古墳、それをどのように理解するかということで、花田氏はその装備からといって軍事的な役割を担った人間ではないか、つまり、大和王權を支える軍事的な集団の長として、彼はその地域において古墳を造ったんだ这样一个解釈をここでしています。

これが、竜塚古墳に直ちに当てはまるかどうかは分かりませんが、一つの考え方として軍事的な関係論からの見方があると思います。つまり、こういう突発的な大型方墳の出現を、そういう軍事的性格の被葬者として考えるかどうか、これも一つの考え方です。竜塚古墳というのは、かけがえのない他にあまり例のない日本でも折りり数えるくらいの数少ない大方墳です。これをそのまま打ち捨てるわけにはいかない。日本の古墳時代において、5 世紀代の前半頃に、一つの古墳群の中で前方後円墳の系列が続いてきた中で、大型方墳が出現するということは、墓制の大きな転換であつ

て、社会的なイデオロギーの変質にも関係することだと思われます。

5世紀代の墓制の中では、宮崎県の西都原古墳群でも、ただ一基の大型方墳の存在が注目されます。すでに問題とした奈良県の猫塚古墳のほか、島根県の円花庵古墳のほか、近畿地方における大王陵と方形陪塚群との関係にも如実に現れています。実質的な5世紀代の大型方墳の出現の背景に、大和政権の政治的、軍事的な、地方的な展開過程で採用された墓制として、威圧的な革新的な体制を示現する方法として採用されたものであったと考えられます。

それは伝統的な、恒常的な社会慣習を一度は断ち切るようなエネルギーを墓制で示す集団があつたのであろうと思われます。しかし、地域的な伝統としての首長層の墓制であった前方後円墳が消失したわけではなく、各地における政治的な社会関係の推移によって、首長たちの墓は再び前方後円墳が採用されることになります。

何とかせにやあいかん、というのがたぶん笛吹市の市長さんはじめ、地元の皆さんのお気持ちだろうというように思います。ということで、何のはなしをしたか結論がない講演でしたけども、竜塚古墳の重要性というものをご認識いただければ、私の責務は十分果たしたかと思います。

ご清聴ありがとうございました。

主要参考文献

- 梅原末治 1924 「播磨塙山古墳の調査」『人類学雑誌』39-2
宇佐晋一ほか 1951 「山城八坂方墳」『古代学研究』5
北野耕平ほか 1964 「河内における古墳の調査」『大阪大学文学部国史研究室研究報告』第一冊
北野耕平ほか 1976 「河内野中古墳の研究」『大阪大学文学部国史研究室研究報告』第二冊
白石太一郎 2000 「古墳と古墳群の研究」 墓番房
福岡県教育委員会 1979 「祇園山古墳の調査」『九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告』27
栃木県立なす風土記の丘資料館 1997 『前方後方墳の世界II 一那須に古墳が造られたころー』
高月町教育委員会 1995 『古保利古墳群詳細分布調査報告書』
宮内庁書陵部陵墓課 1999 『宮内庁書陵部陵墓地形図集成』 学生社
新旭町教育委員会 2001 『熊野本古墳群現地説明会資料』
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008 『成塚向山古墳群』

竜塚古墳の調査と成果

笛吹市教育委員会文化財課 伊藤修二

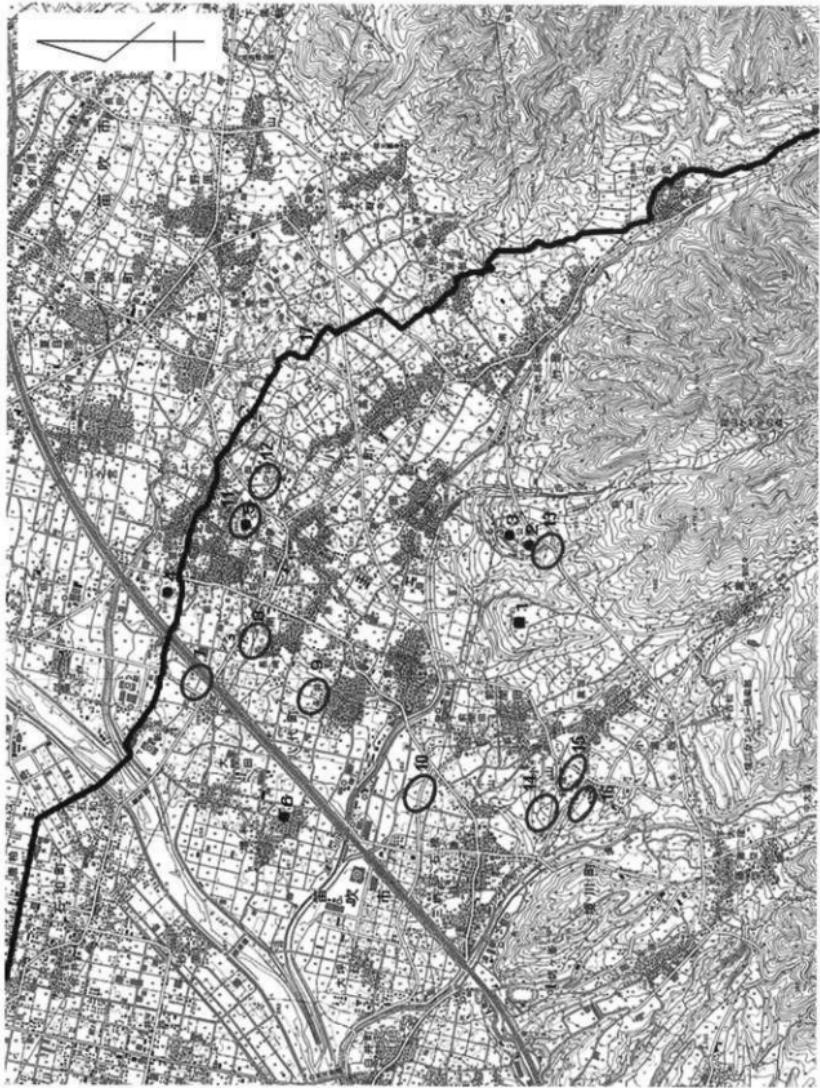
笛吹市教育委員会文化財課の伊藤と申します。よろしくお願ひいたします。

これから、平成12年度から15年度にかけて行った竜塚古墳の発掘調査の状況とその成果についてお話ししさせていただきたいと思います。

この竜塚古墳ですが、太平洋戦争終戦後の食糧難の時代に、当時、竜塚古墳の地権者であった方のものと、「この山の土を売ってくれんか。そうすれば平らになって、いい畑になる」という内容の話が持ち込まれたそうです。ところが地権者の方は、この古墳はとても重要なものだから、後世に伝えなくてはならないと常に考えておられたことから、その話は断られたそうです。このようなことがありますて、現在でも素晴らしい古墳の姿を見ることができます。

では、竜塚古墳がどういった所に立地しているのかということを説明いたします。竜塚古墳は、笛吹市八代町の米倉地内、地元で竜安寺山と呼ばれている上ノ平の丘陵の上にあります。この丘陵は、甲府盆地の南東の縁に連なる曾根丘陵のさらに東側に続く丘陵でありまして、背後に聳えている御坂山塊の山々の一つ、稲山という山ですが、その山の頂山から盆地に向って北西に延びている尾根の末端にあります。ちょうど盆地に向って張り出すような格好で広がっていて、竜塚古墳はその丘陵の先端付近に築造されています。実際に現地に立ってみると、とても眺望のよい所で、概ね180°の視野で盆地を一望することができまして、さらに南アルプス連峰や八ヶ岳などといった山々も望むことができる景勝の地にあることが分かります。

次に、竜塚古墳の周りにある遺跡を紹介します。お示しした地図、第22図は国土地理院の地図ですが、四角で示してあるものが竜塚古墳（第22図1）です。この古墳が築造されている丘陵の東側と西側には深い沢があって、東側の沢、大谷沢川が流れている沢ですが、この沢の東側にもう一つ別の丘陵があります。この丘陵は、通称、銚子原と呼ばれている上ノ原の丘陵ですが、この丘陵上の先端に、先程、大塚先生の講演の中で名前が出てまいりました岡・銚子塚古墳（第22図2）と盃塚古墳（第22図3）があります。岡・銚子塚古墳は、直線距離で竜塚古墳の約600m東側にありますが、4世紀後葉に造られた前方後円墳で、墳丘と周溝を合わせた古墳の総長で105～106mある大きなものです。その岡・銚子塚古墳から約50m東側の所に盃塚古墳があります。盃塚古墳は5世紀代に造られた円墳で、直径23mの大きさがあります。これらが丘陵の上に造られた古墳です。また、丘陵の眼下に広がる扇状地、笛吹川に流れ込んでいる浅川によって形成された浅川扇状地にも、古墳時代中期の古墳がいくつかあります。まず、狐塚古墳（第22図4）、5世紀後半に造られた帆立貝式古墳で、全長46mほどあります。それから、团栗塚古墳（第22図5）、「すんぐりづか」と訛って読みますが、これは5世紀後半の帆立貝式古墳といわれている古墳です。そして、八幡塚古墳（第22図6）、この古墳は扇状地ではなく笛吹川の沖積地にありますが、帆立貝式古墳の可能性が指摘されている5世紀後半に造られた古墳です。このように、4世紀後葉から5世紀後半に



第22図 竜塚古墳位置と周辺遺跡分布図

かけて造られた古墳が、丘陵の上とか、眼下に広がる浅川扇状地内等に点在しています。

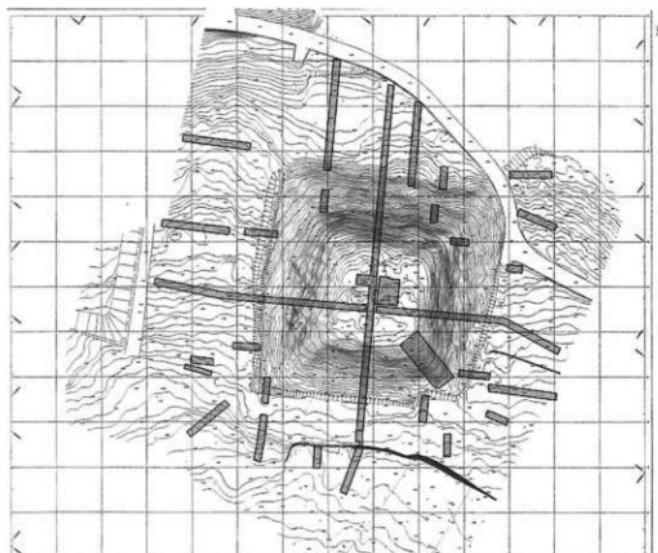
また、扇状地内には古墳以外の遺跡も所在しています。まず、浅川扇状地の扇端部や扇端に近い所にですが、古墳時代前期の集落跡が見つかった身洗澤遺跡（第 22 図 7）や古墳時代前期の住居跡と中期の住居跡が見つかった五里原遺跡（第 22 図 8）、そして、発掘調査で遺構は見つかりませんでしたが、古墳時代中期の土器がたくさん出土した下長崎遺跡三光神地区（第 22 図 9）といった遺跡が点在しています。それから、笛吹市境川町になりますが、石橋条里制遺跡北砂吐地区（第 22 図 10）から、古墳時代中期の住居跡が見つかっています。この遺跡は、扇状地ではなく、沖積地の中にある河川の自然堤防上にある遺跡であります。さらに、浅川扇状地扇尖部の東端寄りの所に、古墳時代前期の住居跡が発見されている伊勢之宮遺跡（第 22 図 11）、それと金地蔵遺跡（第 22 図 12）があります。次に、丘陵の上ですが、古墳時代前期の住居跡ですとか、中期の溝状遺構が見つかった銚子原遺跡（第 22 図 13）、それから、境川町になりますが、古墳時代前期の住居跡や方形周溝墓が見つかった西原遺跡（第 22 図 14）、古墳時代前期の住居跡が見つかった京原遺跡（第 22 図 15）、古墳時代前期の住居跡と方形周溝墓が見つかっている柳原遺跡（第 22 図 16）があります。

それからもう一つ、注意して欲しいものがあります。地図の中に太い線で示しておりますが（第 22 図 17）、これは古墳とか集落跡とかいった遺跡ではなく、若彦路という古道です。この道は、古代甲斐国を通る主要な九本の古道、甲斐九筋といわれる古道の中の一つで、甲府市の東部にある善光寺や酒折宮の周辺を起点にしたといわれており、笛吹市八代町で浅川扇状地の東寄りの所を抜けて、富士河口湖町の大石へと繋がっている道です。この道は、鎌倉時代に編纂された『吾妻鏡』という書物に、治承 4（1180）年 10 月に行われた源氏と平家による富士川の合戦の際に、甲斐源氏が軍を進めた道としてその名が記載されていることから、おそらく平安時代にはすでに甲府盆地と駿河を結ぶ重要な道となっていたと思われます。また、それよりも前の奈良時代や古墳時代においても、近畿や東海地方の進んだ文物がこの道を通って甲府盆地にもたらされていたと考えられます。つまり、甲府盆地への出入り口の一つにあたる浅川扇状地は、古くから重要な地域であったと考えられます。

このような地理的、歴史的環境の中にある竜塚古墳ですが、平成 12 年度から 15 年度に行った発掘調査以前にも 2 回の調査が行われています。調査といつても発掘調査ではありませんが、最初に行われたのが昭和 50 年に刊行された『八代町誌』の編纂に伴う測量調査です。続いて行われたのが、『山梨県史』編纂に伴う測量調査で、平成 8 年に行われております。この 2 回の測量調査によって、どういったことが分かったのかといいますと、まず一辺が約 52m の方墳であるということです。そして、墳丘の高さが約 7.5m あるということ。それと、2 段築成の古墳であるということです。古墳の東側と南側で幅 11m 前後、西側で幅 13m 前後の周溝が巡っているということです。それから主体部ですね。遺骸を葬った所なんですけれども、位置とか形態とか測量調査では明確に分かりませんでしたが、古墳の墳頂に祀られている石祠の周りに、複数の石が散在していたことから、堅穴式石室の可能性が指摘されていました。古墳の造られた時期についても、古墳の立地している場所から、古墳時代後期以前だろうとか、中期であろうとか、前期であろうとか言われていました。

第23図を見てください。これは、平成8年に山梨県史編纂室が作成した測量図です。等高線が綺麗に真四角になっています。発掘調査は、図に示したようにトレンチを設定して行いました。もちろん、これらのトレンチを設定するにあたっては、学術調査ですので、事前に地中レーダーによって調査を行い、それによって得られたデータを基にしまして、できるだけ古墳を傷める場所を少なくしようとすることでの、必要最小限のトレンチを設定して調査しました。

ただ、調査を行



第23図 竜塚古墳発掘調査トレンチ設定図

った時点では、馬入れ道以外はすべて民有地で、加えて古墳の周りは、ほとんどが果樹等の畠ということもありまして、本来なら規則的にトレンチを入れて調査したかったのですが、果樹等の関係から、ところどころでトレンチを曲げて設定したりとか、トレンチの位置をずらして設定したりしました。ただ、今回の調査は、地元の皆さんのご協力があって、初めて行うことができました。この場を借りてお礼申し上げたいと思います。

では、実際の調査の状況を説明します。写真1を見てください。これは、古墳北側の墳丘に設定したトレンチを作業員さんに掘っていただいたところですが、このように石がたくさん出てきました。そこで、この石はいったい何だということで、浮いている石を慎重に外しながら調査を進めていったところ、写真2のように、墳丘の斜面を覆う葺石が姿を現しました。この葺石の斜面を細かく観察してみると、石が上下に真直ぐに並んでいる所が目に留まります。



写真1 第21トレンチ墳丘北側斜面の調査状況

これは区画石列と言いまして、私も教えていただいたのですが、古墳に石を葺く時には、先にこういう石列で斜面に区画割りをしてから、区画ごとに石を葺いていくというような作業単位を示す区画です。写真3は、先程の葺石で覆われた墳丘斜面の下の方を、少し横の方から見た写真ですが、注意して見てもらいたい所が、葺石のすぐ下の所です。墳丘が平坦な面になっています。この平坦な面が段築です。このトレンチのセクション図を、第25図に載せました。葺石の下に3m程度の平坦部分がみられます、この平坦部分が段築です。写真4は、古墳の北側を調査したトレンチの全景を撮ったものです、葺石で葺き上げた墳丘斜面と段築、葺石の見られない墳丘斜面、そして古墳の墳端がみられます。葺石については、他のトレンチでもそうですが、段築から上の墳丘斜面では葺石が見つかっています。ところが、段築の下になりますと葺石は一切見られません。それから、墳丘に葺き上げられた葺石が崩れて、古墳の墳端部分にたくさん堆積している例も他の古墳ではありますが、竜塚古墳の場合は墳端部分にそういう崩れてきた葺石の堆積は見つかっていません。このことから、段築を境に上の墳丘斜面には葺石を葺き上げていますが、段築から下の墳丘斜面には葺石を葺き上げなかつたといえます。

今度は、先程までのちょうど反対側になりますが、南側の墳丘斜面です。調査してみると、写真5のように石



写真2 第21トレンチ墳丘北側斜面の葺石



写真3 第21トレンチ北側の墳丘で検出された段築

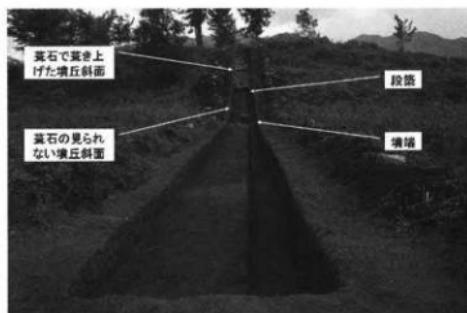
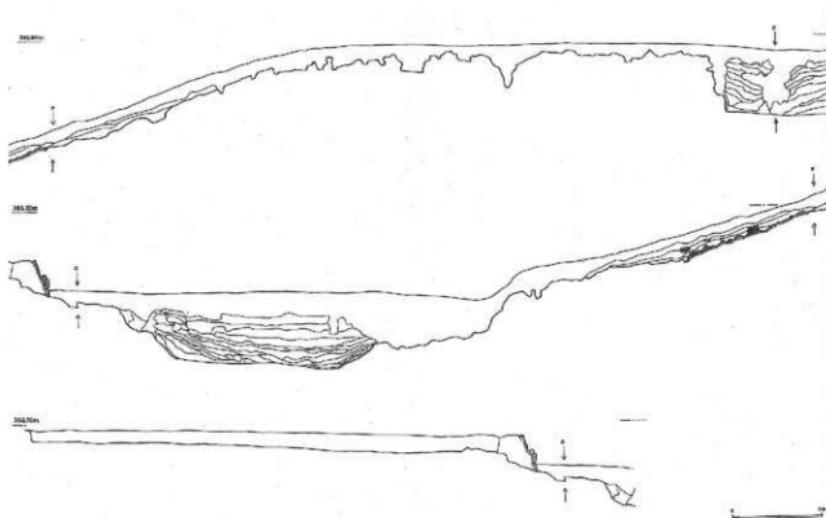
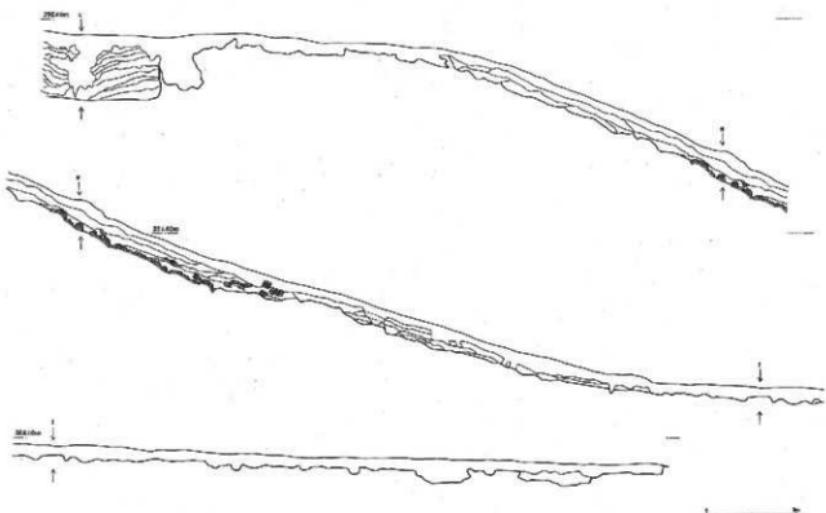


写真4 古墳北側を調査した第21トレンチの全景



第24図 第21トレンチセクション図 (1)



第25図 第21トレンチセクション図 (2)



写真5 第21トレンチ填丘南側斜面の調査状況



写真6 第21トレンチ填丘南側斜面の葺石



写真8 古墳南側を調査した第21トレンチの全景



写真7 填丘南側で検出された周溝

がたくさん出てきました。これらの石の中には、浮いているものがありますので、浮いている石を慎重に取り除いてみますと、写真6に見られるような葺石が現われました。ちょうど、段築の平坦面から上側の填丘斜面へ変換していく所に葺石の基底部にあたる大きな石を据えて、斜面に葺石を葺いているという状況が分かります。そして、ここでも区画石列を一列見ることができます。それから、こここの填丘の下には、写真7に見られるような古墳の墳端と周溝

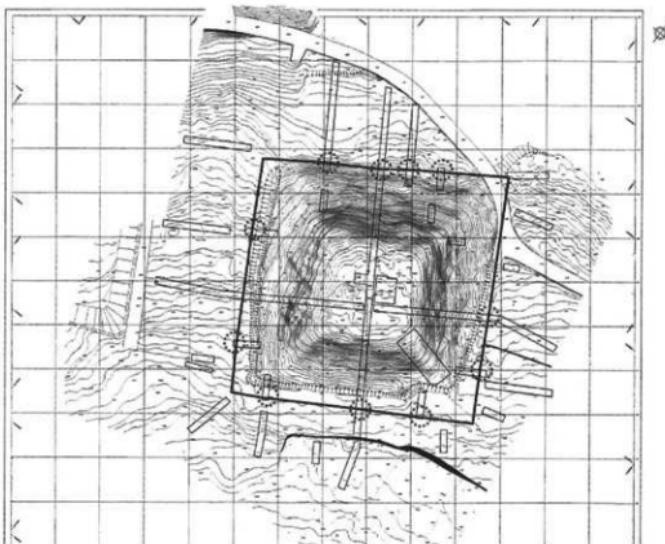
が確認されました。周溝の幅は6m程度で、黒っぽい土で埋めつくされていました。先程も言いましたが、古墳の墳端付近には、填丘に葺き上げられた葺石が崩れてきて、たくさんの石が堆積している例がありますが、こここのトレンチでも石は堆積していませんでした。加えてですね、葺石も見られないことから、段築の下側には葺石を葺き上げなかったということが言えると思います。写真8は、古墳の南側を調査したトレンチの全景になりますが、葺石で葺き上げた填丘斜面と段築、葺

石の見られない墳丘斜面が段築の下にあります。古墳の墳端、さらに、周溝が見られます。このような状況が調査されました。

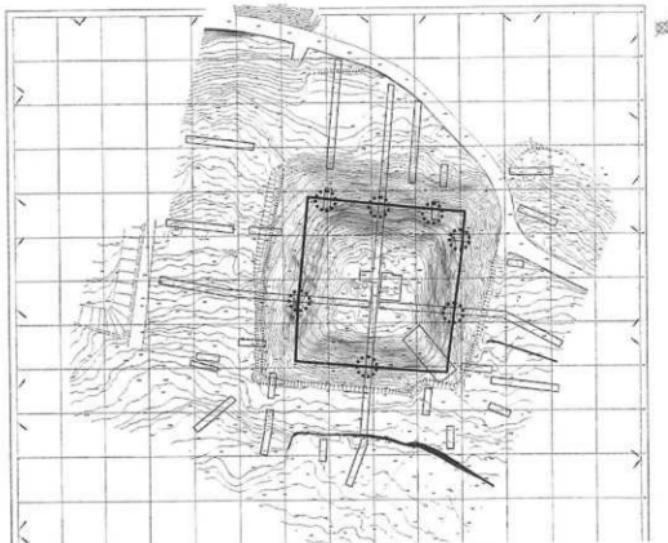
ここで第 26 図をご覧ください。発掘調査のトレンチ設定図に点線で丸印を付けてみました。この丸印の所から、今回の発掘調査で古墳の墳端が確認されています。そして、これら確認された墳端を線で結んでみると、図に示したような感じで古墳の墳端が復元できます。ただ、ここで注意していただきたい点がありますが、古墳の四隅にあたる所、ここは今回調査しておりません。線自体は直角に近いような形で結んでおりますが、四隅がこの図のように直角になるのか、それとも少し丸みを持って変換していくのかについては、今後の課題なのかなと思います。

次に第 27 図です。先程と同じように、発掘調査のトレンチ設定図に点線で丸印を付けました。ここからは、葺石の基底部にあたる石が見つかっています。これら葺石の基底部にあたる石が見つかっている所を、先程同じように線で結んでみると、図に示したような感じで葺石の基底部があるようです。そして、第 2 トレンチや第 8 トレンチ、第 21 トレンチで確認された段築の状況から考えると、基底部から 3m から 3.5m の幅の段築が巡っているものと考えられます。

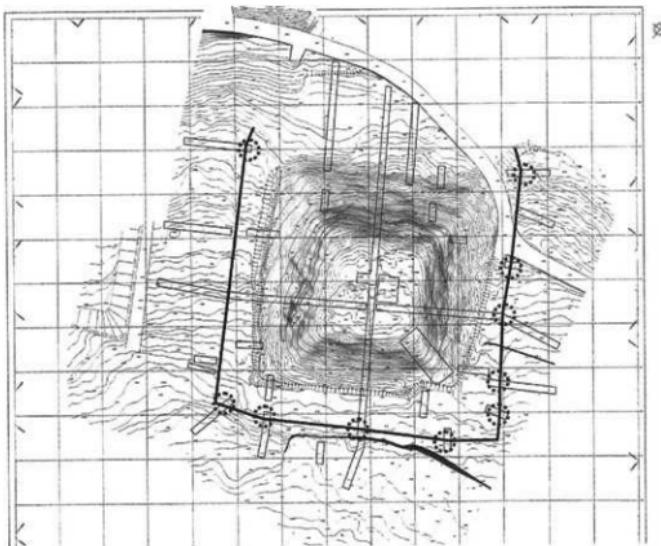
それから次、第 28 図ですが、周溝外側の立ち上がりが見つかっている所に点線で丸印を付けてみました。そして、これも線で結んでみると、古墳の北側では、はつきりとらえることができませんでしたが、それ以外の所は、墳丘に沿うような形で周溝が巡っているということが考えられます。



第 26 図 竜塚古墳の墳端復元状況



第27図 竜塚古墳葺石基底部の復元状況



第28図 竜塚古墳の周溝外側の位置復元状況

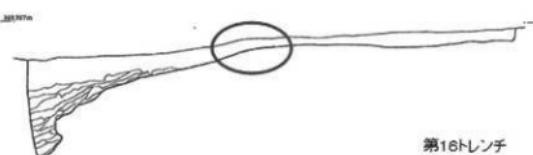
ところで、一つ注意して見て欲しい所があります。写真9は、古墳の南東側に近い第31トレンチですが、耕作土を掘ると黒っぽく見える土と黄色っぽく見える土、ソフトロームが現れます。そして、この黒っぽく見える土を掘ってみると、写真10のような周溝が現れます。注意していただきたい所は、この周溝の外側にあたる部分です。第29図にある第31トレンチのセクション図で、丸印の所を注意して見てください。セクション図では、丸印よりも右側の地山の上面は平坦なんですが、丸印の所を境に、左側の地山の上面が周溝側に向かって少しづつ下がっていっており、深い周溝へと落ち込んでいきます。つまり、深い周溝の外側に浅い周溝が存在しているように感じられます。そしてもうひとつ、第16トレンチにおいても、第31トレンチと同じような状況が見られます。ですから、深い周溝があって、どうもその



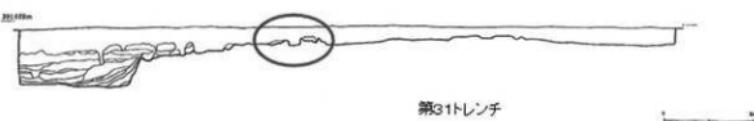
写真9 第31トレンチ周溝プラン確認状況



写真10 第31トレンチ周溝完掘状況

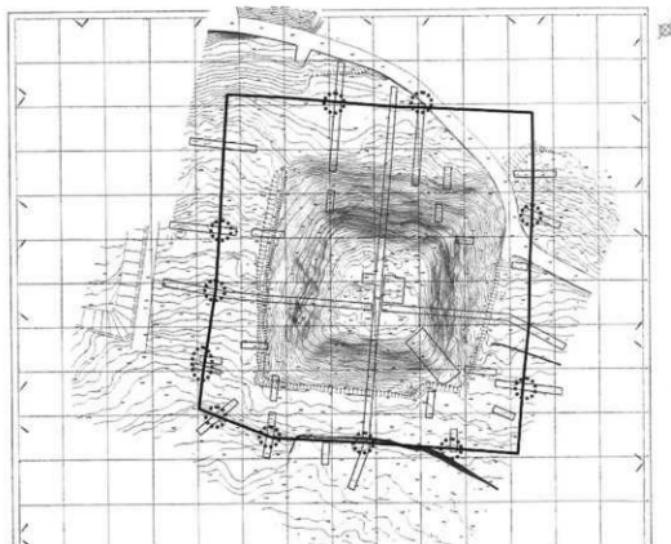


第16トレンチ



第31トレンチ

第29図 第16トレンチ、第31トレンチセクション図



第30図 竜塚古墳の範囲図

外側に浅い周溝が存在しているように考えられます。そこで第30図、そういった平坦な地山から周溝側に向かって少しづつ下がっていくように変化をしている変換点に、点線で丸印を付けてみました。そして、これらを線で結んだ東西72m、南北78mのエリアが竜塚古墳の範囲であると考えています。

次は、いよいよ古墳の主体部について話を進めていきたいと思います。主体部については、前にも触れたように、位置や形態等まったく分かっていませんでした。ところが、写真11のように墳頂に石の祠があって、その周間に石がいくつか露出していたことから、堅穴式石室の可能性が示されていました。そこで、これらの石が堅穴式石室に関係するものかどうかを明らかにするための調査を行いました。周囲の表土を除去したり、元位置を留めていない石を取り除いたりしながら、慎重に調査を進めたところ、墳頂に露出していた石は、写真12・13に見られるように、堅穴式石室に関係するものではなく、祠を祀るために造った石積みの壇であることが分かりました。さらに調査を進めたところ、石の間から「寛永通宝」数枚が出土したことから、この石積みの



写真11 竜塚古墳の墳頂に祀られた石祠と周囲に露出している石

壇は江戸時代のものであることが分かってまいりました。そこで、この石積みの壇の石を取り除きながら調査を行ったところ、ところどころで後世のかく乱を受けていましたが、写真 14 に見られるように、周りに見える壇丘の盛土に比べて、色が少しくすんだよう見える土が面的に広がっている状況が確認されました。これが竜塚古墳の主体部、墓坑ではないかと考えまして、平面的な形とか大きさとかを詳細に調査したところ、平面プランは隅丸長方形で、大きさが東西 9.2m、南北 3.6m であることが分かりました。そこで、見つかった墓坑と考えられる落ち込みの東西の中ほどを、南北に縦断している第 21 トレンチの中にサブトレンチを設定して、この落ち込みが本当に墓坑なのかどうかを探るために調査を行ったところ、壇頂から 1.5m ほど掘削



写真 15 第 21 トレンチ主体部のサブトレンチ調査状況



写真 12 墓頂に露出していた石の調査状況 (1)

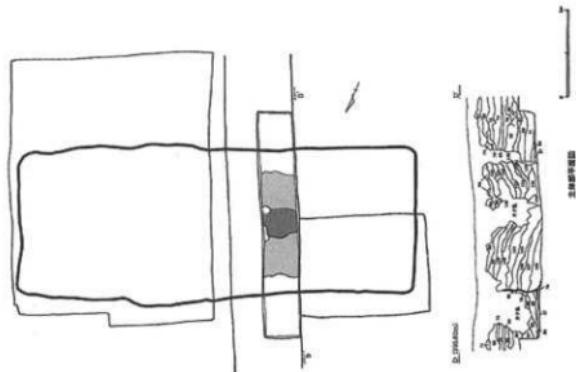


写真 13 墓頂に露出していた石の調査状況 (2)

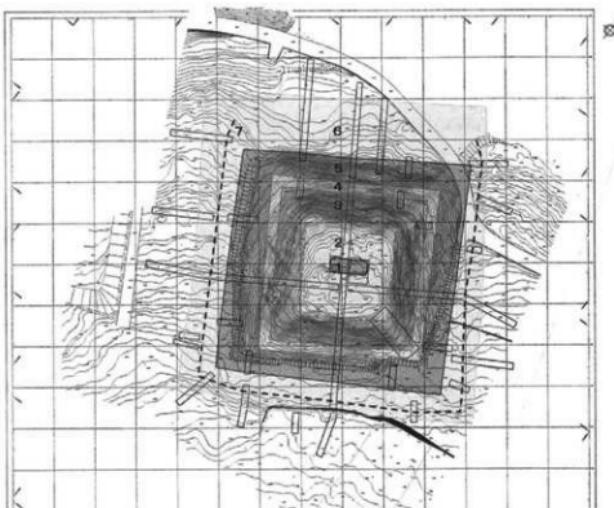


写真 14 検出された竜塚古墳の墓坑

したところで、写真 15 に見られるような土の変化を確認しました。そして、サブトレンチ内の土層を確認したところ、第 31 図に見られるように、両側が墳丘の盛土で水平な土層が見られ、その間が墓坑の覆土で、両側から中心に向って落ち込んでいくような堆積の状況が確認されました。ここで、墳丘の盛土と墓坑の覆土の境を注意して見てください。図では線を少し太くしてありますが、墳丘の盛土と墓坑の覆土との境の線の下の部分が内側へ向うように変化しています。ここが墓坑の底にあたる所ではないか。まあ、確実に底になるかどうかは、そこまで調査していませんので、は



第31図 竜塚古墳の主体部平面図



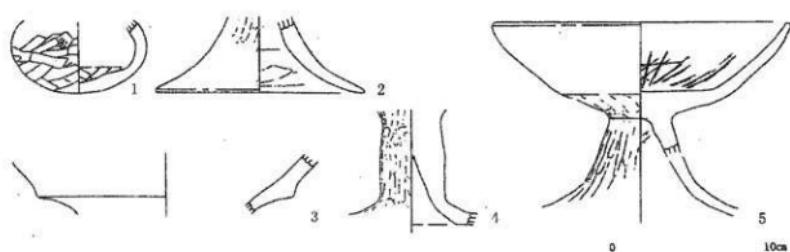
第32図 竜塚古墳の概念図

つきりと言いたいが、底に近い所であるようです。そして、今回、サブトレンチをこの深さまで掘って調査しましたが、これまでのところ石が一つも見つかっていないので竪穴式石室ではないようです。粘土層の可能性も考えてみましたが、粘土らしいものが見つかっていないので粘土層でもないようです。そうすると、今回の調査だけでは確実にそうであると言いたいが、木棺直葬の可能性が高いように考えられます。

第32図を見てください。これは古墳を真上から見た概念図です。墳頂の中央付近にあるもの、数字の1の所、ここが古墳の主体部です。その周りで、数字の2の所が古墳の墳丘部分です。少し見づらいですが、数字の3の所が葺石を葺き上げた墳丘斜面です。それから、その周りの数字の4の所が段築で、幅が3m～3.5mあります。そして、段築の周りで数字の5の所が葺石を葺き上げていない墳丘斜面となり、その回りの数字の6の所が周溝となります。周溝の中には、破線7が引かれていますが、この破線の内側が深くて明らかに周溝と分かれる所になります。ちょうど墳丘の北側の方には、深くて明瞭な周溝は見られませんが、だいたいこのような感じが竜塚古墳であると考えています。また、先程も言いましたが、墳丘や周溝のコーナーにあたる部分については、今回、調査していないので図で示しているように直角に変換しているのか、丸みを帯びて変換しているのかは今後の課題となります。

今回の調査で出土した上器ですが、第33図をご覧ください。第16トレンチ、周溝の南西コーナーに近い所に設定したトレンチですが、ここの周溝の覆土中から小型の丸底壺の体部の破片（第33図1）が出土しています。また、第2トレンチで、墓坑の南側にあたる所から、高坏の脚部の破片（第33図2）と高坏の口縁から脚部にかけての割と大きなもの（第33図5）が出土しています。それと、第21トレンチの墳頂部北端、墳丘斜面への落ち際から、有段口縁壺の口縁部破片（第33図3）と棒状を呈する高坏の脚部の破片（第33図4）が出土しています。これらの出土土器を山梨県の上器編年に照らし合わせて見ますと、5世紀前半あたりに落ち着きそうなんですね。このようなことから、竜塚古墳が築造された時期を考えてみると、木当は副葬品などを含めて時代を考えた方がよいのですが、出土した遺物から導き出すと5世紀前半ということになります。

ここで、今回の調査で明らかになったことをまとめてみます。まず、一辺の長さが55m～56mある大きな方墳であること。墳丘の高さが約7.4mであること。幅3m～3.5mの段築を1段持つ2段



第33図 竜塚古墳出土土器

地域(県)	市町村名	名称	規模	築造時期
千葉	印旛郡栄町	岩屋古墳	79m×80m	7C前半
千葉	山武市	駄ノ塚古墳	62m	7C前半
群馬	前橋市	総社愛宕山古墳	56m	7C前半
山梨	笛吹市	竜塚古墳	55m×56m	5C前半
群馬	前橋市	宝塔山古墳	49m×54m	7C末
長野	東御市	中曾根親王塚古墳	52m前後	5C後半
埼玉	鴻巣市	下忍法義寺古墳	45m	不明
群馬	前橋市	蛇穴山古墳	39m×43m	7C末
千葉	富津市	割見古墳	40m	7C前葉
埼玉	行田市	戸場口山古墳	40m	7C中葉
愛知	一宮市	稻荷山古墳	40m	7C前半

第2表 一辺40m以上の規模を有する東日本の方墳

築成の古墳であること。段築を境にして、上の墳丘斜面には葺石を葺き上げているが、下の墳丘斜面には葺石を葺き上げていないということ。古墳の周溝は東側、西側、南側で、外側が浅く、内側が深くなる二段構造をしているが、北側では浅い周溝だけで、幅は6mから14m程度であるということ。古墳の範囲は東西72m、南北78mであるということ。主体部は墳頂の中央付近にあって、墓坑の大きさは東西9.2m、南北3.6mであるということ。埋葬主体は木棺直葬の可能性が高いこと。古墳の築造時期は5世紀前半であるということ。以上のことが分かりました。

最後になりますが、東日本に見られる40m以上の方墳を第2表にまとめてみました。見落とし等があるかもしれません、そのあたりはご容赦いただきたいと思います。この中で、50mを超える古墳についてみると、竜塚古墳以外に岩屋古墳、駄ノ塚古墳、総社愛宕山古墳、宝塔山古墳、中曾根親王塚古墳と6基あります。一番大きな方墳は、7世紀前半に築造された岩屋古墳で、しば抜けた大きさです。竜塚古墳はというと、4番目の大きさを持っています。ところが、この中で6世紀以前というように時期を絞り込んでみると、竜塚古墳が最も大きな方墳と言えるようです。ただ、5世紀後半に築造された中曾根親王塚古墳が現状で52m前後の大きさですから、もしかしたら竜塚古墳と同じくらいの大きさの古墳になる可能性はあります。しかし、東日本の中で6世紀以前に造られた方墳の中で、竜塚古墳は最大級の規模を有する方墳であることは間違いないと思います。

以上、竜塚古墳の発掘調査の状況と、その成果についてお話をさせていただきました。本当に拙い話でしたが、最後までご静聴いただきましてありがとうございました。

主要参考文献

- 橋本博文 1984 「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地－その歴史と地域性－』
雄山閣
- 坂本美夫 1997 「竜塚古墳の測量調査」『山梨県史研究』5
- 坂本美夫 1998 「甲斐における部民制の成立とその態様－伝豊富村出土F字形鏡板付轡を中心として－」『山梨県史研究』6
- 境川村教育委員会 1998 『遺跡分布地図』
- 八代町 1975 『八代町誌』(上巻)
- 八代町教育委員会 1990 『遺跡詳細分布調査報告書』
- 八代町教育委員会 1995 『山梨県指定史跡 岡・銚子塚古墳－保存整備報告書－』
- 八代町教育委員会 2004 『竜塚古墳』
- 山梨県 1998 『山梨県史』資料編1 原始・古代1
- 山梨県 1999 『山梨県史』資料編2 原始・古代2
- 山梨県教育委員会 1986 『若彦路』

甲府盆地における古墳の出現と発展

帝京大学山梨文化財研究所 宮澤公雄

帝京大学山梨文化財研究所の宮澤と申します。よろしくお願ひいたします。

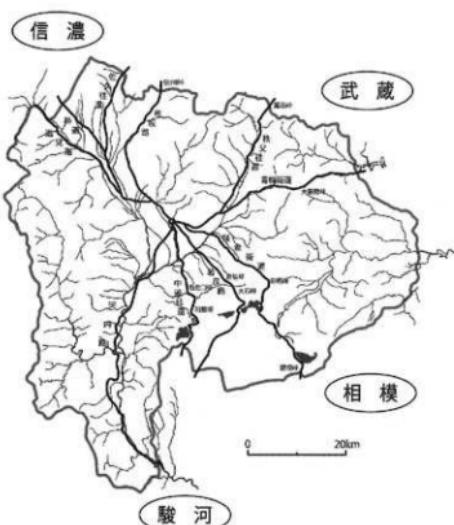
本日、私に与えられましたテーマは、竜塚古墳を考える上で鍵になるということで、竜塚古墳が成立する以前の山梨県内の古墳の状況について話をしろ、ということでございます。そのへんの状況は、今日お越しいただいている三先生方はよくご存知なわけですけども、もう一度、成果をここでお話させていただいて、竜塚古墳を考える上でのヒントにしていただければというふうに思います。おそらく今日のシンポジウムだけで、竜塚古墳の性格が分かることはないとおもいます。まあ、方向性は見えてくる可能性はあるでしょうが、今日の議論が決定打になるということではありませんので、今日、会場にいらっしゃった皆様方も 1600 年くらい前の時代に思いを馳せていただけて、竜塚古墳にどんな人が葬られてきたのかということを考えていただければというふうに思っております。では、時間もございません。私の発表は 12 時 15 分までと言われておりますので、話を進めていきたいと思います。お付き合いをよろしくお願ひいたします。

まず、竜塚古墳の成立を考える上で非常に重要なのが、古墳ができる前の甲府盆地の状況がどうであったかということだと思います。甲府盆地に古墳が出現したのが何時であって、どういうような古墳が造られたのか。これは大塚先生の話にも再三出てまいりましたが、この辺りをちょっと触れておきたいと思います。そして、甲府盆地に古墳が造られ始めて定着し、どのように発展しながら竜塚古墳が造られていくようになったのか、ということにも触れたいと思います。まず、中道地域に古墳が造られるわけですが、それ以降、甲府盆地のいろんな所に古墳が広がってまいります。その状況についてもお話をさせていただきたいと思います。竜塚古墳が四角いお墓ということで、県内の方形墳についていくつか事例がありますので、その紹介もさせていただきたいというふうに思っています。

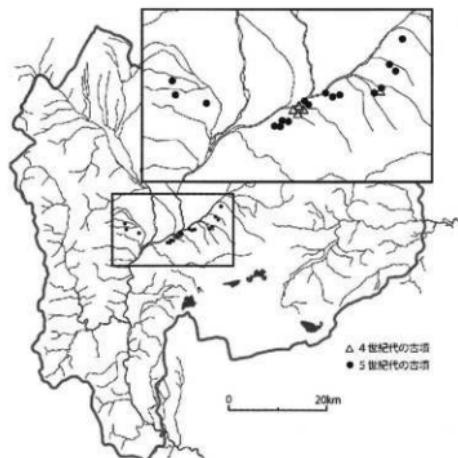
初めに第 34 図、これは甲府盆地の図であります。甲府盆地というのは皆さんご存知のことと思いますが、四方を山に囲まれておりますので、他地域と交流をする場合に、その出入り口については非常に限られています。ここに示しましたのは、おそらく中世、古代にまで遡ると思いますけども、九筋と呼ばれているものがあります。甲府盆地からいろんな所に交流で出て行く所です。北西側へ行けば信濃でありますし、北東側へ行けば武藏、南側へ行けば相模とか駿河とかいう所がありまして、こういう所と交流があったと思います。そこで、古墳ができる前の弥生時代の土器の状況はどうであったかといいますと、乱暴な言い方をしてしまえば、中部高地という所で一括りでできる所があります。ですから、甲府盆地というのは中部高地ということで一括りしておりますけども、古墳時代に近くなきますと、東海系の土器がたくさん入ってまいりまして、古墳時代に近づくに従って、信濃地域の土器と東海地域の土器がせめぎ合う状況が出てまいります。そして、さらに古墳時代に近づいてきますと、東海系の土器の方がどんどん席捲してきて、東海地域との繋がり

りが大きくなってくるというような状況が読み取れるかと思います。

次に第35図、ここに示しましたのは、甲府盆地における前半期古墳の分布であります。白抜きの三角形で示しましたのが、4世紀代の古墳といわれているものであります。白抜きの三角形が重なった所が中道地域で、分布の中心になります。先程からお話しがあります小平沢古墳とか甲斐銚子塚古墳などがある地域であります。それともう一つは、八代地域の岡・銚子塚古墳であります。ですから、4世紀代の古墳というのは、非常に少ないものであります。そして、5世紀代に至りました後も、中道地域を中心とする中道・境川地域と、八代・御坂を中心とする地域、豊富・三珠を中心とする地域、それと櫛形とか甲西を中心とするような狭西地域に分布が限られます。ですから、私の話は前半期の古墳というような言い方で括らせていただきますけれども、この辺りでいいますと、姥塚古墳とか有名な古墳がありますけども、古墳の横に入り口ができる以前のもの、だいたい6世紀の前半位までのものを古墳時代の前半期古墳ということでお話しをさせていただきますが、これ位しか無いわけであります。見つかっていない古墳もありますし、先程、伊藤さんの方のお話にありました八幡塚古墳とか、良く分かっていないものもあります



第34図 甲府盆地の交通路



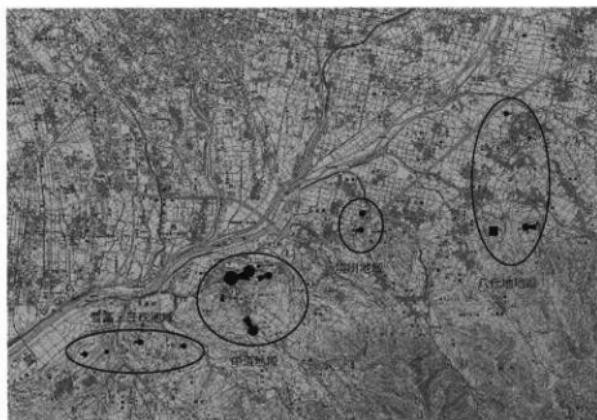
第35図 甲府盆地の前半期古墳分布図

ので、多少数は増えてくるかとは思いますが、それでもこれ位しかないというような状況です。これから、古墳が甲府盆地に定着して、どういうふうに発展していくかということについてお話をていきたいと思います。

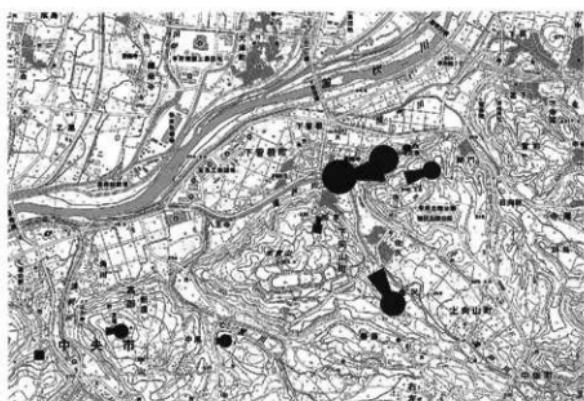
第36図が甲府盆地東側の古墳分布の拡大図です。左下が豊富・三珠地域、中ほどが中道地域や境川地域、右上方が八代地域です。だいたい前半期の古墳というのは、このように分布しています。その中でも、中道の地域に大きな古墳がいくつか造られておりますが、今回、問題になっております竜塚古墳というのは八代地域にあります。地図に対して古墳の大きさは、ちょっと見にくくもありますから拡大してありますけれども、この中に示してあります古墳の大きさについては比例しております。図の中で大きい古墳といふのは実際にも大きい古墳ということで理解してください。

第37図が中道地域の地図を拡大した部分であります。このように古墳が非常に集中している地域でございます。米倉山、東山古墳群といふのがあります。甲斐銚子塚古墳や丸山塚古墳、大丸山古墳などがあります。考古博物館の周辺にも、もうちょっと時代は新しくなりますけど、小さな低墳丘の古墳が多く造られていて、現在整備されています。

それで、先程の図ではちょっと分かりにくかったので、第38図をご覧ください。甲斐



第36図 曽根丘陵周辺地域の古墳分布図



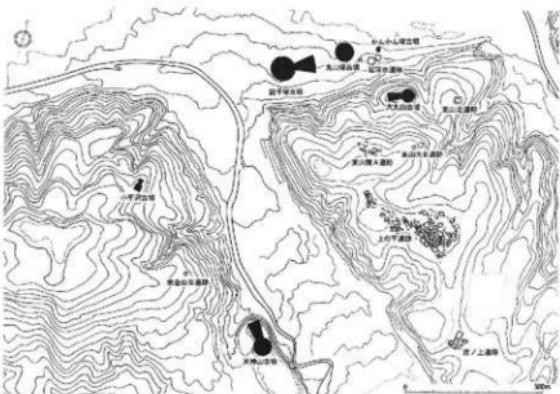
第37図 中道地域周辺の古墳分布

銚子塚古墳とか丸山塚古墳があります。上の平遺跡は、大塚先生のお話にもありましたように、140基くらいの方形周溝墓群が整然と並んでいます。これは弥生時代の後半から造り始めまして、古墳時代の初頭まで造り続けています。その中で最後の段階になってきますと、この墳墓群の中で一番大きな墳墓が造られます。

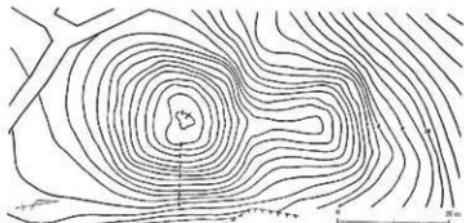
一辺30mもあるような大方形周溝墓であります。小さ

な古墳よりも大きな方形周溝墓なんですが、この方形周溝墓というのは、あくまで集団墓地で、一定の区域の中から決してその場所を離れることなくお墓を造り続けているということで、古墳とはちょっと一線を画して考えるべきであろうというように思います。上の平の方形周溝墓群が造り終わる頃になりますと、図の左側になりますが、米倉山の方に前方後方墳であります小平沢古墳というものが出てまいります。その後、谷を挟んだ東側の東山の方にお墓を造る位置を変えまして、前方後円墳が造られるようになります。今日は、写真をいくつかパソコンの中に入れてきましたので、それぞれの古墳について、少し紹介したいと思います。

まず、小平沢古墳ですが、米倉山にあります。第39図、山梨県内で唯一知られている前方後方墳で、四角い墳丘に四角いものをくっ付けたものであります。全長が45m程あり、内部主体等よく分かっていないのですが、過去に調査しましたら、石がまったくなかったということから、石室を設けない木棺直葬か粘土槨だろうと考えられています。道路工事の際に、鏡とか、管玉とか、土師器が拾われており、鏡は船載二神二獸鏡という大陸から持ってきた鏡であります。地域に前方後円墳よりも前方後方墳が先行して造られるという例は、長野、静岡、神奈川など周辺地域でも



第38図 中道米倉山・東山地域の墳墓群



平面図

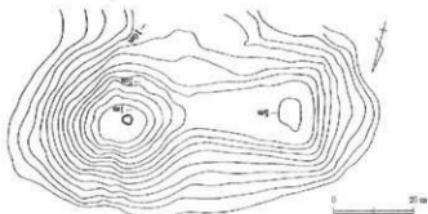


舶載二神二獸鏡

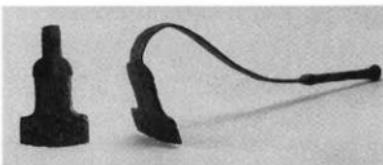
第39図 小平沢古墳

いくつか事例として知られており、山梨もそのうちの一例ということあります。

唯一の前方後方墳である小平沢古墳が造られまして、次の古墳はどういう古墳になっていくのかというと、前方後円墳になります。それが、第40図の大丸山古墳といわれております。考古博物館のちょうど裏手にある山の上にあって、今はうっそうとしておりまして、なかなか確認できないんですけども、こういうような形であります。調査がされておりますけれども、全長が99mともいわれますし、120mともいわれます。20mほど大きな差があるんですけども、実際、ちょっとよく分かりません。100m前後の大きな古墳であると理解してください。この古墳は、後円部上、墳丘の丸い所に遺体を葬った石室が見つかっておりますけども、板石を組み合わせた四角い箱のお棺の上に、平石を積み上げた竪穴式石室を設けた、全国的にも例のないような石室を持っております。石棺の中には人が葬られているわけですが、鏡が3面と、勾玉、管玉などのアクセサリー、身につけるような物が遺体と一緒に入っておりました。鏡3面のうち、一部は割れていますけども、このような三角縁神獣鏡がありまして、それから、八禽鏡という鳥のような絵が描いてある鏡も出ております。三角縁三神の神獣鏡は、岐阜県や静岡県にも同じような鏡があるということあります。また、人を葬った時に使用した石枕も出ており、これは非常に大きなもので、当初から2人埋葬するためのくぼみがある非常に特異なものであります。一方、上の石室内には身につけるようなものではなくて、農工具類ですか、あと刀、剣などの武器・武具類も非常にたくさん出ております。全国的にも非常に古い堅矧板革綴短甲も出ております。農耕具類も非常に豊富に出土しております。鐵製の斧は柄を直接つけるものと、ソケット状になっていて柄を入れ込むようなものがあります。また、槍鉋（やりがんな）といって、今、鉋というと、大工さんが使う鉋、平鉋ですけども、以前の鉋は槍鉋がありました。それに加えまして、こういう柄から刃のほうまで全部鉄で作った手斧（ちような）というものも出ております。ちょっと写真では分かりにくいんですけども、刻目



平面図



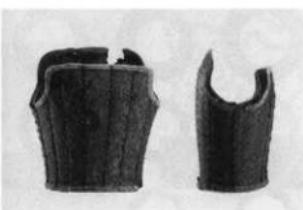
鉄製柄付手斧



三角縁三神三獸鏡



石枕

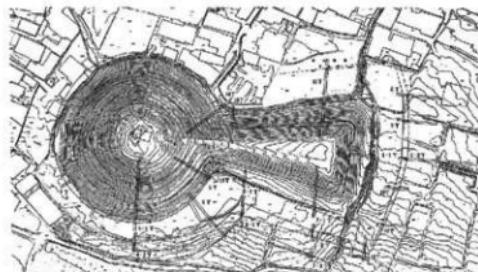


堅矧板革綴短甲

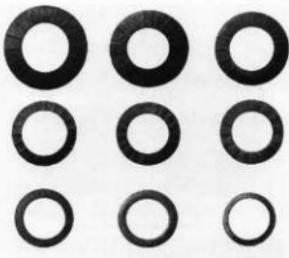
第40図 大丸山古墳

の模様が施されておりまして、非常に素晴らしいものであります。全国的にもまったく例のないようなものであります。

そして、大丸山古墳と非常に近い時期であります。次に造られるのが第41図の甲斐銚子塚古墳であります。大塚先生のお話にもありました。全長が169mあります。一人を葬るために、6m×50cmもあるような長大な竪穴式石室を後円部の真中辺りに造っています。また近年、新しく整備するために調査をしておりまして、後円部の北側辺りから木製品なんかが見つかっております。また、ばらばらになってしまって復元できるものは少ないんですが、墳丘には円筒埴輪や壺形埴輪などが建て並べられていました。鏡は、三角縁神人車馬画像鏡など5面も出土しており、その他に装飾品、勾玉とか、管玉があります。あと石製品ですね。右上ののような腕飾り類、右下のような石の杵のようなものも出ております。それから下段中央にあります貝釧、これスイジ貝と言いまして、南洋産の貝で作った腕輪です。このような非常に珍しいものも出ております。先程も言いましたように、後円部の北側の所を、家が退きましたので整備いたしましたところ、周溝の中から立っている木柱が出てまいりました。上の方は壊れてしまって無いんですが、木が立って出ており、円盤状の桶の底みたいなものも出ています。真ん中に四角い穴が開いており、周りにも三つほど開いております。復元するとどうも吹流しみたいなものを付けて、古墳にずっと立て並べていたんじゃないかなと考えております。今私どもが目にします銚子塚古墳の風景とはだいぶ違った風景が、古墳を造った当時はあったのかも知れません。



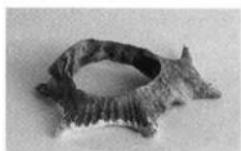
平面図



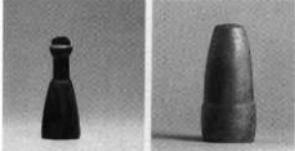
石製腕飾類



三角縁神人車馬鏡



貝釧



石製杵

第41図 甲斐銚子塚古墳

そして、甲斐銚子塚古墳の次に来るのが、第 42 図の丸山塚古墳です。全長 169m の前方後円墳からいきなり 72m の円墳に変ってしまいます。甲斐銚子塚古墳がすぐ側にあります。直径が 72m ですが、甲斐銚子塚古墳と類似した埴輪を持っていますし、竪穴式石室から鏡とか剣とかが出ております。右側が青銅鏡の写真です。ですから、169m の前方後円墳から、時代がそんなに経たない次の首長墓が、72m の円墳になってしまふというような非常に落差を感じる時期であります。この時期になりますと、いろいろな所に古墳が造られるようになります。

ただ、八代地域だけは特殊でありますて、甲斐銚子塚古墳が造られた頃に、第 43 図の岡・銚子塚古墳が造られております。これはもう、先程から話しが出ておりますのであまり詳しくは述べませんが、これも前方後円墳であります。全長 92m で、鏡も 2 面ほどありました。剣とか鐵鏃なんかも出ております。後円部に粘土櫛の主体部があつたということです。鏡が 2 面出たことは、先程言いましたが、江戸時代に盜掘の憂き目にあってしまって、鏡も現在残っておりません。辛うじて甲州文庫という資料の中に、拓本だけが残されておりまして、2 面の大好きな鏡が出たことが分かります。

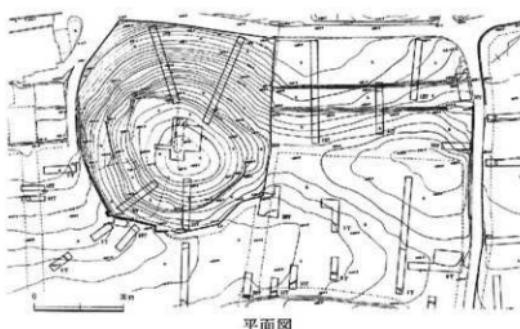


平面図



環状乳四神四獸鏡

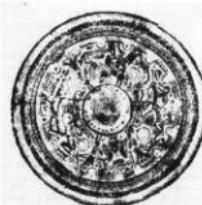
第 42 図 丸山塚古墳



平面図



龍鏡

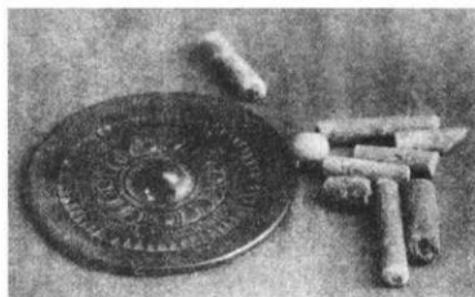
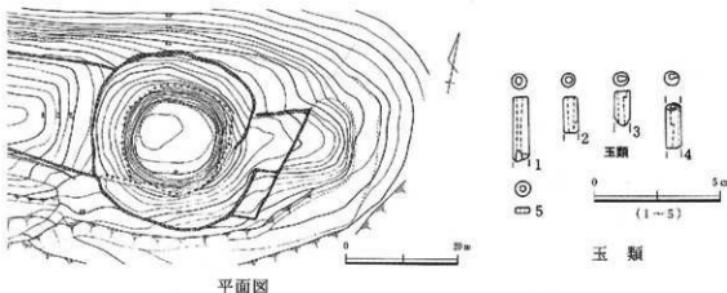


二神ニ獸鏡

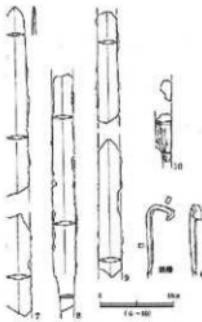
第 43 図 岡・銚子塚古墳

本来は、剣やらもっといっぱいあったと思いますけども、現在残されているのはこれだけということになります。

先程言いましたが、甲斐銚子塚古墳から丸山塚古墳へ変わって非常に落差があると言いましたけども、この時代になると、甲府盆地のさまざまな所に古墳を造るということが広がってまいります。その一つが陝西地域になります。陝西地域の旧櫛形町、現在は南アルプス市になりますけれど、第44図の物見塚古墳というものがあります。前方後円墳といいますか、前方部が非常に短くなった帆立貝に近いような形なんすけども、主体部はおそらく粘土桶ではなかったかと推定されています。副葬品としては、振文鏡とか、管玉・丸玉、剣とかが確認されています。後円部に前方部が付きますが、前方部がちょっと短いような、本来ですともう少し延びるはずなんすけれども、非常に小さい前方部が付くという形がお分かりいただけるかと思います。副葬品には、現在は残されておりませんけども、こういうような鏡があったというのが巨摩高校が当時出しました郷土史の本に載っています。ちょっと写真が不鮮明で申し訳ないんですけども、このようなものがあります。それに管玉、丸玉なども載っておりまして、そのような物が出土したということが分かっております。そして、その後、発掘調査をいたしましたところ、主体部はもう残っていなかっただんですけども、玉類も出ておりますし、剣とか、刀の類が出ています。



振文鏡・玉類

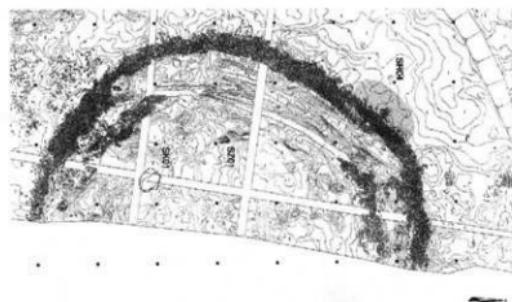


第44図 物見塚古墳

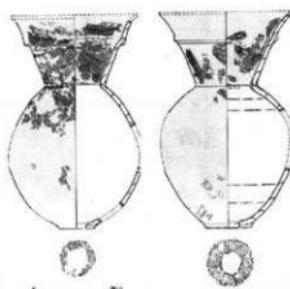
それで、先程 5 世紀前半にいろんな所に古墳が広がっていくということをお話しましたが、本来、前方後円墳というか、大きな古墳というのは、丘陵上に古い古墳が來るのが常識的なことだったんですけども、中部横断道の調査で大師東丹保と古市場に近い所、旧甲西町分になりますけれども、ここで第 45 図に示した古墳が見つかっております。平地に造られております。非常に低平なものでありますけども、直径が 36m ほどあります。主体部等はまったく見つかっておりません。墳端の方から壺形埴輪がいくつも見つかっておりまして、土器がまとまといた所もいくつかあったということです。形からすると円墳ですが、東側が調査区外になってしまっております。このような形で葺石が葺かれ、二段築成されています。図右側のような壺形の埴輪がありまして、底部にもともと穴が開いているものが出土しております。これを何時にあてるかというと難しい問題です。物見塚古墳とどちらが古いのかといいますと、なかなか難しいので、第 3 表に示した私の編年表では、どちらにしていいか分からないので、両方並べておきました。

もう一度、中道地域に戻りますけれども、前方後方墳から前方後円墳という変化がありまして、その後は円墳に変化してしまいます。では、丸山塚古墳の次にどんな古墳が造られたのかといいますと、今まで定説となっておりますのは、第 46 図の天神山古墳という古墳であります。写真が無いんですが、全長 132m の大きな古墳で、山梨県内で 2 番目に大きい古墳であります。5 世紀の中頃だろといわれておりますのは、クビレ部の所から土師器が発見されておりまして、これが根拠になっております。しかし、どうも古墳の形を見ると、あまり私見を話してもいけないんですが、古い古墳ではないかなというように思っております。

そうしますと、丸山塚古墳に続く古墳が天神山古墳になるのかどうかというのは定かでないですが、その後、第 47 図のかんかん塚古墳というのが造られます。かんかん塚古墳は楕円形をしていまして、25m × 20m ほどの小さい古墳であります。ただ、小型の楕円墳ではありますが、短甲や非常に古い形の鎧とか、馬に付ける鈴のようなものをもっております。ですから、中道地域においては甲斐銚子塚古墳ができる以降、次第に古墳が小さくなっていく。ジリ貧と言っていいかどうか分かりませんけども、そういうふうなことになってまいります。

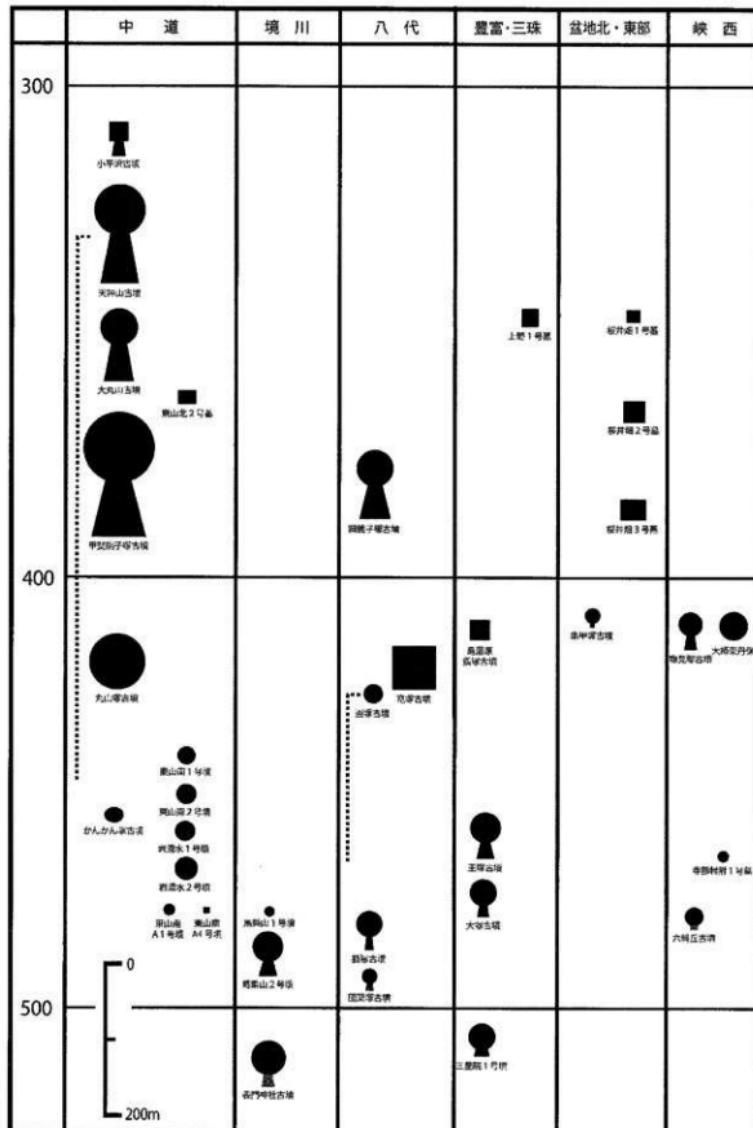


平面図

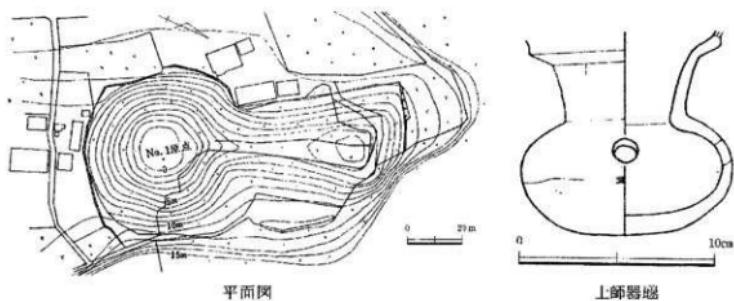


壺形埴輪

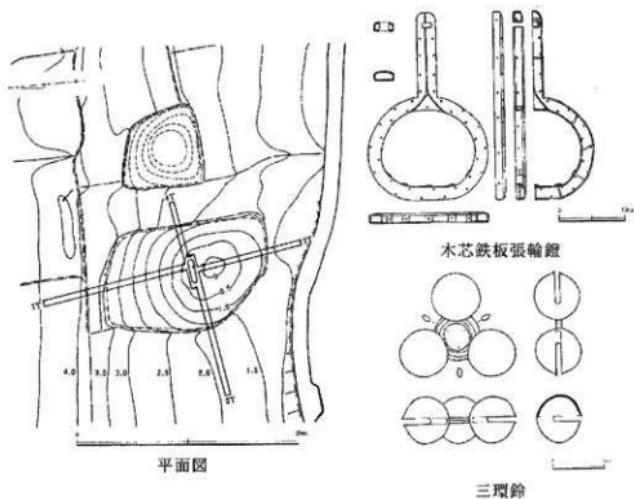
第 45 図 大師東丹保遺跡



第3表 甲斐の前半期古墳編年表



第46図 天神塚古墳



第47図 かんかん塚古墳

それに比べて周辺地域では、その時代になりますと大きな古墳が造られるようになります。第48図の鳥居原狐塚古墳です。おそらく、この地域で一番古く造られたんだろうと思います。これについてはまた後で触ますが、ちょっと説明します。現状で 18m×13m くらいの方墳だというようにいわれておりますし、山梨県で 3 つある方墳の中の一つであります。堅穴式石室で、副葬品としては赤鳥元年、卑弥呼が魏に使いを送ったという前年にあたるということで、非常に注目されている銘のある神獸鏡がありまして、内行花文鏡なども出土しております。また、図右上のような上部器が出ております。これが本当にいつ造られたのかっていうのはなかなか難しいんですが、おそらく

4世紀に遡ることはなく、5世紀代の前半だろうと思われます。

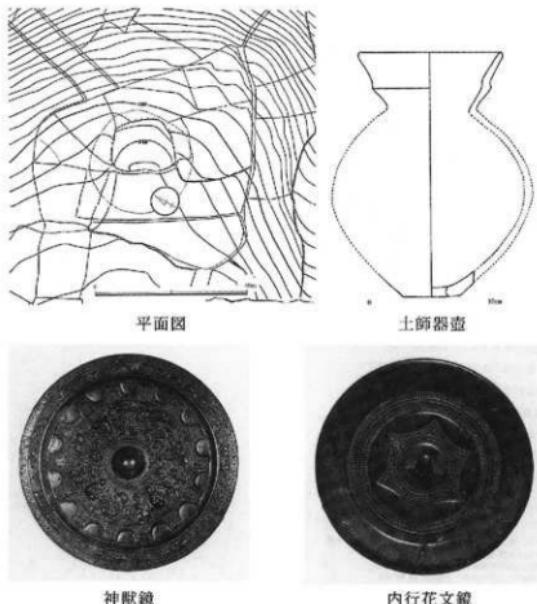
その後、旧豊富や三珠地域に王塚古墳や大塚古墳などが造られておりまして、武具、甲冑類をたくさん持っております。そういうものは前方後円墳なんですが、前方部が非常に短くて、一般的に言われるプロポーションのいいような前方後円墳ではなく、円墳に四角い造り出しが付いたような形をとて、一般的な前方後円墳よりややランク的には落ちてくると考えられます。ただ、中道地域が先程言いましたような20mほどの円墳に変わる段階で、豊富や三珠の地域では前方後円形

を呈して、甲冑類とか馬具類なんかをたくさん副葬するような古墳があるということです。

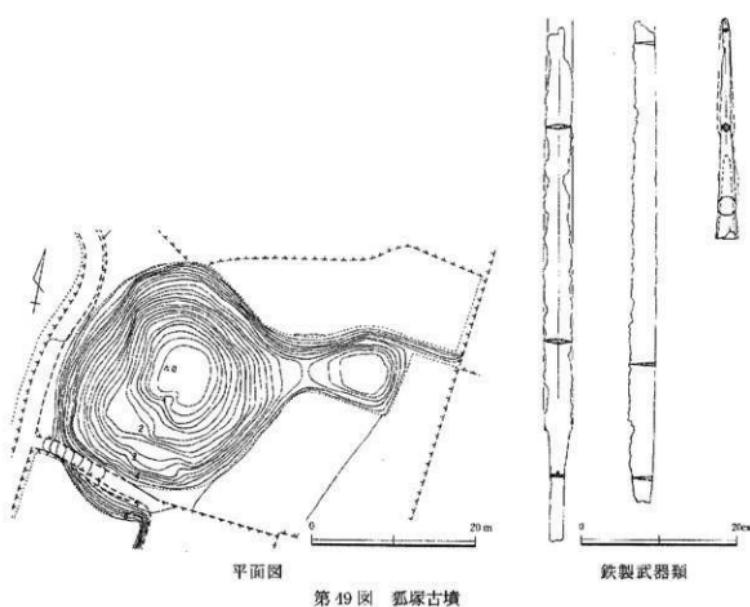
そして、その時期になりますと、八代地域にも先程、伊藤さんのお話にありましたように、低地の方に古墳が造られるようになります。团栗塚古墳は、帆立貝形の古墳というよう言われておりますが、後円部の所に堅穴式石室と組合せの板石を立てたような石室が2つ並んで出ております。副葬品としては、鏡や鉄鏃、直刀が知られております。

それと第49図、狐塚古墳というのもあります。これは中央道のすぐ側にある古墳ですけれど、全長46m前後の前方後円墳です。埴輪を持っておりまして、調査されておりませんのでよく分かりませんが、副葬品として剣とか鉢などが知られています。

そして、その後この地域には、馬乗山2号墳という甲府盆地で最後の前方後円墳といわれますものが造られます。これは特異であります。円墳と前方後円墳がくっついて、というか隣り合わせで造られておりました。調査しましたところ、円墳の方が古くて、その後に前方後円墳が造られているということがわかりました。1号墳が径13mの小円墳であります。小さな墳丘上には、石室が4つあります。全部組合せの石棺なんですが、刀ですか鉄鏃なんかが出土しております。2号墳は全長60mの前方後円墳で、鏡などが出土したという話はありますが、調査によって主体部自体も確認できませんでしたし、副葬品等も発見されておりません。ただ、墳端部から須恵器が発見されまして、おそらく5世紀の末か6世紀初めくらいに造られたんだろうというふうに思われており



第48図 烏居原狐塚古墳



第49図 古塚古墳

ます。

その他、衣門神社古墳などがありますけれども、内容がよく分かりませんので、ここでは前半期の古墳であるということだけを紹介しておきます。

時間が迫ってまいりましたので、竜塚古墳が方形を呈する古墳でありますので、方墳についてどういうふうに考えるべきかと、山梨県内の方墳の例から考えてみたいと思います。県内では、今までに竜塚古墳を含めて3つの古墳が知られております。先程言いました鳥居原狐塚古墳であります。赤鳥元年銘の神獸鏡を出した古墳です。一辺18m、もうちょっと本来はあるかもしれません、20m四方くらいの方墳であります。先程、土師器が出土していることを紹介いたしましたが、4世紀代に遡ることは無いだろうというように考えられます。おそらく5世紀の前半代、竜塚古墳とどちらが古いかと言われると、比較検討する材料がありませんので何とも言えないんですが、同じような時期かもしれません。そうなりますと、三殊・豊富の地域というのは、どうも方墳が最初に現れて、前方後円墳に変わっていくというような地域であったと考えられます。

それともう一つ、旧柳形町になりますが、鎧物師屋古墳というのがあります。これも一部しか調査されておりませんのではっきりしないんですが、過去のメモ等によりますと、どうも横穴式石室を持っていたということでありますので、竜塚古墳とは時期がちょっとかけ離れてしまいまして、おそらく6世紀後半以降のものだと思います。山梨県内に横穴式石室が入ってきますのは、早くても6世紀の半ば近い頃ですので、それ以降の古墳であります。竜塚古墳とか鳥居原狐塚古墳とはち

よつと離れた時期ではないかなと思います。

それと、先程、大塚先生の話にもありましたけれど、方形墳の竜塚古墳がどういう系譜を辿って造られたのかということです。一つは弥生時代以来の伝統的な墓制であります方形周溝墓との関わりが考えられます。方形周溝墓というのは、先程、上の平遺跡の所で紹介させていただきましたが、非常にいくつも纏まって造られる協同墓地的な性格を持っているものであります。一方、竜塚古墳は、一辺 50m を超える古墳があの地にひとつ単独で造られる。それを、同じ四角だからといって弥生時代からの墓制と系譜的に繋がると考えていいかどうかというとちょっと無理がある。ちょっと乱暴なのかなというように考えております。そこで、それを繋ぐようなものとして、竜塚古墳のように非常に高いマウンドを持ったものではなくて、もうちょっと低いようなマウンドのお墓が最近いくつも発見されております。四角いものは非常に少ないんですけども、円墳が主体を占めています。そういうものも発見されておりまして、そういうものが繋いでいく可能性はありますけれども、実際にどうかというのは今後考えていかなければいけないものだと思います。

こちらの写真 16 は、考古博物館の裏手にあります、東山北遺跡の 2 号周溝墓です。一辺 30m を超えるようなお墓であります。そして、隣接して大丸山古墳がある。時期的には非常に近いだろうと考えられております。同時期かどうかという問題が残りますけれども、おそらく、どちらが早いにしても、お互いにあそこにお墓を造っているということは知っているはずなんですね。非常に近い時期でありますので、何らかの関係があったということは考えなければいけないですし、この調査をしました末木さんは、前方後円墳であります大丸山古墳と、東山のこの方形周溝墓に非常に密接な関係があって、役割分担があったんじゃないかというようにお考えです。方形のお墓を考える



写真 16 東山北遺跡

上で、ひとつ示唆的なところがあるかというように思います。

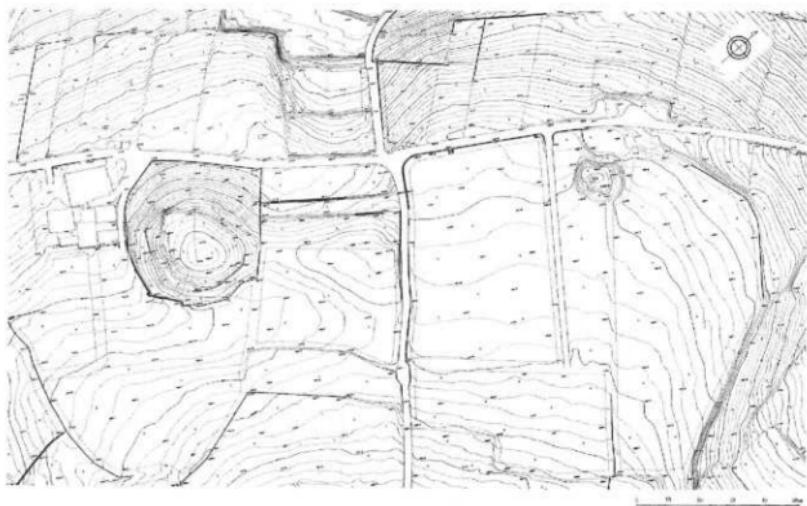
今、お話ししましたように、方形周溝墓から竜塚古墳に直接繋がるというような資料というのは無いんですけども、竜塚古墳を考える上で何が考えられるのかと、もう大塚先生の方でお話しされましたので私はちょっとしか話しませんが、岡・銚子塚古墳と甲斐銚子塚古墳の関係をどう考えるかということが重要ではないかと考えております。これは、これからご講演いただく橋本先生が古くから指摘されていますけれども、岡・銚子塚古墳と甲斐銚子塚古墳とは、墳形も似ているし副葬品の内容も非常に近いものがあるということで、非常に密接な関係にあったんではないかというような推定をされております。それで、一方ですね、同じ畠竜鏡という鏡をもっておりますが、それの大きさの違いで、どうもランクがあったんだろうから、甲斐銚子塚古墳のお目付け役というか、監視役で岡・銚子塚古墳が造られたんじゃないかな、というような考え方を持っている方もいらっしゃいます。ですので、一つの資料に対していろんな見方があるというようなことがあります。

では、岡・銚子塚古墳は八代地域に初めてできた古墳ですが、それと隣接する盃塚古墳をどう考えるかということも重要なってくると思います。中道地域では、甲斐銚子塚古墳から丸山塚古墳へという流れは、これはもう一致している意見あります。169mの前方後円墳から 72mの円墳へと変化しますが、では、八代地域ではどうなのかということです。岡・銚子塚古墳の次に来るのはどの古墳なのだろうかということです。盃塚古墳かもしれませんし、谷を一つ隔てた方墳の竜塚古墳かもしれない。これは、午後の 2 名の先生方のお話の中で出てくるかもしれませんし、それも考えなければいけないだろうと思います。そうしますと、盃塚古墳が先に来るのか、竜塚古墳が先に来るかということで、竜塚古墳と盃塚古墳の関係も非常に重要なってくるんだろうなと考えます。

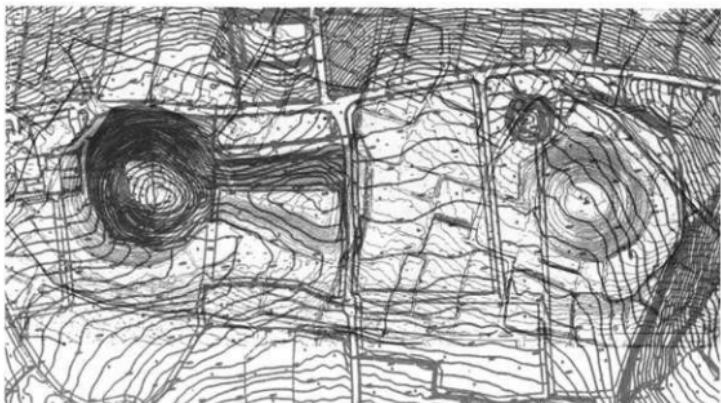
第 50 図を見てください。これが甲斐銚子塚と丸山塚古墳です。非常に近い所に造られているのが分かると思います。一方、岡・銚子塚古墳と盃塚古墳はこちらの第 51 図になります。そこで、二つ並べてみました。古墳の大きさが違いますんで、甲斐銚子塚古墳の方を半分ほどに縮小しておりますが、甲斐銚子塚古墳が 169m、岡・銚子塚が 92m ですから、同じ大きさに並べたら全然距離が違うんですけども、甲斐銚子塚古墳を、半分ほど縮小しますと、だいたい同じ大きさになります。



第 50 図 甲斐銚子塚古墳と丸山古墳



第51図 岡・銚子塚古墳と盃塚古墳



第52図 両古墳重ね合せ図

それで、ふたつ並べたものが第52図です。これを無理やり重ねてみます。ちょっと見にくいかと思いますが、まあ、似ているといえば似ている、ちょっとずれているといえばずれている。ですが、これをどう考えるか。岡・銚子塚古墳の丘陵の先端が、ふるさと公園の丘陵の先端になります。盃塚古墳は非常に小さいですから、丸山塚古墳と同じ位置に持ってきててしまうと、丘陵の下の方から眺望が効かない所になってしまうということで、こちらに持ってきている可能性もあります。

あまり、想像でものを言ってはいけないんですけども、非常に似た位置関係にあるということあります。これが何を示しているかというのは現状ではお話しできませんが、甲斐銚子塚古墳と丸山塚古墳との関係が、岡・銚子塚古墳と盃塚古墳のあいだに読み取れるのかもしれません。そうしますと、では竜塚古墳をどこに位置付けるか。の方墳をこの間に割って入れるのか、それとも盃塚古墳の後へ持ってくるのかということがあります。私にもここで話をしろというようにお話をいただいた時から考えているんですけども、結局まとめきれずに頭の中がかえって混乱してしまったというようなことであります、盃塚古墳については正式な報告がなされた時点で再度考えてみたいと思います。この辺りは大塚先生を始め、午後からご講演されるお二人の先生方に解きほぐしていただければというように考えております。

以上で私の報告を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

主要参考文献

- 上田三平 1930 「銚子塚古墳附丸山塚古墳」『文部省史跡調査報告』5
仁科義男 1931 「大丸山古墳・大塚古墳」『山梨県史跡名勝天然記念物調査報告』5
永峰光一 1951 「古墳と環境 一甲府盆地の場合ー」『国史学』56
山本寿々雄 1968 『山梨県の考古学』 吉川弘文館
中道町 1975 『中道町誌』
八代町 1975 『八代町誌』
小林広和・里村晃一 1978 「甲斐小平沢古墳の墳形と編年の位置」『信濃』30-2
坂本美夫 1978 「山梨県・曾根丘陵周辺地域の前期古墳」『甲斐考古』別冊2
岩崎卓也 1978 「中部高地における古墳の年代」『考古学ジャーナル』164
三珠町 1980 『三珠町誌』
橋本博文 1980 「甲斐の円筒埴輪」『丘陵』8
小林広和・里村晃一 1981 「曾根丘陵の古墳群」『探訪日本の古墳』東日本編 有斐閣
出月洋文 1982 「御坂町亀甲塚古墳の墳丘実測調査」『丘陵』9
小林広和・里村晃一 1984 「山梨県」『古代学研究』105
橋本博文 1984 「甲府盆地の古墳時代における政治過程」『甲府盆地 ーその歴史と地域性ー』 雄山閣
末木 健・萩原三雄 1984 『山梨県の考古学』 山梨日日新聞社
萩原三雄 1985 「甲斐國の統一」『古代甲斐國の謎』 新人物往来社
清水 博 1985 「甲府盆地に於ける前期古墳の動向」『山梨県考古学論集』I
中山誠二 1989 「甲府盆地における方形低墳墓に関する考察」『甲斐の成立と地方的展開』
宮澤公雄 1989 「鉄製柄付手斧について」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』1
末木 健 1993 「古代甲斐國首長權の成立について」『山梨県史研究』創刊号
車崎正彦 1993 「羅竜鏡考」『翔古論集』

- 宮澤公雄 1994 「甲斐曾根丘陵における古墳時代前半期の様相」『山梨県考古学論集』Ⅲ
- 橋本博文・萩原三雄 1995 「甲斐」『全国古墳編年集成』 雄山閣
- 大塚初重 1995 「平成6年度(1994)山梨県の古墳調査から」『帝京大学山梨文化財研究所研究所報』24
- 和田 豊 1995 「三株大塚古墳の調査」『帝京大学山梨文化財研究所研究所報』24
- 伊藤修二 1995 「岡・銚子塚古墳発掘調査における成果と課題」『帝京大学山梨文化財研究所研究所報』24
- 宮澤公雄 1995 「甲府盆地における古墳研究の現在－ここ数年の調査事例から－」『帝京大学山梨文化財研究所研究所報』24
- 谷口一夫 1995 「青銅鏡から見た甲斐国前期古墳の様相」『山梨県史研究』4
- 坂本美夫 1996 「甲斐銚子塚古墳の場合」『考古学ジャーナル』403
- 清水 博 1997 「山梨の古墳時代研究の動向」『山梨県考古学協会誌』8
- 宮澤公雄 1997 「山梨県における古墳時代墓制の研究課題」『山梨県考古学協会誌』8
- 石神孝子 1998 「甲斐における古墳時代中期の墓制について」『研究紀要』14
- 山梨県 1998 『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古(遺跡)
- 山梨県 1999 『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古(遺構・遺物)
- 末木 健 2000 「山梨県の古墳」『大塚初重先生頌寿記念考古学論集』 頌寿記念会編 東京堂出版
- 宮澤公雄 2003 「甲斐の5世紀 一丸山塚古墳と竜塚古墳ー」『山梨考古学ノート 田代孝氏退職記念誌』
- 宮澤公雄 2003 「古墳時代中期における小規模墳の一様相－甲府盆地を例として－」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』11
- 小林健二 2004 「甲斐の方墳とその周辺－山梨県八代町竜塚古墳の調査から－」『専修考古』10
- 山梨県 2004 『山梨県史』通史編 考古

西本の方墳—竜塚古墳との対比から—

専修大学文学部教授 土生田純之

土生田でございます。

今回、大塚初重先生のご下命によりまして発表することになりました。さて、私は大塚先生みたいに前方後円墳や前方後方墳に埋葬される地位ではなく、小円墳ぐらいですから、ご下命があれば拒否することは出来ません。ただですね、これは冗談ではなくて、大塚先生もおっしゃっていたのですが、非常に難しいテーマでございます。先程もお話しがあったように、方墳そのものを取り上げるというような研究がこれまでほとんど無かったんです。それで、意外とその無いということに気付いている人は少なかったんですが、全く無かったわけではありません。それは古墳時代の終末期、6世紀の終わりから7世紀の古墳には、大正陵をはじめ方墳が多いものですから、そういうものは、例えば一般書でも名著といわれている小林行雄先生の『古墳の話』の中にも書かれておりますけれども、全体的に方墳を扱ったというものは無かったわけです。なおかつ、東日本の方墳については、前方後方墳との絡みで最近注目されているのですが、それについては大塚先生が最初に総括されておられます。そこで、私のテーマの西日本では、どうも方墳というものが一種類ではないんだということに思い至るわけです。これについては、先程からそういうお話をございましたけれども、方墳も性格の違うものが多くあるということが分かってまいりました。そこで、今日はそういうことを中心にお話したいと思います。それから、朝鮮半島のことにも少し申し上げたいと思います。

方墳、一口に方墳といっても、正方形あるいはやや長方形のものもあるかもしれません、そういった直角に角があつて方形になるというものは、古いものから終末期までありますし、同じ方墳と言葉で表現しておりますけれども、その中身を見ると、実態としては何種類か有るんだ、ということをまず理解していただければいいと思います。それで、たくさんに分ける人も居るんですが、私は四つに分けて理解していきたいと思っておりますので、以下、1番から4番について説明したいと思います。

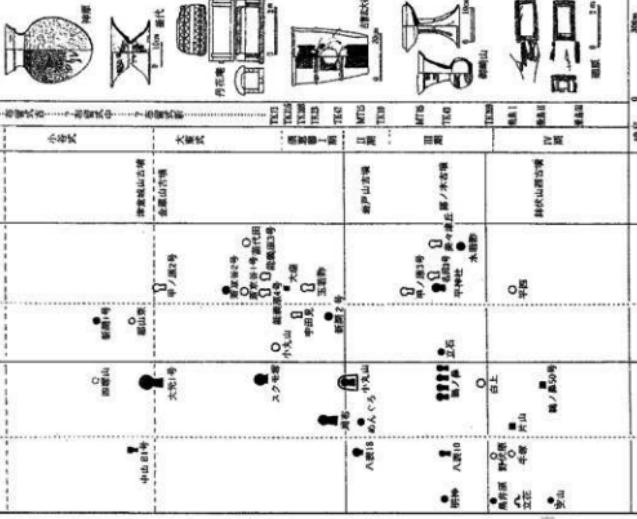
一番目は、弥生墓制の伝統上にあるものです。これは、先程、宮澤公雄先生が方形周溝墓というお話をされました。ここでの会場に居られる人は詳しい方が多いと思いますが、中にはご存知ない方も居るかもしれませんので、少し説明したいと思います。古墳と呼ぶ場合は、ただ墳上をすれば古墳というのかというとそうではありませんで、いろいろな約束事があります。簡単に言うと、近畿の中央と何らかの関係を持っている、つまり多少とも社会の上層にある人の墓というのが成立当初の古墳でありましょうけれども、方形周溝墓というのは、古墳と一見よく似ているんですが、墳丘が低いとか、埋葬主体の構造に地域差が顕著であるとかが挙げられますが、そんなことよりも各地域で独自に営んでいるというように考えた方が理解しやすいと思います。もちろん、その地域同志の文化交流で似たものがあるということはありますけれども、政治的な繋がりで造っていると考

えられる前方後円墳とは違うというのが方形周溝墓です。形態的には、方墳の低いものというように言ってもいいくらいなんですが、そういうものが弥生時代の各地域に営まれていたんですね。西は九州から関東、東北にもあるんでしょうか。そういうものがありました。その伝統の中から築造された方墳があります。特に、日本海沿岸地域、例えば、その各地域で方墳は古墳時代の始まりには残っていることが多いですけれども、わりとすぐ造られなくなります。先程もそういう指摘がありましたけれども、弥生墓制の伝統が長く残る、伝統といっても全部が全部そのまま残るわけではありませんが、方系の志向が残る所が、出雲を中心とした日本海沿岸であろうと思います。

第 53 図をご覧ください。これはお断りしておきますが、そこに絶対年代が 400 年とか 500 年とかありますが、書いた人の見解であって、人によって当然変わってくることがあるんですが、概ね、どっちが古い、どっちが新しいという並びはそんなには変わらないということでご理解ください。少なくとも出雲をご覧いただくと、第 53 図の下の方ですね。横に向けると左の方ですが、この前期の始まりから後期終末期に至るまで、前方後方墳あるいは方墳がずっと続いています。ただ、続いているだけではなくて、首長墓、王と言ってもいいのですが、そういう人たちのお墓、いわゆる有力古墳の中に前方後方墳や方墳が取り入れられているということが分かると思います。ちなみに、そういう土地柄がありましたので、先程、大塚先生の研究史の所でも少し触れておられましたが、前方後方墳を初めて認識したのは出雲であって、山本清先生が全国に先がけて紹介されました。さらに、ここにいらっしゃる大塚先生が、全国的視野に基づいた初めての論文を書かれて、前方後方墳に対する認識が深まっていったという歴史があります。しかし、出雲では単に前方後方墳だけではなくて、方墳の大きな首長墓も連綿として築かれていくということが言えると思います。これは、特に出雲に顕著であって、他の地域、例えば越中とか丹後とともに、弥生時代には方形が卓越していますが、古墳時代に入つても長らくは方形の志向が強かったのです。その最も強かつた所が出雲であって、7 世紀に至るまで連綿として造られているということは特筆されなければいけません。これが一つ目の方墳の例でございます。

二番目は、一番目と一見似ているのですけれども、近畿の中でも大阪とか奈良ですね。いわゆる後の畿内です。あるところで畿内、畿内と言っていると、畿内というのは律令時代になってからの言葉であるからそれを使うのはおかしいと、文献史学者に言われました。それでは、その代わりの言葉を搜してくれと言ったところ、近畿中枢と言われました。そこで、滋賀県や京都北部は近畿中枢ではないのか、と言ったら返事が無いので、一応、畿内という言葉を使わせていただきますが、その括弧付きの畿内です。後の畿内の中にも、実は前方後方墳のような方系の重要な古墳があるのだということは前から分かっていますが、ともすると私たちは、前方後円墳を古墳の中で最上位と見てしまいますが、これは間違いないんですね。それで、前方後方墳はそれよりも落ちる、あるいは、方墳はそれよりも落ちるというような意識がどこにあるものですから、どうしても前方後方墳を低く見るという傾向があります。ところが、近畿地方のいわゆる後の畿内を見ると、前方後方墳でも実は重要なものがいくつかあるということが分かります。例えば、第 54 図の 300 年と 400 年との間の所で、馬見丘陵と書いてある所に新山古墳というのがあります、ここなどはたくさん鏡を出しておられます。今、宮内庁が所蔵しておりますけれども、といったものもありますし、

年	系 部	出 石			中 國			西 部			内 地			東 北			參 古 墳			備 考		
		東 北	中 國	西 部	東 北	中 國	西 部	東 北	中 國													
600	東 北	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
600	中 國	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○
600	西 部	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○
500	東 北	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
500	中 國	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
500	西 部	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
400	東 北	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
400	中 國	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
400	西 部	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
300	東 北	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
300	中 國	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
300	西 部	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
200	東 北	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
200	中 國	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
200	西 部	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
100	東 北	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
100	中 國	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
100	西 部	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
0	東 北	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
0	中 國	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□
0	西 部	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□	○	△	□

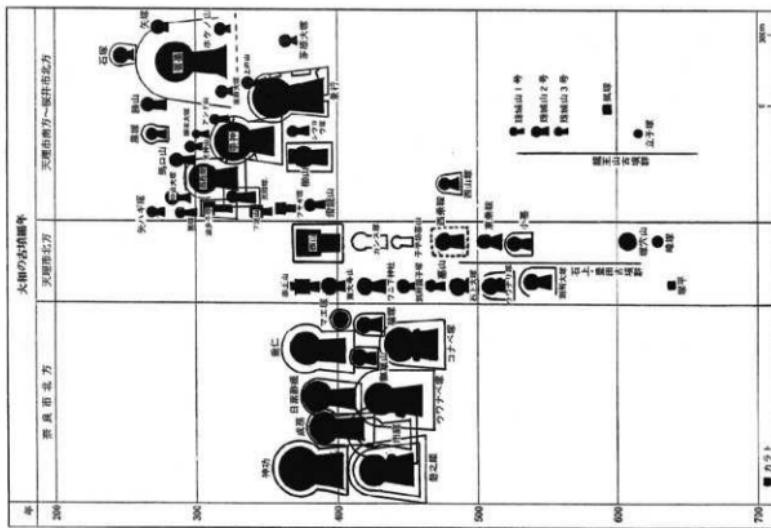


第53図 出雲・石見の古墳分布年

方墳でも今日の大塚先生のお話にもありました、5世紀に至るまで畿内の中にも重要な方墳がたくさん造られている所があります。それで、近畿地方にも弥生時代に方形周溝墓が卓越している地域が多くありますので、そういう流れから出雲と同じような背景が考えられるというように思う方も居るかもしれません、近畿あるいは畿内の古墳では、先程も言いましたように前方後円墳が中心であるということから、前方後方墳あるいは方墳を低く見るという傾向が無かったとは言えません。ですから、このことについては、特に認識しておく必要があると思います。そういう意味では、畿内の影響を受けて畿内周辺の播磨とか、あるいは丹後なんかにも、重要な方墳が5世紀にたくさんありますが、そういった流れで考えていく必要があると思います。例えば、播磨の山之越古墳という大きな古墳が方墳であったりしますので、畿内を中心とした近畿中枢は、前方後円墳が無条件で上位であるという考え方には少し注意する必要があると思います。特に近年では、箸墓古墳を中心に、近畿地方をはじめ西日本では前方後円墳から造り始められます。東日本では、前方後方墳が最初の段階で目立っている所が多いと、先程もそういった話がございました。そして、その後に前方後円墳に変わるので、そういう地域が群馬県をはじめ東国にたくさんあります。それで、中にはそこから飛躍して、近畿を中心とした前方後円墳の体制が卑弥呼の邪馬台国であって、前方後方墳を中心としたその流れが狗奴國だというように、見てきたようなことを言う人がいますが、私にはとてもそこまでの夢は掛けませんので、当否についてはなんとも言えません。しかし、それでもそういった話もあるくらい東西で違うということは断言できます。それで、裏返せば近畿地方では、前方後方墳は下位だというように単純に考えられてきました。確かに、前方後円墳に比べれば大きさといい、内容といい、前方後円墳の方が優れたものがあることは否めないのでけれども、だからといって、前方後方墳あるいは方墳を無視していいのだろうかというところで、少し、これは出雲とはまた異なった立場から留意していく必要があります。ただ、出雲と違って5世紀の中葉くらいを境に、といった大きなものが無くなるということを前提として置いておかなければいけないと思います。

3番目は、これは大塚先生のお話の中、あるいは、資料の中にもたくさん出てきたのですが、陪塚の中に方墳がたくさん含まれているということです。それで、大塚先生も注意されたわけですが、実は陪塚というのが、本当に陪塚かどうか認定するのが極めて難しいんです。近くにあるからといって、陪塚だというわけにはいかないんですね。掘ってみると全然違う時期のものであるということをお話が先程ありました。では、掘らないでどうやって認定するのかということについては、最近、奈良県の御所市教育委員会の藤田和尊さんが、厳密な意味で陪塚をどう認識するかということを提起されました。藤田さんは、大きな前方後円墳の周囲に周溝があって、その外側には土堤がありますが、その土堤と陪塚が道で繋がっているような例、まだそんなに多くはありませんが、そのように有機的に繋がっているのは陪塚でいいだろう。それから、発掘されている例が大古墳ではあまりありませんが、大古墳とそれに隣接する陪塚と呼ばれる小古墳の両方とも発掘されていて、全く同時期だと認定されれば陪塚でいいだろう。あるいは、前方後円墳の主軸と合わせて周囲に造られているとか、そういうことを言っているんですが、最後の主軸を合わせているというのは、本当に陪塚かどうか、これは後世でも造れるわけですから分かりません。だから厳密に言うと、本当

第54図 大和の古墳群年 (1)



第55圖 大和の古墳年 (2)



第56回 岡山市造山古墳と陪塚

に陪塚かどうかを認定するというのは、実は非常に難しいわけです。さらに、その陪塚がある古墳というのは、近畿地方以外にはほとんどありませんので、私のテーマである西日本という中で見ると、畿内以外で間違いなくそうであろうという古墳は、第 56 図にあげました岡山県の造山古墳です。岡山県で「つくりやま古墳」と言うのは、この「造山」と書く古墳と「作山」と書く古墳とがあります。一般的には「ぞうざんこふん」、「さくざんこふん」と呼んで分けていると思いますが、この造山古墳の陪塚と認定できる 6 基の古墳のうち、方墳は造山第 2 号古墳であります。これは、時期的にも同じような時期であります。しかし、陪塚としての方墳というのは、畿内のいわゆる大工場以外の古墳ではほとんど認められていませんので、造山古墳というのは例外的であるというように理解していただいていいと思います。例外というのは、この墳丘の大きさを見てもらっても理解できると思います。全長約 360m で、5 世紀の初め頃に築造されたものですが、ほぼ同じ時期の大王墓、履中陵に比定されている石津ヶ丘古墳が大阪にありますけれども、墳丘の大きさが大王墓と造山古墳とでほとんど差がないということからも、例外として理解できると思います。従って、3 番目の陪塚というのは、この竜塚古墳とはほとんど関係が無いといっていいと思います。

4 番目はさらに関係がないでありますけれども、6 世紀の終わりから 7 世紀にかけての古墳時代終末期、終末期というのは前方後円墳がなくなった後というように概ね理解していただいていいのですが、この終末期に多い方墳です。先程、伊藤さんの報告の中で、方墳の大きな規模を持つものの一覧がありましたが、そのほとんどの古墳がこの終末期のものです。それで、西日本も同様に 6 世紀の終わりから 7 世紀にかけては、前方後円墳が無くなつて代わりに方墳が主導的になります。ただし、円墳もあるのですが、これは方墳と円墳では造墓主体＝氏族が異なるなどの議論がありますが、今日は詳しいことについては触れません。それで、これらの古墳は、先程、少し申し上げましたが、早い段階から認識されておりました。その理由としては、久しぶりに中国を統一した隋、その後の唐、これらの皇帝陵が方形の墳臺、方墳であるということと関係があるようで、つまり、この時期には遣隋使や遣唐使を派遣して、100 年位かかって律令時代に入っていくわけですけれども、その頃は中国の文物、制度を精力的に学んでいく中で、天皇陵、大王墓、そして最上層氏族の族長墓、こういったものを皇帝陵に合わせて方墳に変えていったのではないかというような考え方があります（隋代皇帝陵の多くは自然の山を陵体としており、方形の墳丘ではない。しかし、これを取り巻く屏の神牆は、矩形で陵体を区画しており、陵の平面が方形志向であることは明白である）。

以上のように、西日本の方墳の種類を 4 つに分ることができます。1 番目は、弥生墓制の伝統が長く残っていくもの、これが最も顕著に現れているのが出雲、あるいは北近畿などの日本海沿岸地域では途中で無くなりますけれども、比較的そういう伝統があります。2 番目は、似た点が多いのでありますけれども、特に研究者を含む皆さんがどうしても前方後円墳を中心に考えてしまつて、見落としがちな畿内にも前方後方墳あるいは方墳の伝統があつて、5 世紀の中頃位までは、有力古墳のいくつかがそういうものを受け継いでいます。これは大塚先生のご指摘もありましたが、畿内あるいはその周辺で認められるものであります。それから、3 番目と 4 番目は、ほとんど竜塚古墳とは直結しないのですが、3 番目は 5 世紀を中心とした畿内の大型古墳の陪塚の中に方墳が卓越しており、例外的に畿内以外では、岡山の造山古墳に陪塚としての方墳が認められるとい

うことです。そして、4番目としては6世紀の終わりから後、いわゆる古墳時代の終末期に多い方墳です。これには、中国の隋や唐の皇帝陵との関係の中で、大王墓、最上層氏族の族長墓を方墳に変えていったのではないかというような考え方があります。大王墓として一番古いものは、いわゆる川原陵に比定されている古墳ではないかと思います。

ところがこの4つだけですと、実は欠けているものがあります。それは何かというと、竪塚古墳とは違うかもしれません、畿内をはじめとして各地で見つかっている小形の低方墳です。宮澤先生も紹介されました、いわゆる弥生時代の方形周溝施の伝統を引くものです。そのように言うと、先程あげた4つのうちの第1番目でも同様の話があったではないかと言われますが、方形周溝墓の場合は、上の平遺跡の所で紹介されたように、大きさとか内容によって格差がありますが、同じ墓域で造っています。ですから、格差はあるけれども、その格差が乗り越えがたいものまでは行っていません。しかし、古墳になると、造る場所まで変わってしまうというような大きな格差が出来ます。この低墳丘墓というのは、先程の1番目ののような方形周溝墓の中にある玉墓が発達して方墳や前方後方墳になるのとは対象的に、そこにある小形の方形周溝墓、村に住んでいる人たちのお墓の名残としての低方墳ですが、畿内では、従来あまり注意されませんでした。大阪や奈良では、そのようなものの存否についてさえ全く議論されていなかったのですが、20年くらい前からだんだんとその存在が分かつてきました。それはどうしてかというと、一つは低墳丘ですから削られてしまう、あるいは大阪でしたら、ご存知のようにかつて河内は低地であって、河内湖という湖がありました。その湖には、八ツ手の葉っぱ状に、あるいは手の平の指状に突き出した砂洲のような所があって、そこに小形の低方墳が築造されました。従って、人利川や淀川の氾濫によって、それらが埋められてしまって、認識することができなかつたのであります。近年になって丁寧に調査していくと、下の方から小形の低方墳がたくさん認識されるようになりました。これは、おそらく古墳築造者の中の最下位に属するお墓であろうと思います。

本日のテーマである竪塚古墳とは直結しないのですが、また一方で東日本においても5世紀の後半頃になると、今日この後発表される橋本博文先生の出身地である群馬県、こういった所を中心に、方形で小形の積石塚などがたくさん出てまいります。ここの甲府盆地においても、方形ではありませんが積石塚が出てきます。それで、西日本における上述の小形低方墳と、これらの積石塚について同様の位置を与えることができるかどうか、これもテーマとしてこれから考えていかなければなりません。ただ、西日本では積石塚というよりも小形の低方墳でありますので、それが東日本の積石塚についてよく指摘される渡来人の墳墓か否かということではなく、同じように社会における階層的な位置づけを与えることができるかどうかということです。

以上のように、5世紀の後半に墳丘の高さが1mあるかないかという小形で方形の低墳丘墓が畿内を中心にあります。これは、遡っていくと弥生時代の方形周溝墓にたどり着くのではないかと思うのでありますが、そういったものが5世紀代にたくさん大阪などで見つかっています。これは丘陵というよりも低い所、そういった所でたくさん確認されています。例えば、大阪の長吉長原遺跡なども、そういうものが中心を占めているのだろうと思います。

それで、東日本でも上野を中心に5世紀の中葉から後半にかけて、非常に小さい方形の積石塚が

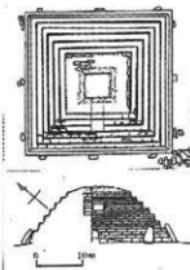
たくさん出てまいります。上野などは、先程、大塚先生が渡来人との関係を指摘されました。私もそのように考えておりますが、西日本の低墳丘墓の場合は渡来人かどうかわかりません。ただ、渡来人ということではなくて、同じような社会の身分的位置付けが与えられるかどうか、同じような時期に方形で小形の低墳丘墓、あるいは低積石塚、そういったものをこれからも比較していくことが、一つの研究テーマになるのではないかと思います。

以上、西日本を見た場合に、4種類の方墳、さらには方墳の中でも低い墳丘でしかない低墳丘墓、特に5世紀中葉から後半にかけて築造された墳丘の高さが1mあるかないかという小形の方形の低墳丘墓、こういったものを合わせて5つに分けることができますが、竜塚古墳の場合は1番目と2番目、すなわち弥生の方形周溝墓のうち、上位の人たちの流れを受けたもの、あるいは2番目の近畿の中にも無視しがたい方系志向のものがあって、そういったものとの関係が有るのか無いのか、こういったことが問われてくるのだろうと思います。

次に、海を越えまして朝鮮半島を少し概観したいと思います。日本の古墳時代に相当する時期、朝鮮半島はご承知のように三国時代と言いまして、高句麗、百濟、新羅の三国が鼎立していた時代です。あるいは、南端の中央部といいますか、その3つの国に入らない小国に分かれたままで統一されていなかった加耶、こういう4つの地域に分かれていました。そして、古墳のあり方も日本列島と違って、日本列島も地域差はもちろんあるのですが、さらに地域差が大きくなっていますので、等しく朝鮮半島だというように片付けるわけにはいかないんですね。そこで、まず高句麗と百濟を考えてみます。

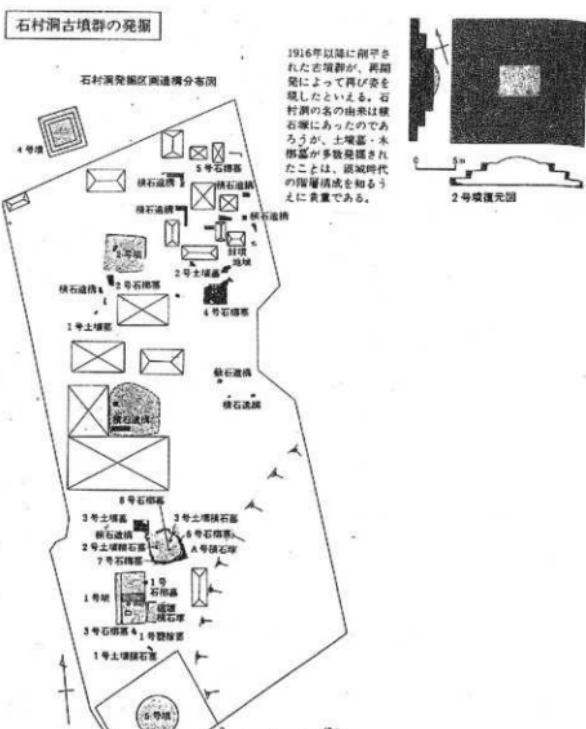
第57図を見てください。高句麗集安の將軍塚古墳というのを上げておきました。高句麗は、5世紀になって今のピョンヤンに遷都する前はもっと北の方に都を持っていましたが、こういう段階は石で覆う方形の古墳が主流がありました。ですから、かつては日本の積石塚も高句麗系であるというように言われていたことがあります。これは、長野県なんかではそういった指摘がずいぶん早くからあったのですが、今日では少し時期差がある、もう少し考えなければならないと思います。

第58図の百濟漢城（現ソウル）・石村洞古墳群の分布という図を見てください。これは、現地読みすれば「ベクチエ・ハンソン、ソクジョンドン古墳群」と言うわけですが、この図の右上に2号墳の復元図があります。この大きな古墳は石で積み上げた方墳で、段築も有ります。高句麗の先程言った將軍塚古墳と非常に似ているということが分かると思います。ただ、百濟の場合は、高句麗もそうだろうと思いますが、周りに墳丘を持たない墓とか、いろいろな種類の墓があって、身分の差が示されていますが、身分の上層のものは方形の積石塚あります。これは記録にはっきりしているのでありますけども、百濟の王族は、もとは高句麗の王族と同族であって、南の方に流れてその地域を支配した人達であるので、百濟の古い段階の文化というのは、非常に高句麗と通じる所があります。しかし、百濟の場合は、475年に漢城が高句麗によって攻められ、陥落します。そして、残った王族が南の方に逃げて、熊津と書いてウンジンと読みますが、そこに遷都してからは古墳の墳形は円形になります。熊



第57図 高句麗集安・將軍塚古墳の墳丘

津期の王陵で有名な武寧王陵なんかは円墳です。武寧王陵を含む当期の王陵群を宋山里古墳群と言いますが、基本的には円墳で構成されています。これはどうしてかというと、南に遷都した熊津期以降は、中国の南朝と極めて密接な関係があって、誼を通じて日本の倭の五王なんかとは比較にならないくらい多くの使いを出しています。そして、南朝は円形の墓が卓越していますから、そういうたった影響があるのではないかと思います。また、高句麗もビョンヤンに遷都して以後、古墳の墳形は円形に変わっていくようあります。そして、古い段階の高句麗や百濟の古墳の墳形がどうして方



第 58 図 百済漢城（現ソウル）・石村洞古墳群の分布

形なのかというのは、はっきりとしたことは言えませんが、高句麗や百濟の出現した時期や発展した時期を考えると、中国の漢代の皇帝陵が方形であることにあるいは関係しているのではないか、これも一つの研究テーマであろうと思います。そのようなことで、特に百済は中国の皇帝陵や上層階級のお墓と密接に連動した変化が見られるのではないかというように思います。

次に、新羅はどうであろうかということで、第 59 図を見てください。ここに挙げたのは、慶州の邑南古墳群です。慶州にいらっしゃった方も多く居られるのではないかと思いますが、図の真ん中よりやや上、家の集中している中が少し空いていて、丸とかがたくさん集まっている所があります。ここは、大陵園という公園になっていて、慶州に行くと必ず見学に行く所ですが、この公園の中には、天馬塚という内部を見る能够な古墳もあります。公園の周りには、もっと古墳が広がっていたことは間違ひありませんが、これについて、平地に古墳を造るなんてもったいないじゃないかという人も居たのですが、発掘調査によって、この地域は住むことに向いていない湿地帯であったことが解っており、そういう所に古墳を造っています。ここの古墳は、円形あるいは

慶州地域 19 擴大圖(古墳)



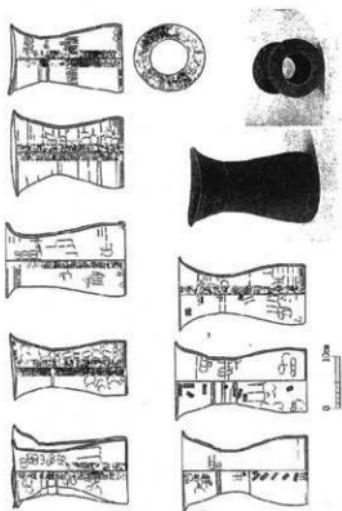
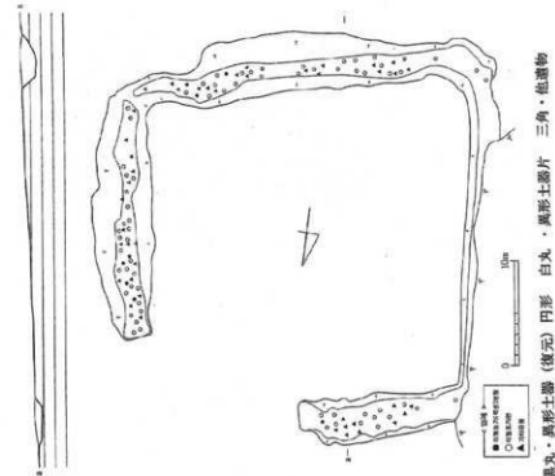
第 59 図 新羅慶州・邑南古墳群の分布

双円形、双円形というのは初めから瓢形に造ったのではなくて、一つを造ってその横に連接して造る、まあ、よく夫婦墓だと言いますが、そういう双円墳というお墓であって、方形墳は見られません。あるいは、無墳丘墓というのもたくさんあったようですが、いずれにしても、新羅も基本的に円墳、双円墳であって、方墳が初めて築造されるのは、これも皆さんが慶州に行けば必ず行かれる仏国寺というのがありますが、そのお寺の前に方墳があったと思います。つまり、これは8世紀、7世紀の終わりぐらいから後ですが、新羅が唐と連合して百濟や高句麗を滅ぼし、初めて朝鮮半島を統一した国家、統一新羅になります。それ以後のものの中に方墳が出てくるのでありますと、新羅には、日本の古墳時代に相当する時代には基本的に方墳はありません。あるいは、加耶も同様でありますと、加耶は早くに滅んでしまいますから、基本的には方墳が見られません。ただ、そう言いますと釜山あたりには福泉洞古墳群とかに方墳があるじゃないかと言われそうな気がするので、先に言っておきますが、これはほとんど墳丘が無いものでありますと、方墳というほどのものではありません。また、金海には大成洞古墳群というのもありますが、これもほとんど墳丘が無い、まったく無いわけではありませんが、ほとんど目立たないものでありますから、高塚と表現できるような古墳ではありません。そういう意味では、統一新羅になってから方墳を造るというのは、終末期のところで申しましたように、日本と同じように唐の影響ではないかというように考えることができると思います。

ということで、高句麗も、百濟も、加耶も、新羅も、日本の5世紀、竜塚古墳が5世紀の古墳でありますから、日本の5世紀の方墳と対比できるようなものは基本的にほとんどありません。高句麗や百濟は、5世紀のある段階で方墳が無くなっていますので、辛うじて高句麗、百濟の方墳築成段階の終わりごろと、竜塚古墳は時期的に繋がりを持つ可能性があるといえばあるのですが、それから新羅や加耶は基本的に無いということでありますので、日本列島との関係を積極的に強く考えるとすれば、高句麗や百濟の方墳の終わりの方ということになります。

そこで、他にはどこも無いのかというと、実はひとつ重要な地域が残っておりました。これがいわゆる全羅南道という所でありますと、朝鮮半島の西南部であります。一般的には、ここは百济の領域というように考えられていたこともありますと、古墳文化を分析していくと、あるいは古墳以外のものを分析しても、百濟の中枢とは著しく違った特徴を持っています。もっとも目に見える形で違うのは、皆さんよくご存知だと思いますが、この地域には5世紀の終わりから6世紀中葉頃にかけて、解っているだけでも13基の前方後円墳が造られているということが上げられます（一部は全羅北道に属していますが）。それで、この地域では、同じような墳に前方後円墳だけではなくて、方墳も築造されています。第60図と第61図をご覧ください。例えば第60図のチュンラン古墳ですが、「」付きで埴輪と書かれているものを墳丘に巡らした方墳です。この会場の中にはこれが埴輪か、と思われる方も居るかも知れませんが、実は、私も埴輪とは言い難いところがありまして、円筒形土器と言った方がいいのかもしれません。この時期の前方後円墳からは、日本の埴輪と比較しても、まったく遜色のない埴輪といつていいものも出ていますので、こういう円筒形のものを埴丘に巡らすというのは、何か埴輪と関係があるのではないかというように考えることは十分に可能であり、おそらくそうであろうと思われます。また、第61図の伏岩里3号墳は、墳丘に埋葬主体

第 60 図 全羅南道・チュンラン古墳

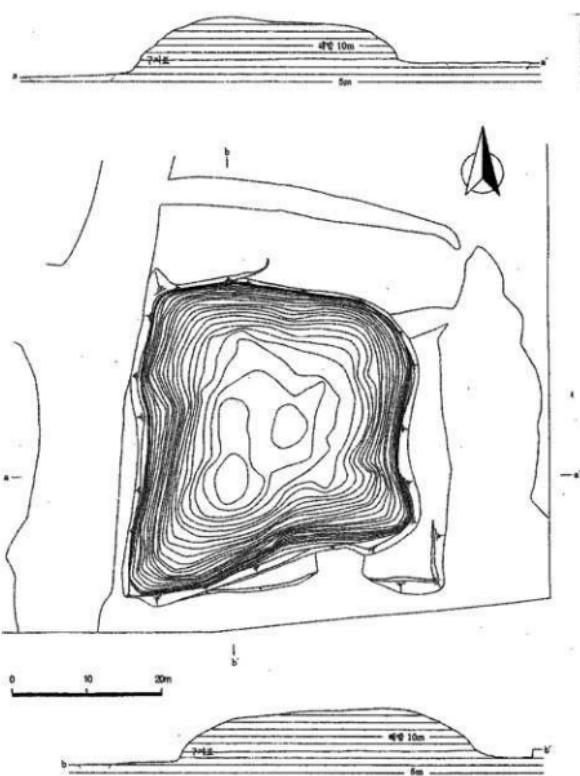


全羅南道・チュンラン古墳の「埴輪」



がたくさんあります。7世紀位まで使い続けられた方墳ですが、築造されたのは遅くとも4世紀頃までには潮上すると思われます。

そのようなことで、この地域には5世紀後半から6世紀前半に前方後円墳が造られているのと同様に方墳も造られています。ただし、全羅南道の方墳は4世紀頃から7世紀に至る長期間にわたって築造されています。しかし、ここで問題にしている5世紀後半から6世紀前半の方墳に限ると、僕との関係を必ず考慮する必要があると思います。しかし、先程見てまいりましたように、朝鮮半島ではこの時期、方墳は基本的に無い時期であります。高句麗や百濟では方墳がほぼ終わった後であ



第61図 全羅南道・羅州伏岩里3号墳の墳丘

りますし、新羅や加耶ではまったく方墳の無い時期でありますから、この朝鮮半島の西南部だけに方墳があり、しかも、そこには前方後円墳があって、埴輪があります。そして、方墳の中には埴輪と関係がありそうな円筒形土器と言いましょうか、そういうものが並べられていたということから考えると、あるいは、これらの方墳は、これまであまり議論されていませんけども、前方後円墳ばかり注目されてきましたが、日本列島との関係で、もう少し検討してみる必要があるだろうというように思われます。

では、それが竪塚古墳と関係するかというと、残念ながら今のところ両者の密接な関係をうかがわせるものは全くありません。しかし、直結はしなくとも、日本列島の方墳の性格を考える上で、今後、この朝鮮半島の全羅南道の方墳というものは、必ず参照していかなければならないであろうと思われます。

以上、いくつかの例を見てまいりましたけれども、西日本および朝鮮半島の事例を見ますと、第一に中国の大きな影響が考えられます。このことは先程申し上げました。また、高句麗や百濟、さらに、統一新羅のことも申しました。しかしそれだけではなくて、もしかしたら全羅南道の方墳というのは、日本列島との地域的な関係の中で、方墳が生まれたことも考えていかなければなりません。まだ、そうであるというように断定するつもりはありませんが、ただ、朝鮮半島の西南部の全羅南道の前方後円墳は、明らかに日本列島との関係を否定できないわけであります。もちろん、解釈にはいろいろあります。倭人の墓だといふ人もいれば、百济の倭系官僚、倭人が百济に行ってその臣下になって、十分に治められていない地域に派遣されて、前方後円墳を造ったと考えている人もいます。また、3番目の見解として、実は私もそうなのですが、在地の人が百济の支配が及ぶ時に、九州を中心とする倭人勢力との関係を強くして前方後円墳を造り、百济からの独立を何とか保とうとしていたというものです。まだ、決着は着いていませんが、いづれにしても、全羅南道の前方後円墳は日本との関係が考えられることから、それと同じように、全羅南道の方墳は、これから日本との関係を具体的に、詳しく考えていく必要があるのではないかと思います。そのことは、先程も言いましたように、竜塚古墳に直接繋がっていくとは申しませんが、方墳の性格を考える上で、重要な視点ではないかと思います。

私に与えられた時間は45分と短い時間でしたが、言うべきことをたくさん言わせていただきました。もし質問があれば、後でお答えしたいと思います。どうもありがとうございました。

主要参考文献

- 和田晴吾 1992 「群集墳と終末期古墳」『新版古代の日本』5 近畿Ⅰ 角川書店
宮澤公雄 1994 「甲斐曾根丘陵における古墳時代前半期の様相 一東山・米倉地域の再検討を通してー」『山梨県考古学論集』III
河上邦彦 1995 「大和」『全国古墳編年集成』 雄山閣
松本岩雄・大谷晃二 1995 「出雲・石見」『全国古墳編年集成』 雄山閣
宇野隆夫 1995 「前方後方形墳墓体制から前方後円墳体制へ 一東日本からみた日本国家の形成過程ー」『西谷眞治先生古希記念論文集』 勉誠社
小林健二ほか 2006 『甲府盆地から見たヤマト 一甲斐銚子塚古墳出現の背景ー』
土生田純之 2006 『古墳時代の政治と社会』 吉川弘文館
藤田和尊 2007 「陪塚の展開」『考古学論究 一小笠原好彦先生追任記念論集ー』
土生田純之 2008 「古墳時代の実像」『古墳時代の実像』 吉川弘文館

東日本における竜塚古墳の歴史的位置付け

新潟大学人文学部教授 橋本博文

橋本です。よろしくお願いします。

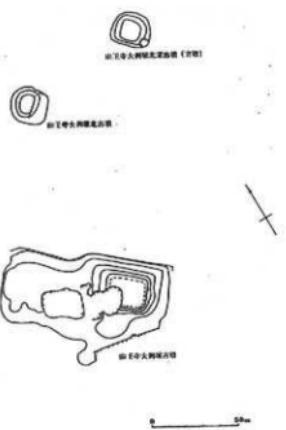
山梨県は非常に懐かしいところで、私が大学院の修士課程の時にこの甲府盆地に来て、いろいろな古墳を見たり、今日のお話の中に出てまいりました岡・銚子塚古墳の測量調査を行ったりしました。そういうことでとても感無量なんですが、岡・銚子塚古墳を測量調査している時に竜塚古墳の存在が気になりました。その時点では首長墓の変遷ということで、中道地区と八代地区の関係を甲斐銚子塚古墳と岡・銚子塚古墳の同時性とその後の様相というかたちで対比して考えたことがあります。その段階で非常に難しかったのは、当時まだ竜塚古墳が未発掘でありまして、この方墳がいつの時期に造られたものかというデータがまったくありませんでした。それで、中道地区にある4世紀前半に築造された小平沢古墳が前方後方墳であることから、方系の古墳ということで小平沢古墳と対比して位置づけを行ったことがあります。ですが、竜塚古墳の最近の調査で土器が出土し、時期が5世紀前半になるという説明が先程ありました。ということで、この調査の結果を参考にしながら東日本の他の方墳からみた場合に、竜塚古墳がどのように位置づけられるのかということをお話ししたいと思います。

東日本には、大塚先生からもお話しがありましたように、前期段階に方形周溝墓の系列になる方墳もありますが、前方後方墳との関係でとらえられるような方墳もあり、中期にも方墳があるということが分かってきています。そして、後期段階はまったく無いというわけではありませんが、あまり目立ちません。終末期の6世紀末から7世紀代になると、房総地域と上野地域で終末期の大型の方墳が見られるようになります。ここでは、終末期の方墳に関する話ではなく、竜塚古墳から出土した土器の年代観から、5世紀前半を前後する前期と中期の方墳を中心見ていくたいと思います。

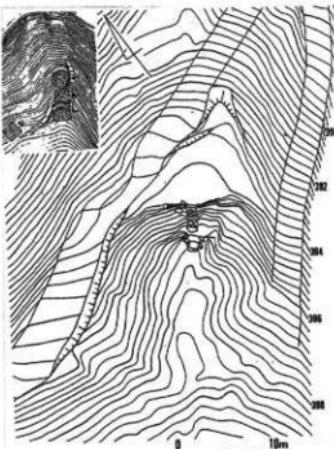
それでは、お手元の資料をご覧いただきたいと思います。まず、方形周溝墓からの流れというものの、それから先程も言いましたが前方後方墳との関係、前方後円墳との関係、円墳との関係、単独墳という見方、土生田先生からお話しのあった積石塚との関係、以上の6点が検討課題となってまいります。

そこで、四角の形をした墳墓がどのように存在しているのか、その存在形態をチェックしていくと思います。まず、第63図をご覧ください。栃木県の例ですが、山王寺大舛塚古墳という前方後方墳があります。この古墳の北に山王寺大舛塚北古墳、北東の方に山王寺大舛塚北東古墳が存在します。これらは方墳の可能性が非常に高いもので、こういう前方後方墳に付いてくる方墳の存在が浮かび上がってくるわけです。

それから、これは前期段階のものと考えられますが、第64図、長野県の大星山古墳群の例です。丘陵の突端の斜面に代々といいますか、小形の方墳と円墳が造られていく様子がうかがえます。



第63図 山王寺大樹塚古墳、同北古墳、同北東古墳位置関係図

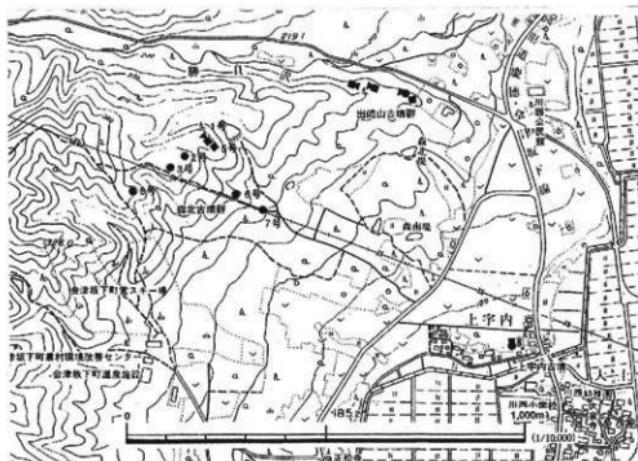


第64図 大星山古墳群

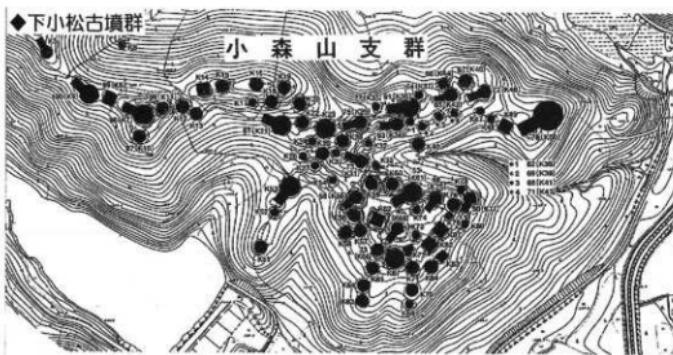
これは方墳と円墳が近接して存在する例です。

続いて第65図ですが、これは福島県の会津にある森北古墳群と出崎山古墳群の例です。出崎山古墳群には前方後方墳が2基、前方後円墳が1基、そして方墳が1基あります。それから森北古墳群は5号墳が方墳で、その隣の1号墳が前方後方墳ですが、前方後方墳と方墳との関係がとらえられる例です。

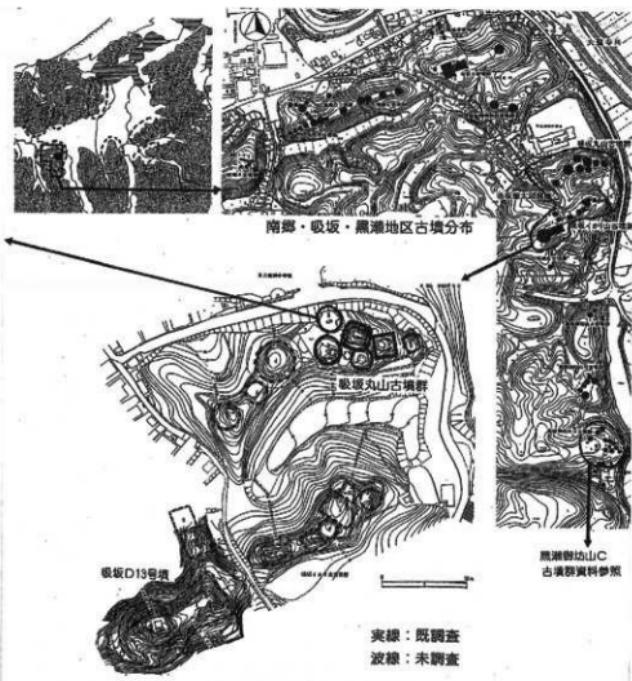
次に第66図ですが、これは山形県の下松古墳群の例です。ここには私も行ったことがあります、丘陵の一番高いところの稜線と若干ある狭い平坦面に、非常にたくさん古墳が群在しています。この古墳群は、各所を中心となる前方後円墳が配置されておりまして、その周りに円墳群が分布していますが、その中に混ざって方墳が認められます。



第65図 森北古墳群周辺の古墳群



第66図 小森山支群古墳分布図



第67図 吸坂丸山古墳群

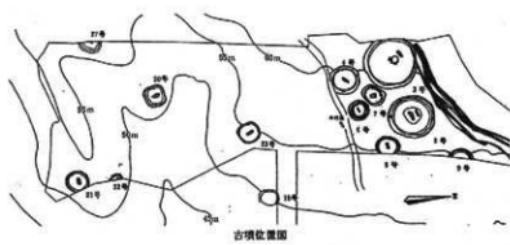
さらに第 67 図、石川県加賀市の吸坂丸山古墳群の例ですが、これは 4 世紀から 5 世紀後半にかけての例でして、円墳とこれに隣接して方墳が築かれている様子がうかがえます。

さらに第 68 図ですが、新潟県三条市の保内三王山古墳群の例です。これは、信濃川右岸の低地を見下ろす丘陵上にある古墳群で、甘粕健先生を中心になって新潟大学が調査したものです。全ての古墳を発掘調査しているわけではないので、その様相がすべて分かっているわけではありません。

この中の三王山 11 号墳という一番高いところにある古墳は、帆立貝式古墳あるいは造り出し付きの円墳と言われている前期古墳でして、組合せ式の木棺を直葬しています。この古墳からは、副葬品として小型仿製鏡の四獸鏡が 1 面と玉類等が出土しています。この古墳の北東側には、古墳群の中で一番大きな古墳である三王山 1 号墳という前方後円墳があり、すぐ近くには三王山 4 号墳という前方後方墳があります。これらの古墳を中心にして、各尾根の先端に小形の方墳が散在しております。例えば三王山 3 号墳ですか、三王山 16 号墳、三王山 14 号墳です。そして先程お話をした三王山 11 号墳の周りには、三王山 10 号墳とか、三王山 12 号墳があります。ただ、この前方後方墳も埋葬施設が調査されているわけではないので、年代観はよく分かりません。また、方墳の方も調査されておりません。しかし、比較的同時期に存在した可能性が高い前期段階の前方後方墳と方墳との関係というものが、この中でとらえられるのではないかと



第 68 図 保内三王山古墳群構成図



(田海義正 1998 「黒田古墳群—古墳時代中期の群集墳の調査」『発掘調査報告会'98』新潟県教育委員会ほか)

第 69 図 黒田古墳群調査古墳分布図

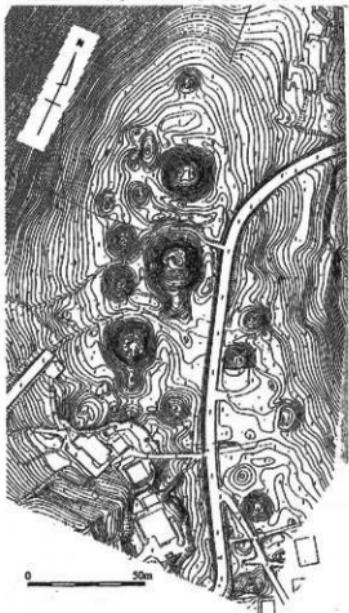
思います。ちなみに、古墳群の中の一部の円墳を調査しておりますが、その中に MT15 型式の須恵器を出す 6 世紀前葉の時期の円墳も含まれています。

次にまいりまして第 69 図、同じ新潟県であります上越市の黒田古墳群の例です。黒田古墳群は、上信越自動車道の建設に伴って、新潟県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査したものです。このほとんどが円墳の初期群集墳で、中期の 5 世紀中頃から後半にかけての群集墳です。その中の一つ、20 号墳が方墳です。円墳と方墳との埋葬施設の違い、副葬品の違いという点はあまりありませんが、この方墳は埋葬主体部の主軸がほぼ東西方向でありますし、円墳の多くが主軸を北東、南西方向を取るものが多いという中で、少し違いが見られる例です。

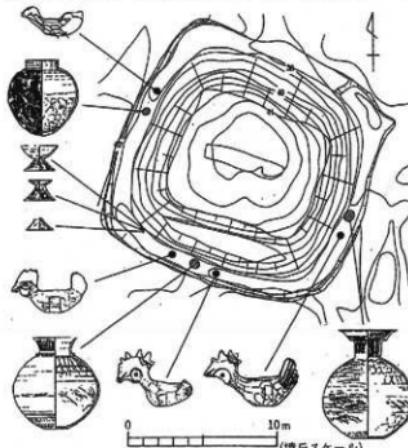
次に第 70 図ですが、埼玉県の塩古墳群の例です。古墳群の中心に前方後方墳が 2 基あります。その周間に一見すると円墳に見えますが、発掘調査の結果では大方が方墳で、前方後方墳と方墳との関係からなる古墳群という例です。これも前期段階のものです。

さらに先程も触れましたが、第 71 図、石川県の吸坂丸山古墳群の中の 1 号墳という古墳の例です。これは周囲に周溝を廻らした方墳で、周溝内の南北、東西のほぼ中央から、鳥形土製品という非常に変わったものが出土しています。これは鶴冠を持っておりまして、胴体部分の下に穴が開いていますが、そこに棒を差して立てるようなかたちで、おそらく墳丘側に立てられていたものと思います。そして、それが朽ちてこの周溝内に落ちたと思われますが、他の土器と一緒に出土しました。これは前期の例ですが、真赤に塗った鶴形の土製品が出土している例です。

次に第 72 図、私の郷里の群馬県太田市の中ノ邑楽郡大泉町にあります御正作遺跡の例です。御正作遺跡では、方形周溝墓が円形周溝墓と一緒に確認されてお



第 70 図 塩古墳群分布図



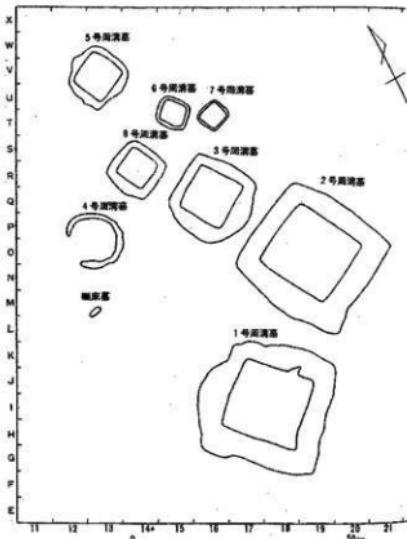
第 71 図 石川 吸坂丸山 1 号墳

りまして、他に周溝を伴わず、刀を出土した礎床墓というものがあります。これらの周溝墓は埋葬施設が確認できなかったのですが、壙の中から土器が供獻されたようななかちで出土しております。その土器から見ると弥生時代ではなく古墳時代前期段階の方形周溝墓で、小規模なものから大規模なものに変遷していく傾向がうかがえます。

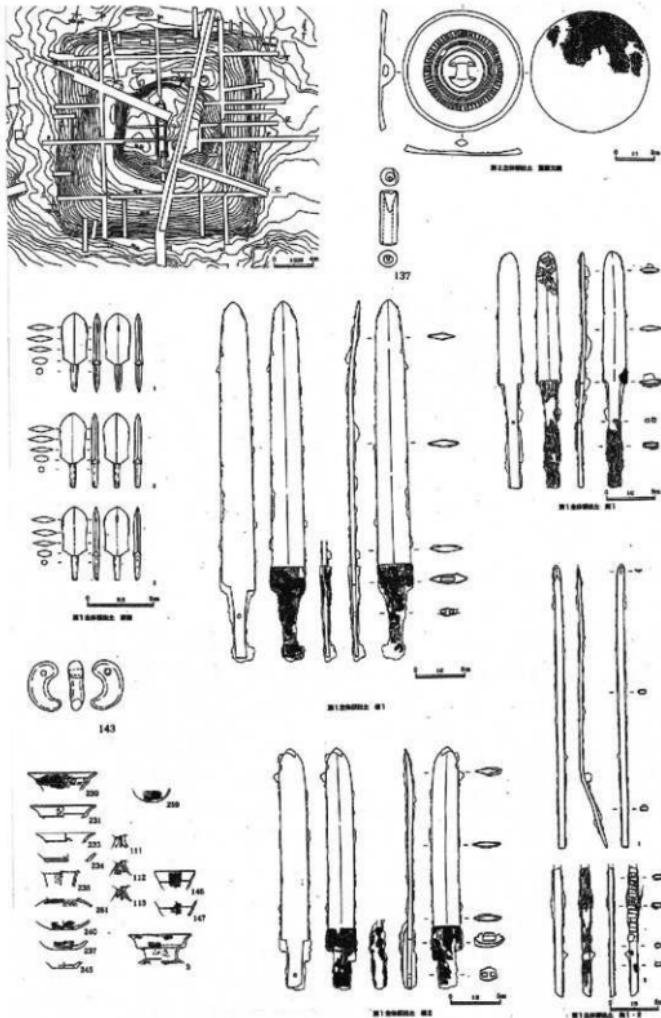
続きまして第73図です。大塚先生のお話の中にも出てきましたが、群馬県の太田市に、北関東横断道の建設に伴って財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査した成塚向山1号墳という方墳があります。この方墳は、規模が一辺21mある正方形のもので、埋葬施設が2つ確認されています。そのうちの第2主体の方から小型仿製鏡、これは重圓文鏡ですが、そういう小型鏡が出土しています。それと、滑石製の管玉も出土しています。時期的に前期でも新しい様相をもつ段階のものと考えられておりまして、山川出版社の『前方後円墳集成』の10期編年の中で位置付けますと、4期段階に位置付けられるものと考えられます。さらに、第1主体の方からは、青銅製の鎌、鉄劍、槍、鉢というように、武器や工具類が出士しております。また、翡翠製の勾玉も1点出ておりますが、方墳の内容がわからない中にあって、これは基準資料となるような良好な資料ということになります。この第1主体は粘土櫛、粘土床に近いのですが、方墳でこのような遺物を持っている例として、ひとつ基準にしてみたいと思います。

次に第74図です。群馬県渋川市の行幸田山遺跡のA区1号墳という古墳の例です。この古墳は棟名山の麓にあって、小高い丘陵の上に立地しております。この立地の在り方は、先程の成塚向山1号墳と同様に、竜塚古墳の立地の在り方とよく似ております。基本的には単独墳で、周りに新しい古墳がありますが、同じ時期のものはありません。この方墳からも青銅製の鎌が出土しておりますし、短剣などが少量副葬されています。また、ガラス玉も出土しています。青銅製の鎌の編年から見ると、先程の成塚向山1号墳と同時期の4期段階と考えられます。

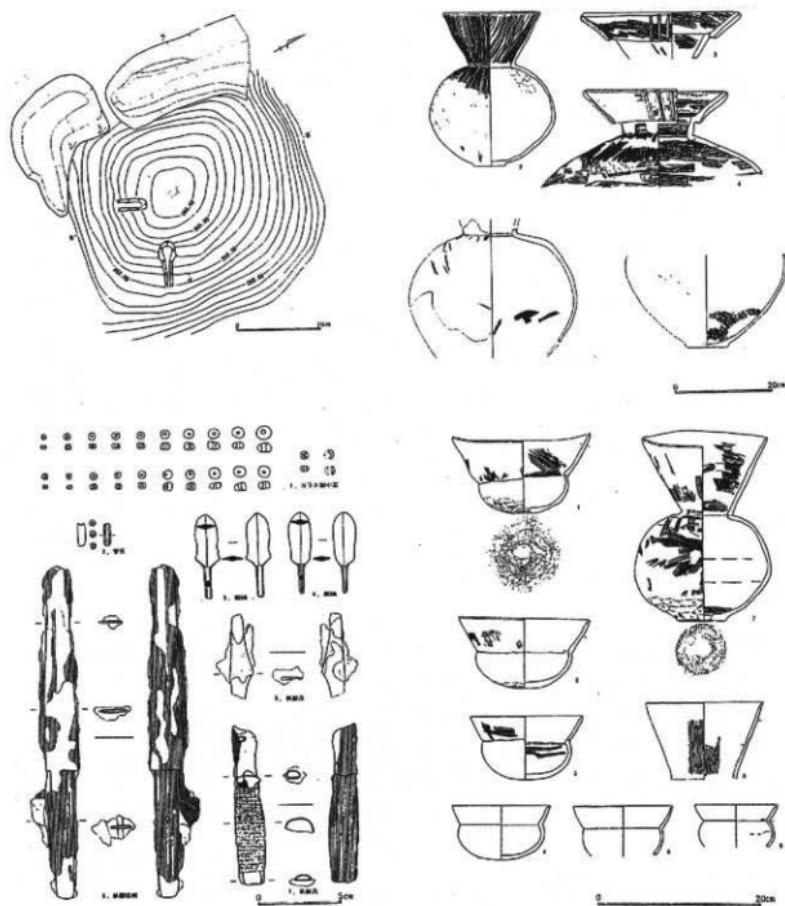
続きまして第75図の南原古墳です。この古墳は群馬県の赤城山南麓地域、現在、市町村合併で伊勢崎市に編入されましたが、旧赤堀町にあります。赤堀町というと家形埴輪群を出土した有名な赤堀茶臼山古墳が知られていますが、南原古墳はその赤堀町にあります。この古墳は、丘陵際の高所にありまして、単独墳的な在り方を示す一辺が16mほどの小型の方墳で、開墾時に小形の鏡が出土しています。残念ながら図を載せることはできませんでしたが、この鏡は小型仿製鏡のうち、珠文鏡といわれる前期に遡る鏡で、珠文が一列に配される小林三郎先生の分類のB類にあたるタイプ



第72図 御正作遺跡 周溝墓・礎床墓分布図



第73図 成塚向山1号墳



第74図 行幸田山遺跡 A区1号墳

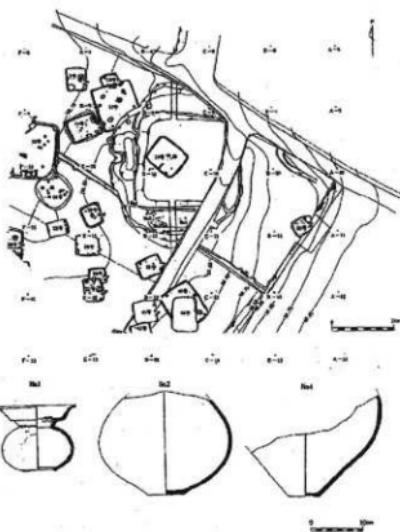
の鏡です。また、底部穿孔の壺形土器も出土していますが、これも『前方後円墳集成』編年の4期段階に位置付けられるものと考えられます。

次に第76図、先程、宮澤先生から説明がありましたので、あまり詳しく触れる必要はないと思いますが、東山南遺跡の例です。ここは、丘陵の平坦面に小さな谷が入っておりまして、そこでちょうど分かれる形で、西側のA区の方に小規模な円形と方形の低墳丘の墳墓が、そして東側のB区の方に少し大きな円形の墓がそれぞれ認められます。資料の真中あたりに直刀を縦に掲載してあります、それを境に左側が東山南遺跡のA区から、右側がB区から各々出土した遺物です。左側に

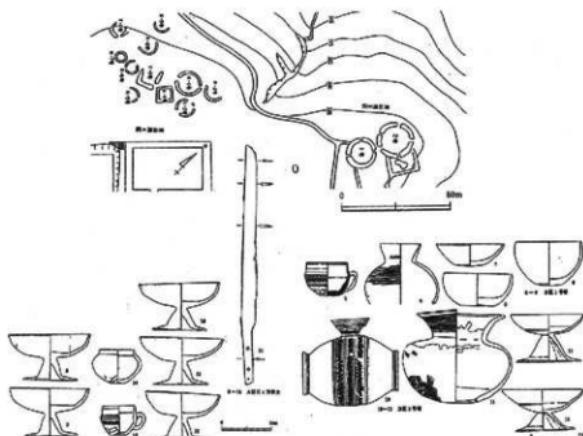
掲載した土器は、直刀も含めて A 区の K-4 号方形周溝墓から出土したもので、この中には、カップ形をした初期須恵器も含まれております。また、反対の右側ですが、B 区の 2 号墳という円形の墓からも、やはりカップ形の須恵器と、その下の樽形甕という初期の須恵器が出土しています。このようなことから、時期的にはそれほど大きな差はないともいいと思いますが、そういう相前後する時期にこういう方形の低墳丘の墓と円形の低墳丘の墓が、5 世紀の中頃から第 3 四半世紀ぐらいを中心に群在して造られているという状況がこの甲府盆地の中で認められるということになります。

続いて第 77 図ですけども、東山北遺跡の例であります。先程もお話に出てきましたが、ここでも方形の低墳丘のお墓といいますか、方形周溝墓とされているものが見つかっております。そして、そこから土器だけでなく、鉄製品やいろいろなものが出土して、非常に注目されるわけです。特にここでは馬の歯か骨、そういう馬の埋葬に伴うものが出土しております。これに他の遺物、S 字状口縁台付甕などの東海系土器も入っておりますけども、前期段階に遡る例で、そういう馬に関連するものとしては、全国的に最も古い時期に遡る例として注目されています。

次に第 78 図の塩部遺跡の例です。宮澤先生や

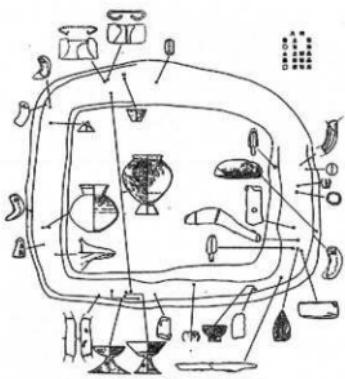


第 75 図 南原古墳



第 76 図 東山南遺跡

山梨県埋蔵文化財センターの末木さん（現、山梨県立考古博物館）からご教示をいただいたのが塩部遺跡で、これは方形周溝墓とされているものなんですが、その中から馬の埋葬に伴うものが出土



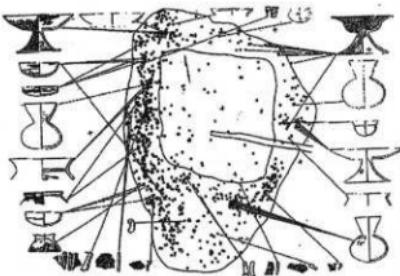
第 77 図 東山北遺跡

しているということです。これもやはり前期段階に遡る土器が併せて出土しておりまして、こういう被葬者をどのように考えていいたらいいのかということで、非常に注目される例です。

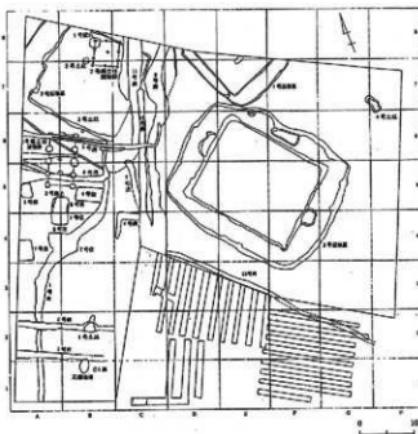
それと第 79 図の桜井畠遺跡 A 地区の資料です。ここでは、方形周溝墓の大型化の傾向が見られます。前期段階のもので、先程の群馬県の御正作遺跡の例と同じように、方形の低墳丘の墓の大型化していく様子がうかがえる例です。

さらに第 80 図、上野遺跡の例ですが、方形の墓と円形の墓が隣接して認められます。これは方形の墓から円形の墓へと移行していく例です。出土土器より、前期から中期初頭くらいまでの移り変わりがうかがえます。

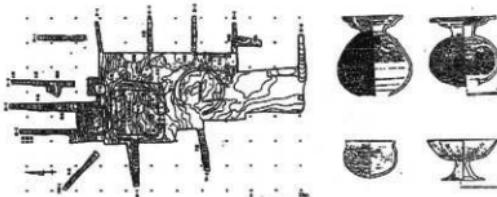
そして第 81 図、鳥居原狐塚古墳の例です。これは、先程、宮澤先生からもお話しもありましたが、最近、トレンチによる調査や電気探査を駆使した調査で墳形確認が



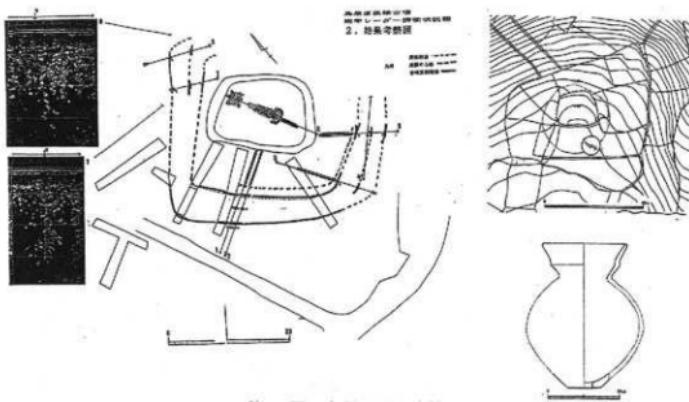
第 78 図 塙部遺跡



第 79 図 桜井畠遺跡 A 地区遺構配置図



第 80 図 上野遺跡



第 81 図 烏居原古墳

行われているようで、方墳になったということです。先程の説明にありましたように、中国吳の赤鳥元年銘鏡という鏡が出土しており、その他に滑石製の白玉も一緒に伝わっていたり、底部穿孔の壺もあったりというように、この古墳が前期末に来るのか、中期初頭に来るのかが問題になります。可能性としては中期初頭まで下らせれば、竜塚古墳をどこに位置付けるのかという問題もありますが、甲府盆地では近い時期の古墳ということで非常に注目されます。

次に第 82 図です。先程お話しした方墳の在り方というところの繰り返しになりますが、これについては大塚先生が触れられているので、あまり触れる必要がないかもしれません。栃木県の那須の資料で、前方後方墳と方墳との関連です。この中の那須八幡塚古墳と吉田温泉神社古墳が前方後方墳です。そして、一番大きな方墳が第 83 図の吉田富士山古墳です。それと第 84 図の觀音堂古墳という一辺が 30m ある方墳があります。それ以外は、これらよりも小さい古墳が群在しているという様相がうかがえます。この中に前方後方墳を頂点にし、さらに大型の方墳とその下位の中小の方墳という階層構造がとらえられるのではないかということが考えられます。

統いて第 85 図です。ここに掲載してある鏡は、栃木県の文殊山古墳から出土したと云われている半三角縁というか、三角縁神獣鏡ではない小形鏡です。これは 1 号墳という方墳から銅鏡も一緒に出土したのではないかとされておりまして、群馬県の 20m クラスの方墳の副葬品の在り方と共通するような傾向がうかがえます。

それと第 86 図、北原東古墳というのがあります。これは方墳で、隣に S 字状口縁台付壺の B 類のものと、その下に直刃の鎌がありまして、これも前期の資料ということになります。

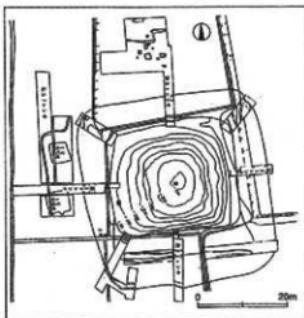
さらに第 87 図ですが、これも栃木県の例で、神主 38 号墳という上三川の大型の円墳がありますが、その周辺で確認された方形の墓です。ここからは、滑石製の模造品が出土しております。この滑石製模造品は斧と鎌でして、鎌は直刃の鎌で、中期の 5 世紀前半代の様相がうかがえます。そういう副葬品をもつ方形の墓が栃木でも確認されています。



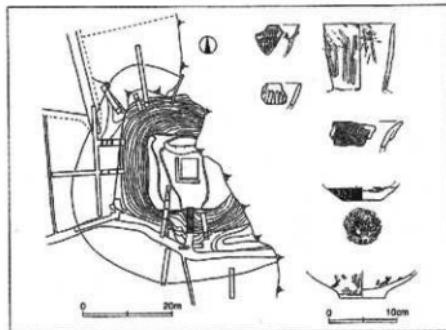
第82図 吉田温泉神社古墳群と
那須八幡塚古墳群

那須地域の前期古墳一覧					
no	古墳群名	古墳名	墳形	規模(m)	時期
1	侍塚古墳群	侍塚古墳	前方後方墳	84	Ⅲ 銅鏡神獣鏡か
2	+	侍塚8号墳	方墳	17	Ⅲ 昭和52年調査 器台
3	上侍塚古墳群	上侍塚北古墳	前方後方墳	48.5	Ⅲ 未調査、素石なし
4	+	上侍塚古墳	前方後方墳	114	Ⅲ へな土、鏡、素石
5	三輪仲町遺跡	2次1号墳	方墳	16	Ⅱ 墳丘削平、森、堀
6	+	7次1号墳	方墳	14	—
7	+	7次2号墳	方墳	10	—
8	+	7次3号墳	方墳	9	—
9	+	7次4号墳	方墳	8	—
10	+	7次5号墳	方墳	12	—
11	+	7次6号墳	方墳	—	—
12	+	9次1号墳	方墳	—	—
13	駒形大塚古墳	駒形大塚古墳	前方後方墳	60.5	Ⅱ 木製櫛、圓文帯被
14	吉田温泉神社古墳群	吉田温泉神社古墳	前方後方墳	47	Ⅱ 木製櫛、鏡斧、朝
15	+	2号墳	方墳	—	—
16	+	3号墳	方墳	16	Ⅱ 素石、有段口迎蓋
17	+	4号墳	方墳	18	Ⅱ 有段口迎蓋
18	+	5号墳	方墳	12	Ⅱ 塔
19	+	6号墳	方墳	15	Ⅱ 塔
20	+	7号墳	方墳	13	Ⅱ S字鉢、鏡
21	+	8号墳	方墳	17	Ⅱ 塔、有段口迎蓋
22	+	9号墳	方墳	13	Ⅱ 牛ぎみ鏡
23	+	10号墳	方墳	9	Ⅱ 高杯、塔、鉢
24	+	11号墳	方墳	5.5	— 装飾蓋、鏡
25	+	12号墳	方墳	7	—
26	+	13号墳	方墳	9	—
27	+	14号墳	方墳	7	—
28	+	15号墳	方墳	8	—
29	+	16号墳	方墳	15	—
30	+	17号墳	方墳	9	—
31	+	18号墳	方墳	11	Ⅱ 塔
32	+	19号墳	方墳	16	Ⅱ 複合口迎蓋
33	+	20号墳	方墳	10	— 複合口迎蓋
34	+	鰐音堂古墳(21号墳)	方墳	30	— 器台
35	那須八幡塚古墳群	那須八幡塚古墳	前方後方墳	60.5	Ⅱ 木棺木口格土、覆瓦鏡
36	+	吉田富士山古墳	方墳	30	—

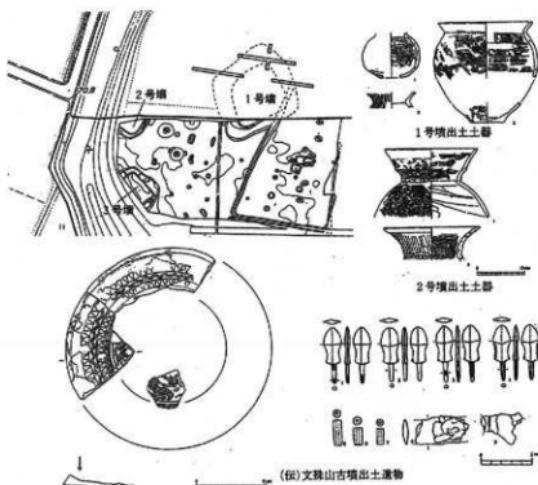
第4表 那須地域の前期古墳一覧



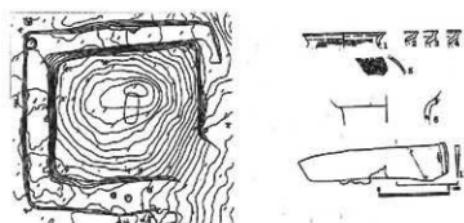
第83図 吉田富士山古墳



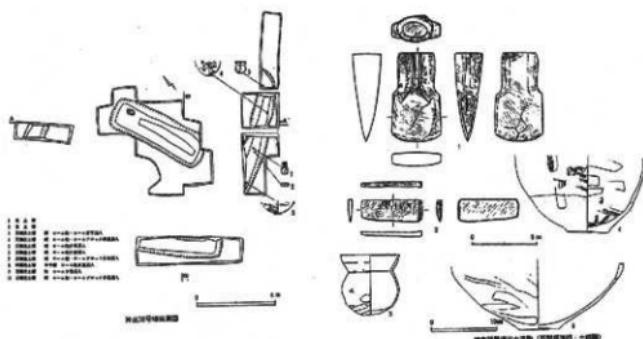
第84図 鰐音堂古墳と出土遺物



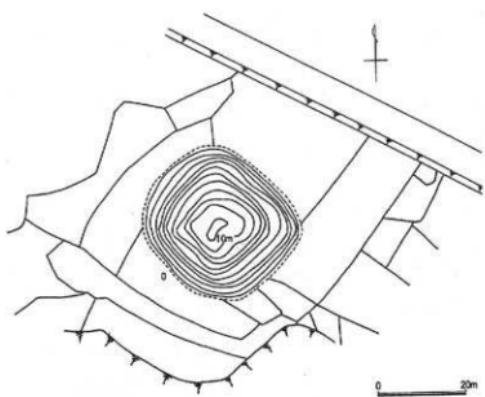
第85図 文殊山古墳出土遺物



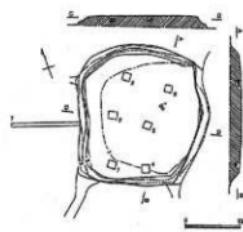
第86図 北原東古墳



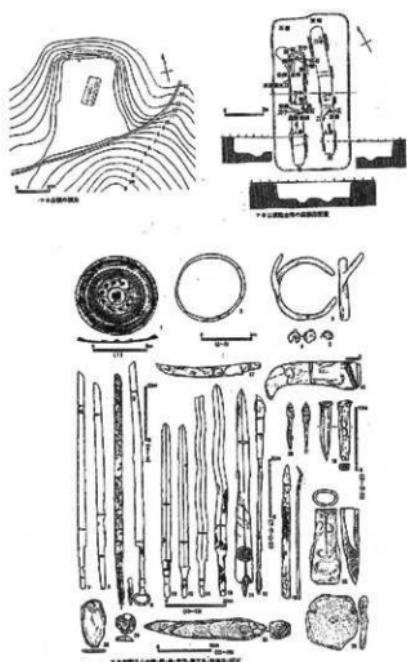
第87図 神主38号墳



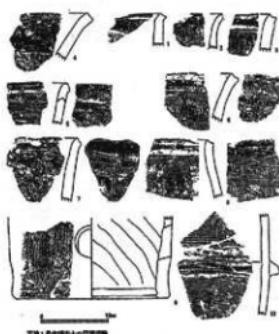
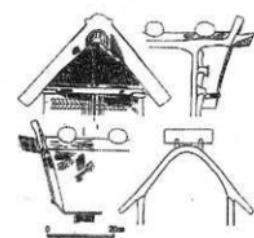
第88図 中曾根親王塚古墳



天神1号墳断面図



第89図 フネ古墳



第90図 天神1号墳

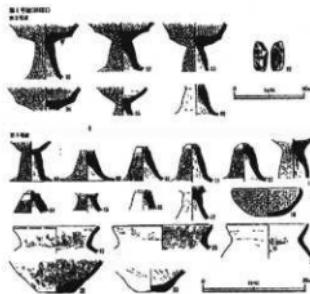
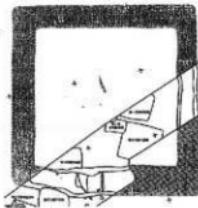
次ですが第88図、長野県の佐久にある中曾根親王塚古墳の墳丘図です。これも先程、伊藤さんが示した規模の大きな方墳の集成の中にも出てきましたが、東日本の中にあってこの竜塚古墳に次ぐ規模を持つ一辺が52m前後の方墳と考えられるものです。残念ながら発掘調査が行われていないので、はっきりとした年代は分かりませんが、やはり竜塚古墳と同じような時期の中期前半代くらいにくる方墳ではないかとされております。今日、この会場に来られている長野市の風間さんなどはそのように考えられています。

この中曾根親王塚古墳以外にも、長野県には方墳ではないかとされているものがあります。第89図、諫訪のフネ古墳とか、第90図、天神1号墳の例を挙げておきました。このうち、フネ古墳などは非常に大量の鉄製の武器、そして工具、農具が出土しており、小型鏡も副葬しております。

次に第91図に、神奈川県の例で、御屋敷添1号墳という一辺が30mの方墳で、古墳時代中期の5世紀中頃から第3四半世紀にかけてのものを示します。

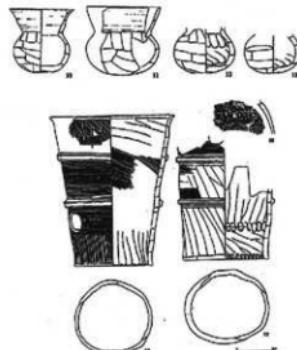
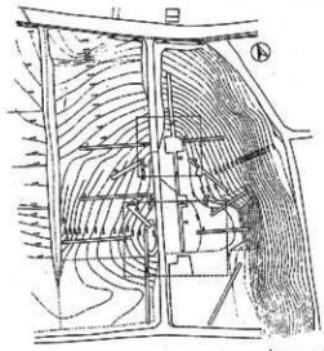
そして第92図、群馬県の例ですが、白石稻荷山古墳という藤岡市にある大型の前方後円墳の近くに位置する陪塚的な性格を有するのではないかといわれている長方墳の十二天塚古墳とか十二天塚北古墳が注目されます。

ここからは、雁鷗系といいますか、雁や鴨のような水鳥をかたどった容器形の土製品が出土しておりますが、そういうものが朝鮮半島と関わりのある可能性があります。ちなみに白石稻荷山古墳の副葬品の中に、朝鮮半島系の鈴



位置：厚木市愛甲 墳形：方墳 規模：（一辺30m）
内部主体部：不明 時期：7期（土師器・TK208～23並行）

第91図 御屋敷添1号墳



十二天塚北古墳(上)・十二天塚古墳(下)

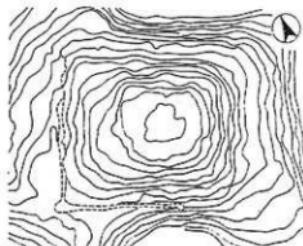
第92図 十二天塚古墳

付きの刀子柄が含まれているということも、白石稻荷山古墳の周辺に朝鮮半島と関わりが深い人物がいた可能性を考えることができます。

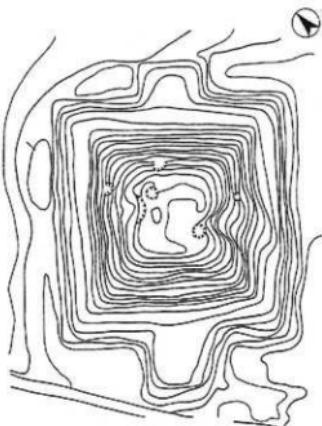
それから、東日本の東海地方の中で伊勢と遠江に大型の方墳が存在しています。そのうちの一つが、第93図の伊勢の権現山2号墳です。これは、はっきりした根拠がないのですが、5世紀前半で、前方後円墳集成の5期段階と想定されています。さらに第94図の明合古墳です。これも伊勢にある古墳で、造り出しが2つ対向辺の中央に付いている非常に変わった方墳です。古墳の墳丘 자체が一辺60mですから、このあたりがおそらく東日本で最大の方墳で、これを方墳と認めるかどうかということもありますが、造り出し付きの方墳としては最大のものということになるかと思います。そして、この明合古墳に次ぐ規模を持っているのが権現山2号墳で、短辺が30m前後、長辺が40mあります。

次に第95図、静岡県の五ヶ山B2号墳です。この古墳からはかなり優秀な副葬品、甲冑類や盾とか武器武具類が出土しており、そういうものを持つ規模の大きな長方形墳といえます。

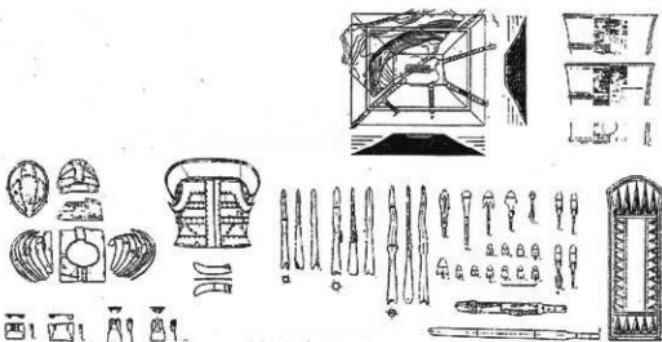
最後に目を通していただければと思いますが、先程、土生田先生のお話の中にもありましたように、積石塚との関係ということで、第96図、第97図、第98図、第5表に方形の積石塚に関する資料を挙げておきました。



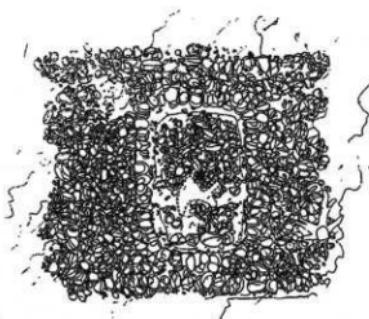
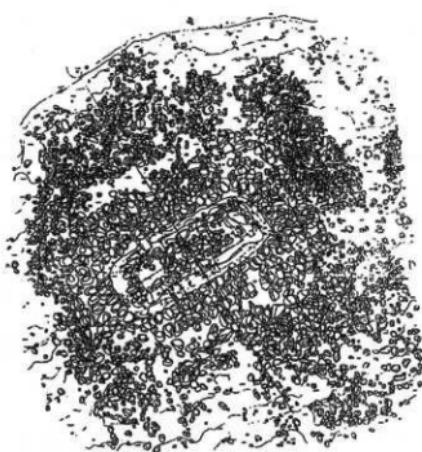
第93図 権現山2号墳



第94図 明合古墳

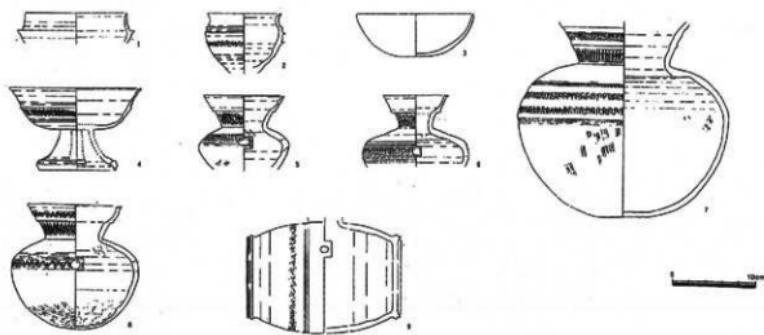


第95図 五ヶ山B2号墳

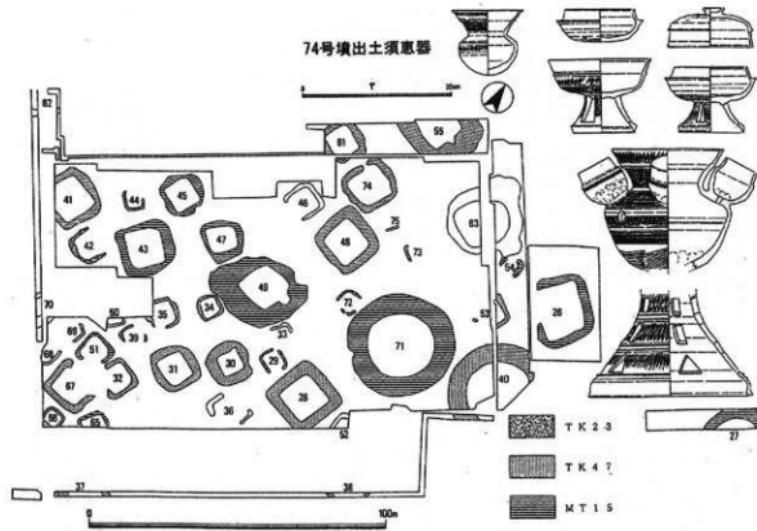


東谷 2号墳 (1/100)

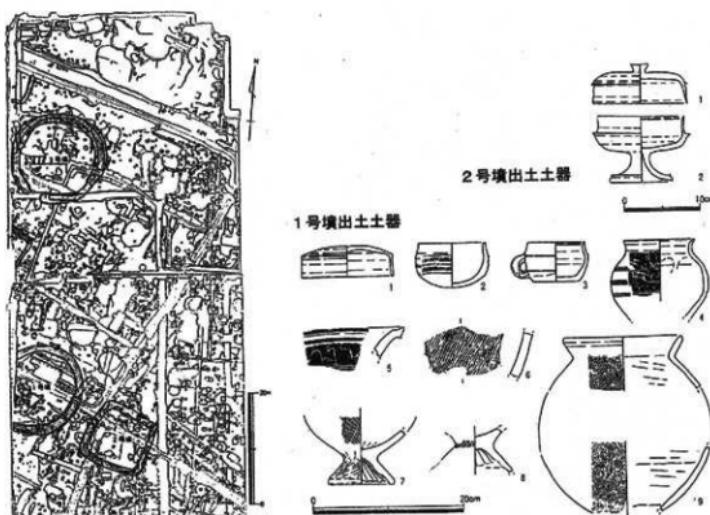
東谷 1号墳 (1/100)



第96図 二本ヶ谷積石塚古墳群



第97図 石墓師直古墳群



第98図 名古屋城三の丸遺跡

No	古墳名	所在地	墳丘形態・規模	主体部構造・規模	備考	測量
1	積石	利根郡館和村	円、径7m	竪穴、1.85×0.6 横穴、4.1×1.0	土師器器、坏、FP下 直刀、管玉、FP下	○
2	霞丘平3号	利根郡馆和村	円、径7.3m			
3	川越原1	利根郡馆和村	方、2.5×2.1			
4	川越原2	利根郡馆和村	方、1.5×3.1			
5	川越原3	利根郡馆和村	方、1.2×2.8			
6	川越原4	利根郡馆和村	方、2.3×2.6以上	竪穴、1.1×0.2		
7	川越原5	利根郡馆和村	方、2.0×1.8			
8	川越原6	利根郡馆和村	方、2.1×2.0			
9	川越原7	利根郡馆和村	不整、1.7×1.2			
10	川越原8	利根郡馆和村	不整、5.9×4.8			
11	川越原9	利根郡馆和村	不整、1.0×1.3			
12	川越原10	利根郡馆和村	不整、2.7×1.5			
13	川越原11	利根郡馆和村	不整、2.5×1.7			
14	川越原12	利根郡馆和村	不整			
15	川越原13	利根郡馆和村	不整			
16	伊勢	北群馬郡子持村	円、径8m	横穴、4.8×0.9	玉、直刀、刀子、铁 劍、耳環、須恵器 土師器、FP下	○
17	有瀬1	北群馬郡子持村	円、径7.4	横穴、4.8×0.9	直刀、刀子、铁劍、 FP下	○
18	有瀬2	北群馬郡子持村	円、径14.0	横穴、5.5×1.3	直刀、铁劍、須恵器 土師器、FP下	○
19	丸子山	北群馬郡子持村	不整、7m	横穴	管玉、FP下	
20	田尻	北群馬郡子持村	方、10m	横穴	FP下	
21	坂下1号	渋川市坂下町	方、1.6×1.2	竪穴、1.8×0.5	FA下	
22	坂下2号	渋川市坂下町	方、1.8×2.5	竪穴、2.0×0.5	FA下	
23	坂下3号	渋川市坂下町	方、1.0×2.2	竪穴、1.6×0.4	FA下	
24	坂下4号	渋川市坂下町	方、1.0×2.0	竪穴、1.4×0.4	FA下	
25	坂下5号	渋川市坂下町	方、1.5×1.3	竪穴	FA下	
26	坂下6号	渋川市坂下町	方、1.8×4.5	竪穴、1.8×0.5	日付2、FA下	
27	東町	渋川市東町	方、5.8×5.5	竪穴、1.3×0.3	土師器、FP下	○
28	空穴5号	渋川市行幸田	円、径5.0	横穴、4.8×0.6	FP上	
29	空穴6号	渋川市行幸田	円?	横穴	FP上	○
30	空穴11号	渋川市行幸田	円、径4.5	横穴、1.5×0.7	FP上	○
31	空穴24号	渋川市行幸田	円、径4.0	竪穴、耳環、須恵器	FP上	○
32	空穴25号	渋川市行幸田	円、径6.5	竪穴、1.7×0.4	直刀、FP上	
33	空穴21号	渋川市行幸田	椭円、4.3×2.8	竪穴、1.9×0.4	FA下	
34	空穴26号	渋川市行幸田	円、2.0×1.8	竪穴、0.7×0.15	土師器、FA下	
35	空穴22号	渋川市行幸田	長方、2.5×1.4	竪穴、0.8×0.25	FA下	
36	空穴21号	渋川市行幸田	円、1.8×1.5	横穴、1.1×0.7	FP上	
37	空穴23号	渋川市行幸田	円、1.8×1.5	竪穴、1.8×0.4	FP上	
38	空穴23号	渋川市行幸田	円、1.8×2.3	竪穴、0.75×0.3	FP下	
39	空穴20号	渋川市行幸田	円	横穴	FP上	
40	豊2号	渋川市行幸田			耳環、勾玉、滑石白 玉、ガラス玉 海螺、漆筒、簪、鍔 甲冑、鍔手、FP下	○
41	谷ノ1号	群馬県筑摩町	方、21.8m	竪穴、2.7×0.7		○
42	谷ノ2号	群馬県筑摩町	方、7m以上			
43	福岡森	群馬県筑摩町	方、10m以下			
44	姉崎長瀬西	高崎市姉崎町	方			
45	姉崎長瀬西	高崎市姉崎町	方			
46	姉崎長瀬西	高崎市姉崎町	方			
47	姉崎長瀬西	高崎市姉崎町	方			
48	姉崎長瀬西	高崎市姉崎町	方			

第5表 上野における積石塚集成表

最後の最後に、簡単にまとめてみたいと思います。この竜塚古墳をめぐって、どのように分析していったらよいかということですが、一つは竜塚古墳を5世紀前半の古墳と認めるかという問題があるわけです。そのあたり、同時期の古墳で、規模の差を比べて見た場合に、先程いいました『前方後円墳集成』の5期という時期なんですが、伊勢にもそういう大きな方墳があるということです。それと、中部地方に竜塚古墳と長野の中曾根親王塚古墳というものがほぼ同規模の大型墳として認められるというあり方を示しています。

ここまで、資料を細かく見てきましたが、方墳の中には前期段階の方形周溝墓、前段階の弥生からの方形周溝墓の流れのもの（A類）と、前方後方墳と方墳との関係の階層性を持つもの（B類）と、中期段階の前方後円墳に接したその陪塚的な方墳（C類）、それと低墳丘の前代の弥生の周溝墓から繋がるかどうかという問題がありますけれども、これも朝鮮半島との絡みで、先程の土生田先生のお話の中にもありましたようなもの（D類）とも、関連づけて考えていくのも一つ手かもしれません。

ませんが、そういうものが挙げられます。それと、単独で築造された規模の大きい方墳（E類）ということで、これなどは竪塚古墳との関係で見ていくべきだと思っておりますが、他に積石塚と関連性を持つ方形幕（F類）というものもあります。

そこで、八代地域の首長墓の変遷の中では、確実に岡・銚子塚古墳が古く位置付けられます。出土した類銅鏡柳葉式の鉄鏡、古式の巖童鏡（御所市の鴨都波1号墳という一辺20mの方墳がありますが、この方墳から出た鏡と同范の三角縁神獸鏡）、埴輪の編年觀等から『前方後円墳集成』の3期から4期段階というように考えられます。それに対して、竪塚古墳と盃塚古墳についてですが、このフォーラムが始まる前に盃塚古墳から出土した鉄鏡を拝見させていただきました。その鉄鏡の型式は、私どもが新潟で発掘調査した初期群集墳の中の飯綱山65号墳と31号墳という円墳がありますが、そこから出土した鉄鏡と非常によく似ています。ほぼ同一型式といっててもよいと思います。時期的には、5世紀の第2四半世紀から第3四半世紀にかけての時期のものです。そういうことから考えますと、岡・銚子塚古墳と盃塚古墳の間が少し開いてしまいます。その間の5世紀の第1四半世紀くらいのところに、竪塚古墳が入って来る余地があるのではないかと、出土した土器の型式編年觀から考えております。

以上ですが、この甲府盆地の中で、首長墓の変遷が八代地域では前方後円墳から方墳、そして円墳という形で移行して行きます。その後、帆立貝式古墳などが出てきますが、そのように墳形を進めて出てくるわけでして、その時に方墳が、なぜ突然的に出てくるのかという、今日、午前中から“突発的”という話が出てきましたけども、そういう点で非常に注目されるわけです。

大型の方墳の中には、遠江や信濃の方墳で、ある程度副葬品などの内容がわかっているものから想定しますと、非常に武器、武具を持つものが目立つわけとして、そういう中に武人的性格を持つ被葬者というものが想定されます。それと、大和政権との関係ということですけども、なかなか畿内の状況がよく分からぬのですが、畿内の中にも方墳がけっこうありますて、大塚先生のお話の中にも出てまいりました日本最大の樹山古墳という方墳があります。ある人によれば、5世紀前葉という年代觀を与える研究者もありまして、そうなってきますと樹山古墳の規模は一辺が85mですので、竪塚古墳はその半分よりは大きいですが、畿内の大型の方墳に対して地方の大型、中型の方墳群があるという関係がとらえられるのではないかと思います。

以上で終わりたいと思います。時間を超過してしまいましたので失礼しました。

主要参考文献

- 常木 晃・望月保宏 1986 「上田市秋和八幡大藏京古墳の実測調査」『信濃』38-4
十生田純之 2003 「群馬県における積石塚古墳の諸相」『古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開』
右島和夫 2003 「上野地域における方墳の系譜と馬」『古墳時代東国における渡来系文化の受容と展開』
風間栄一 2004 「長野市飯綱社古墳墳丘測量調査報告」『市誌研究ながの』10

- 今平利幸 2005 「1 宇都宮市とその周辺」『栃木県考古学会誌』26
- 埋蔵文化財研究会 1999 『第46回埋蔵文化財研究集会 渡来文化の受容と展開』
- 東海考古学フォーラム・静岡県考古学会 2002 『古墳時代中期の大型墳と小型墳』
- 長野市教育委員会 2007 『篠ノ井遺跡群(6)』
- 千曲市教育委員会 2007 『千曲市内古墳範囲確認調査報告書—五量眼塚古墳・堂平大塚古墳・杉山古墳群一』
- 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008 『成塚向山古墳群』

討論

コーディネーター 大塚初重 先生

土生田純之 先生、橋本博文 先生、

宮澤公雄 先生、伊藤修二

(大塚)

大塚でございます。

私はこういうフォーラムの総合司会を何回か行っていますが、今日のテーマは難しいですね。結論まで出せるかどうか解りません。また、先程、橋本先生のお話をうかがって、ますます混迷の度を深めてしまいまして、これは大変だなというように思っていますが、各先生方、ひとつよろしくお願ひいたします。

そこでまず、今日、私が総合的な話をしましてから、実際に発掘調査を担当した伊藤さんから、竜塚古墳の調査結果についてのお話しがありました。そこです、私をはじめ各先生方の話を聞いて、率直な伊藤さんのご感想を、これから取り組みのこともございますので、お話しいただきたいと思います。手短にお願いします。

(伊藤)

今日、先生方のお話をうかがいまして、本当に恐ろしい古墳の整備事業に手を付けてしまったな、というのが私の実際の気持ちです。竜塚古墳には秘められた謎が多く、学術的に見てとても貴重な古墳でありますし、おいそれと私の手に負えるような代物ではなかったのですが、手を付けてしまった以上は何としても古墳の謎を解きながら事業を進め、生かしていくかなければならないというのが、今の私に与えられた非常に大きい使命かなと考えています。

(大塚)

まあ、私も竜塚古墳、竜塚古墳とずっと言ってきましたし、係わってきましたが、担当者としても大変だという気持ちを持たれたのであろうと思います。それで、実は竜塚古墳を中心とした今日のフォーラムには、考古学上、古代史上のいろいろな問題がありまして、2時間あるいは3時間位あれば、いろいろな問題を取上げられるのですが、あまり時間がありませんので、ズバリ問題点に入りたいと思います。つまり、竜塚古墳についての問題点というのは、一体、何があるのかということです。私は竜塚古墳について、突然的なというか、突如的なというか、独立的なというか、孤立的なというか、そういう在り方を表現しましたが、橋本先生のお話や土生田先生のお話をうかがってみると、同じ丘陵にある弥生時代後期の古墳出現に至る方形周溝墓とか、低墳丘の方形墳というようなものと関係が有りはしないかという問題提起がございました。実は、私もそういうことは考えていますが、それにしても、55m～56mの大きさを持つ竜塚古墳が突如としてそこに出現してきたのか、何らかの契機が無ければ不味いのではないかというように思います。ただ、大きな古墳がそこ出てきて、それは前の段階の方形周溝墓や低墳丘の方形墳丘墓等に繋がって行くとい

うことは、あるいは事実かもしれません、それでも、やっぱり竜塚古墳の出現というのは尋常ではないと思いますが、その点について宮澤先生いかがでしょうか。

(宮澤)

はい。非常に難しい問題であります。竜塚古墳は方墳ですが、方形の系譜が方形周溝墓にあるのかというように言われますと、あるかもしれないのですが、そこには大きな格差というか、断絶というか、そういうものが有ると思います。第3表を見ていただきたいのですが、この編年表は私が作りました。盆地北・東部の所に桜井畠1号墳、桜井畠2号墳、桜井畠3号墳というのがあります。これは甲府市の川田にありますが、方形の低墳丘の墓がずっと並んでいます。竜塚古墳に一番近い時期に当たはめられる時期だと思りますけれども、これらは群集しているわけですね。段階的に大きくなっていますが、同じ共同墓地の中で群を形成していることがお分かりいただけるかと思います。一方、中道地域の東山北2号墳、これは大丸山古墳の隣接する丘陵上にありますが、2号墳ということは、実は残存状況が良くないのですが1号墳もありますて、古墳時代前期の方形周溝墓というか、低墳丘墓2基で形成されています。このような在り方を考えますと、弥生時代の伝統を引くような群集墓の中にあるものと、単独墳として認められる竜塚古墳や鳥居原孤塚古墳とは、そこに大きな一線を引くべきではないかというように考えていますので、私は系譜的に追えるということについては否定的に考えております。それで、竜塚古墳の後の段階にくる低墳丘の墳墓群は、先程、橋本先生のお話にありましたが、方形のものは東山南A4号墳くらいでありますて、後は円形の低墳丘の墳墓になってきます。それも3基とか4基が群集しているというような状況です。桜井畠の状況から方形から円形という形の変化はありますけれど、集団墓の中にあるということで、やっぱり竜塚古墳や鳥居原孤塚古墳とは分けて考えるべきではないかというように思います。

(大塚)

はい、今の宮澤先生の話の中に鳥居原孤塚古墳が出ましたけども、竜塚古墳との関係、関連性も含めて橋本先生いかがでしょうか。

(橋本)

鳥居原孤塚古墳というのは、資料的によいものがないのであまり議論にならない可能性が高いのですが、鏡は非常に特異な魏の系統の三角縁神獸鏡とは違うタイプの吳の赤鳥元年銘鏡という鏡を出しているわけですが、そういう外来的な要素を持っていて方墳だということになりますと、ある程度、外との関係を考えてもよいのではないかと思います。

(大塚)

土生田先生は関西の御出身で、西日本の古墳にお詳しいですから、是非、おうかがいしたいのですが、竜塚古墳と比較する場合に、西日本の古墳の中で、これは問題だな、近いなというような古墳がありますか。ありましたら幾つか挙げていただいて、その辺の問題点を指摘していただけたら

と思いますが、いかがでしょうか。

(土生田)

先程、四つ、あるいは低方墳をも挙げて、それを入れると五つの種類を指摘しましたけれど、そのうちの三つは違うものであるということを申し上げました。ですから、今の宮澤先生のお話と同じ趣旨でした。それで、そういう意味で近いものというと、先程の2番目とかが一番近いのですが、2番目といいますのは、近畿地方の中核、いわゆる、後の畿内の中にも方墳や前方後方墳で無視できないものがあるというものです。これとの関連が疑われるものということになってまいりますので、西日本でこれに対比できる5世紀前半ということになりますと、例えば播磨の山之越古墳とか、あるいは但馬あたりに大きい方墳があると思いますが、そういったところが比較的近いのではないかなと思います。ただ、出雲では古墳時代全体にわたって従来的に築造されていて、例としては丹花庵古墳がありますが、それが近い時期かもしれませんけど、出雲は特殊なのでこの際ちょっと置いておきたいと思います。

(大塚)

橋本先生。竜塚古墳の性格を明らかにしようとする場合に、先生が取上げるべき最重要の古墳にはどのようなものがありますか。今日、先生はいろいろな古墳のお話をなさりましたけどもどうでしょうか。

(橋本)

そういう意味では信濃の中曾根親王塚古墳とか、伊勢の明合古墳とか、これらの古墳の時期や内容が分かってくるとよいと思います。

(大塚)

あまり、方墳の発掘調査って行われてないんですよね。

(橋本)

はい、残念ながら。

(大塚)

これまでの先生方のお話にもありました、今日、笛吹市が方墳のフォーラムを行ったけれども、いざ蓋を開けてみると難しい。発掘調査した大型方墳の例というのが誠に少ないということで、非常に先生方もご苦労なさっていると思います。そこで、少し前に戻りまして、宮澤先生は、甲斐銚子塚古墳から丸山塚古墳という系譜の話をされました。それから、橋本先生ですか。岡・銚子塚古墳から盃塚古墳、盃塚古墳から竜塚古墳というよりも、今日、盃塚古墳から出土した鐵鏃を拝見した結果では、岡・銚子塚古墳から竜塚古墳、竜塚古墳から盃塚古墳というようにおっしゃられまし

たが、その辺の見解について、宮澤先生、いかがでしょうか。

(宮澤)

なかなか難しいところですが、先程も話をさせていただきましたが、甲斐銚子塚古墳から丸山塚古墳という流れは大方の賛同を得ていることだと思います。そして、甲斐銚子塚古墳と岡・銚子塚古墳は、非常に結びつきが強いということで、岡・銚子塚古墳のすぐ側にある盃塚古墳をどのように位置付けるかということで、第 52 図に重ねた図面を示しましたが、本来でしたら岡・銚子塚古墳と盃塚古墳が非常に近い時期で、丸山塚古墳と盃塚古墳が同じような時期であれば、非常に納得しやすいというか、流れとして非常に解りやすく、その後に別の形の竜塚古墳が出現してくれればと思っていましたが、どうも盃塚古墳から出土した鉄鏃とか見ても、あと刀も出ているんですけども、古墳の時期をどんなに古く見ても 5 世紀の第 2 四半世紀までという感じです。鉄鏃についても、それ以後もある型式ですので、とても丸山塚古墳までは遡れません。それに、竜塚古墳から出土した高坏が、どう見ても 5 世紀の前半代、前半の真中あたりという事であれば、岡・銚子塚古墳と盃塚古墳の間に挟まざるを得ない状況だと思いますので、前方後円墳から谷を一つ隔てた所に方墳がてきて、また、前方後円墳の側に戻って、小さな円墳を造るというのは、どのように理解していいのか、私も迷っております。

(大塚)

その辺、橋本先生どうでしょう。

(橋本)

第 3 表に宮澤先生が作られた甲斐の前半期古墳の変遷図がありますが、その中で小平沢古墳、大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳、丸山塚古墳の順はよいと思いますが、丸山塚古墳を甲斐銚子塚古墳に近い前期古墳で、『前方後円墳集成』編年の 4 期の中に入れた方がよいのではないかなと思っています。ですから、竜塚古墳よりは古いだろうと考えています。そして、天神山古墳がどこに入ってくるのかというのが、研究者によってまちまちで、決定的な年代観が出ていませんが、古墳の立地が谷の奥に入った所でありまして、また、古墳の括れ部から須恵器甌を模倣した土師器が発見されていることを積極的に評価すれば、年代を新しくせざるを得なくなってしまします。ですから、竜塚古墳の前後の甲斐の最高首長墓と言いますか、それをどの古墳と見るかというのが気になるところなんです。そういう中で天神山古墳を、例えば甲斐銚子塚古墳の後にもって来るか、あるいは丸山塚古墳よりも新しくして、竜塚古墳との前後関係で竜塚古墳の方を少し古く考えたらいかがかと私は思っております。

(大塚)

はい。一つのことについて、全員が一致しなければいけないということはないんですが、ただ第 3 表の甲斐の前半期古墳の変遷という図を拝見すると、今、宮澤先生も話されましたし、橋本先生

も触れられましたが、中道地区では小平沢古墳、天神山古墳、大丸山古墳ですよね。この天神山古墳はここでいいんですか。宮澤先生どうでしょうか。

(宮澤)

これについては、私しか言つておりません。確かに、括れ部から出た土師器を見ると、5世紀前葉の丸山塚古墳の後でいいと思いますが、未発掘の古墳でありまして、ただ古墳のプロポーションを見ると古いのかなと思っておりまして、私はここに置いています。ただ、問題がないわけではありません。丸山塚古墳からかんかん塚古墳、そうしますとだいぶこの二つの古墳の間が空いてしまうということです。これには、問題が無いということもないので、天神山古墳の所に点線をずっと下のかんかん塚古墳の上の所まで引いてありますけれども、通説ではやっぱり丸山塚古墳の後ろに天神山古墳を置くべきだろうと思います。

(大塚)

はい、分かりました。なかなか、この辺は難しいですね。いろんな見方がありますので、宮澤先生の見解について、皆さんが納得するかどうかですね。そうしましても、これはどなたに聞いたらいいのでしょうか。とにかく小平沢古墳、天神山古墳、大丸山古墳、甲斐銚子塚古墳、丸山塚古墳、少し間が開くけど、かんかん塚古墳。こうなると、八代では岡・銚子塚古墳が甲斐銚子塚古墳とほぼ同じ時期に平行しているということですね。同時期に両雄並び立つというか、そういうことを考えざるを得ませんが、いかがでしょう。そのところを宮澤先生、聞いてもいいですか。どうでしょうか。

(宮澤)

岡・銚子塚古墳の方が古いということは、もちろん無いと思いますが、まあ、私は同時期か、若干遅くなるくらいで、その遅れがどのくらいかというのは、なかなか難しいのですが、ほぼ同時期と考えていいのだろうと思います。

(大塚)

なるほど。そうすると、この甲府盆地のこの地域に、方や甲斐銚子塚古墳の親方がいて、方や岡・銚子塚古墳の親方がいて、同時期にお互いが並び立つという歴史的な状況というか、政治的な状況があったということなんですが、これは悪いということはないんですが、この辺り、土生田先生いかがでしょうか。

(土生田)

予期せぬところできました。並び立つかどうかということはちょっと置いておいて、私はこの図を作成したご本人を横にして言いにくいのですが、宮澤先生の案が仮にだめだったとしても、中道や八代の大型古墳の築造年代は、どんなに新しく見ても5世紀前半ということですね。その中で

どこに置くかということなんです。そうしますと、見ていただければ分かるように、甲斐国では5世紀前半を境にブツツリとまではいきませんが、大型古墳はほとんど無くなってしまって、その後は小さくなります。実は、こういう状況というのは甲斐国だけではなくて、相模国がまったくその通りであります。相模国の古墳は、甲斐国より全体に小さいわけですが、それでも私の住んでいる海老名では、秋葉山古墳群というのが3世紀の終わりから代々前方後円墳を造って、最後に少し場所を移しながら4世紀末、あるいは5世紀にかかる頃まで続いて終焉を迎えてます。そして相模の三浦半島でも10年ほど前に見つかった4世紀後半の大型古墳が2基ということで、相模国も5世紀の初め頃にブツツリと大きい古墳が無くなるというように、東京もそうだったと思いますが、どうも広い地域で同じような現象があります。一方で、5世紀の前半から中葉頃でしょうか、長野県の伊那谷で大きい古墳がどんどん造られてきます。これらは、それぞれ別個の現象として理解するのではなくて、全体として総合的に判断するべきであろうというのが私の考え方です。

(大塚)

はい、ありがとうございました。今日の私の講演の中でも触れましたし、先生方のこれまでのお話しの中でも触れられていますが、5世紀代に畿内を中心として、例えば佐紀盾列古墳群の仁徳天皇の后である磐ノ媛陵に比定されている古墳とか、コナベ古墳とか、ウワナベ古墳とか、コナベ古墳などは確か8基くらい陪塚があると言われていますが、これらを陪塚を見ていいのかどうか、それから、もしいいとすれば、5世紀代の早い時期に、盛土の方墳が陪塚として登場するあたりの歴史的な状況について、土生田先生、如何でしょうか。

(土生田)

これは、田中晋作先生が先鞭をつけた研究でけれども、畿内の超巨大（大型）古墳、近畿では200m以上のものを一般に言いますが、この中で一番古いものはどれなのかという問題がありますが、一応、箸墓古墳だというように考えてよいと思います。この箸墓古墳は単独で、陪塚はありませんが、この次の柳本古墳群では、大塚先生の講演の中でも挙げておられましたが、巨大墳の陪塚としては、比較的大きい古墳が1基とか2基、あるいは数基存在しているだけです。それが、今、お話しのあった佐紀盾列古墳群になると、超巨大古墳の周辺に、規模はやや落ちるけれども同時期の前方後円墳があります。それがもっとも複雑になるのが、古市・百舌鳥古墳群であって、同じ時期に超大型古墳（陪塚を多数従えている）、中型古墳、小型古墳（ここでいう中型・小型古墳も、他地方では首長墓級の規模であることに注意が必要あります）というように、三角形構造（ピラミッド）と言いますか、そういうものがどんどん複雑になってきます。これはおそらく原初的な役所の機構がだんだん複雑になっていて、古い段階では、大王一人に権限が集中と言いますか、役所的な機構が未発達な段階であることから、代表者として1基だけ古墳を造ります。しかし、段々と役所的な機構の原初的なものが整ってきて、あなたは祭祀を担当しなさい、あなたは軍事を担当しなさい、というような分化が生じ、それが目に見える形で、この三角形のピラミッドになって階級を表わすようになってくるというように言われていたと思いますが、私はそれでよいと思います。

そして、6世紀になると、それがまた小さく、少なくなつてまいりますが、それはもう古墳ですべてを表わす時代でなくなつて行くのではないかというように、一応考えております。そういう意味で、5世紀代に陪塚が一番発達して、物で見せるこの身分関係が最も複雑になり、その後は単純になつたのではなくて、物から徐々に遊離して、精神的な方に変わっていくのではないかというよう思います。

(大塚)

その5世紀の陪塚論といいますか、土生田先生、おっしゃっていただきましたが、もちろん円墳もありますが、方墳が多いですよね。どうして方墳が多くったんですかね。

(土生田)

一般的には、円系が上位で、方系が下位だと言われていますけど、先程も申し上げましたように、前方後方墳あるいは方墳は、初期の段階から規模的にやや下位であると言わざるを得ないわけです。400mはおろか200m以上の前方後方墳はありません。一番大きいものは、奈良県天理市にある西山古墳という180m台のものがありますが、大きさではどうしてもかないません。私は、先程、方系は単純に下だというように考えてはいけないと申しましたが、しかし、だんだんと5世紀代が進んでいくと、方系、方墳の地位が少し落ちて来るのではないかという気はしております。ただし、竜塚古墳は方墳の地位が決定的に落ちる前の段階の古墳ですから違いますが、陪塚に方墳が多いという事例は、5世紀になると増えてまいります。ただ、5世紀前半とかその辺はどのように考えるのか、これは今言いましたように、どちらかと言えば円系よりも方系のほうが下位だということが言えると思います。私が言ったのは、どちらかと言えば、ということを大きく見積もりすぎて、方系はすなわち全部下だというように考えてはいないけれども、やや下にあるのではないかというように思っております。

(大塚)

一般論から言って、私も土生田先生と同じように、方墳よりも円墳の方が上位だというのはあると思いますが、ならば、なぜ竜塚古墳、55m～56mもある大型の方墳を造ったのかというのは、やっぱり疑問なんですね。そこで、もう少し竜塚古墳に的を絞って、伊藤さんに聞きたいのですが、竜塚古墳の造られた年代、まあ、我々も5世紀前半という年代をこれまで言っておりますが、その年代は発掘調査の時に出土した土器からの年代ですね。その土器について、出土状況とか、出土した位置とか、器形とか、その辺を紹介していただけませんか。

(伊藤)

はい。第33図に土器の実測図を載せてありますのでご覧ください。ここに載せた5点の上器、これが竜塚古墳に伴うであろうと思われるものです。本来ですと副葬品ですとか、元位置を保ったままの土器などが出土すれば良かったのですが、発掘調査では副葬品は出土せず、出土した土器も

元位置を保った状態のものではありませんでした。左上に載せた第33図1の土器は、小型の丸底壺で、古墳の南西隅で確認した岡溝の覆土の中から出土しました。第33図2の高坏の脚部と、第33図5の少しきめの高坏がありますが、これらは墳頂で確認された墓坑のやや南側から出土しました。また、第33図3の有段口縁壺の口縁部破片、第33図4の高坏の脚部が、21トレンチ北側の墳頂から墳丘斜面に移る肩付近から出土しました。ただ、これらの土器の出土の仕方は、墳丘上から出土した土器は、表土の除去作業中に、表土の中から出土したものであり、周溝の中から出土したものは、周溝の覆土の中から出土したものであって、とても元位置を保っていると言えるようなものではありません。一応、これらの出土土器を基に築造された時期を5世紀前半と考えたわけですが、何といっても、一番弱い点がこれらの土器が元位置を保っていないということです。ただ、これらの土器がなぜ竜塚古墳の墳丘の上、もしくは周溝の中から出てきたのかを考えると、竜塚古墳が立地している台地の上には上ノ平A遺跡があつて、これまで何度も何度か発掘調査が行われていますが、古墳時代前期や中期の遺構や遺物が見つかっていないことから、元位置を保っていないこれらの出土土器が、元々は竜塚古墳の墳丘上にあったという可能性が考えられますので、この年代観を導き出したところです。

(大塚)

宮澤先生、山梨県の古墳時代研究の特に土師器について、土師器の型式観から言って、今、伊藤さんが調査して出てきた土器、その出方も問題にされました。他の時期のものは混じってないし、出方から考えてこの竜塚古墳に係わるものだろうと私は思っていますが、上器の型式論からいつて時期はどうでしょうか。教えていただければと思いますが。

(宮澤)

これについては、県立考古博物館の小林さん（現、山梨県埋蔵文化財センター）が研究されており、聞いていただければよろしいかと思いますが、5世紀第2四半世紀くらいの時期でいいと思いますので、この時期を竜塚古墳の時期とするのがいいと思います。

(大塚)

なるほど。県立考古博物館の小林健二さん（現、山梨県埋蔵文化財センター）ですね。竜塚古墳の造られた時期は5世紀の前半ということでいいのでしょうか。それとも5世紀第2四半期とか、もう少し限定することができますか。

(小林)

5世紀前半でいいと思います。

(大塚)

5世紀前半ですね。はい、分かりました。

そこで、岡・銚子塚古墳、盃塚古墳、竜塚古墳という系譜で行くのか、岡・銚子塚古墳と盃塚古墳の間に竜塚古墳が入るのか、という問題があります。それから、甲斐銚子塚古墳から丸山塚古墳、天神塚古墳がこの後に入るのか、いろいろな問題がございます。それはそれといたしまして、同じ時期に、甲府盆地の八代と中道という地域に、有力な首長集団が2つに分かれて同時平行で存在していたということが、古墳の年代論から見ると、両方が並び立つということが事実としてあったことになりますので、これからこの一帯の古墳群の状況を調べる時には、このことを念頭に置く必要があるだろうと思います。

そこでまた元に戻りまして、竜塚古墳の出現の仕方ですが、前段階に25mないし30m位の墳丘を持った方墳群が周辺にあって、というと非常に説明は付きやすいのですが、現実には、岡・銚子塚古墳と盃塚古墳しかありません。そういう中に、いかに冷静に考えても、竜塚古墳は突発的などうか、いきなり大きな墳丘をさくらけ出しているという点で、何かそこに歴史的な背景が有るのではないかということで、橋本先生、先程のお話の中で、軍事的な装備を持った軍事集団というようなことも触れられましたが、この辺の問題点を解説がてお話ししてくださいませんか。

(橋本)

はい。正直に言って方墳の出方としては、やはり低墳丘墓、方形周溝墓からの流れの中から竜塚古墳が出てきたっていうようなとらえ方ではなくて、やはり“突発的”という言い方に近い方がふさわしいと思います。そして、これはこの地域だけの現象ではなくて、やはり中部高地の中の信濃とか、東海の遠江とか、伊勢とか、その辺も併せた所でとらえていった方がよいのではないかということです。ただ、その時期の同時期の他の前方後円墳なり、そういう有力な古墳があるかどうかというその辺も加味して検討しないと、その位置を間違えてしまうのではないかと思います。それで、先程、政治的な変動云々という話がありましたけども、土生田先生のおっしゃられた相模の中での変動ですね。それは、その他の地域においても、北陸、新潟、それと東北南部も似たような状況であると思います。ですから、かなり広域な中の変動があるのではないかと考えています。そして、そういう中にあって、関東の群馬などは違う状況があるというところですね。そのように考えてみたらいかがかと思います。

(大塚)

はい。橋本先生からもう少し思い切ったお話しが出るのかなと思っておりましたが、オーソドックスで慎重ですね。まったくその通りです。つまり、竜塚古墳の状況だけではなくて、長野県における、先程も名前が山ましたが、方墳の出現とか、北陸やその他の地域における方墳の出現の仕方、5世紀前半におけるそういうものを十分に洗い直さなければ、簡単には言えないということなんですね。当然のことなんですが、そこをもう少し思い切って言って欲しかったと思いましたが、残念ながら橋本先生といえども、なかなか難しいというように思います。今日のフォーラムの内容は、後で印刷物になるかも分かりませんから、うっかりしたことは言えないというお気持ちも分かります。それでも、一体、竜塚古墳には誰が埋葬されているのか、どういう性格の首長が埋葬され

ているのか、方墳が好きだったのか、それとも遺言だったのか分かりませんが、方墳にこだわったことは事実だと思います。そうすると、5世紀前半代に「俺の墓は方墳だよ。大きな方墳だよ。」と言い残してあの世に旅立った。もしそうだとしたら、何が考えられますか。土生田先生どうでしょう。

(土生田)

橋本先生とは、若い時に一緒に研究会をやっておりましたが、私が若干年上なので思い切ったことを言わせていただきます。

先程も申し上げましたように、近畿の方系の系統は、大局的には円系より下位の墓であることは間違いないのですが、そのように言うと方系墳墓の被葬者は力が無いというように見られがちですが、そうではないということを申し上げました。それで、これはもうちょっと後の時期ですけども、白石太一郎先生が、伊那谷という狭い所に前方後円墳が何系列もあって、その内部主体の構造に基づいて様々な系統に分けられます。それで、その淵源を見ると、いろいろな所、近畿の各地域とか、あるいは近畿と伊那谷との間の地域から来ていて、そうした事実から見ると、近畿の大豪族が、それぞれ伊那谷の各小地域の豪族と何らかの関係を持って、その関係で近畿の地域性というか、氏族の違いが墳墓に表されているんだろうと、概ねそのようなことをおっしゃっておられます。これを格好よく難しい言葉で言えば、擬制的同祖同族関係を結んだ結果が、墳墓に現されているということになります。まあ、そういうことからすると、そこまで難しく言わなくても、この段階で注目してもらいたいのは、第3表の丸山塚古墳が円形であって、近い時期の竜塚古墳が方形であるということになると、大局的には円形が上で方形が下ですが、繰り返してしつこいよう申し訳ありませんが、方形も一定の力を持っていましたことは否めない、というように私は強調したつもりです。皆さん竜塚古墳が近畿と関係を持って突発的に出現したとおっしゃいました。まさにそのように見えますが、近畿との関係で、それは方形を営んでいる近畿との関係で古墳を造った。丸山塚古墳は、円形を営んでいる近畿の勢力と連絡を取ってこういうものを造った。このように考えることが一つの案ではないかと思います。そこで、少し長くなりますが、その際に近畿が引き立てたのであって、地元には力が無いというように私は思っておりません。違う時代のことを説明しますので、お許しいただきたいのですが、例えば、大きな力を持っている異民族とか、違う部族がやってきた時は、大きな力が無い地元も大同団結して、それに対抗するために大きな力を持つこともあります。これは、アメリカ先住民のことを念頭に置いております。それから、西アフリカのサバンナ地域の民族の例で申し上げますと、イギリスとかフランスの列強が攻めて来た時、実際はいくつかの部族が連合して共同統治をしていた例がありますけども、イギリスやフランスに一番近い協調的な部族が、イギリスやフランスとの関係で特別に大きくなるという例もありますので、必ずしも中央が、つまり畿内が無理やり大きいのを造らせたとか、そういうことではなくて、それぞれの地域の事情によって、こういうことが生じる場合もあるであろうと思います。ですから、現在の古墳研究者が古墳の大きさだけで単純に力の大小を測るのは余りにも単純であって、幼稚な案だというのが私の考え方であります。

(大塚)

土生田先生からだんだん本音が出てきました。あと 15 分くらいしかないんですけど、私はやっぱり竜塚古墳に誰が埋葬されていたんだってことに、非常にこだわりますが、橋本先生、今の土生田先生の話を聞かれて、橋本先生なりの竜塚古墳の被葬者論というのをここで言うとすれば、もう少しあはつきりと言つていただけませんか。何か。

(橋本)

今のお話の流れの中で、違うことに関してでしたらコメントできますが、その件に関してはノーコメントということでおろしいでしょうか。

(大塚)

いいですよ。

(橋本)

例えばですね、先程から問題になっている甲斐銚子塚古墳と岡・銚子塚古墳の関係ということに関しては、以前に私が拙稿を書いているのですが、その中では同時存在といいますか、この甲斐盆地の権力構造の中で、その中心的な首長系列が中道にあって、それとサブ的なものが八代にあるのではないかと考えてみたんですね。何故かというと、岡・銚子塚古墳と甲斐銚子塚古墳というのは墳形、外部施設、副葬品などが非常によく似た古墳で、その当時の規模は、岡・銚子塚古墳が甲斐銚子塚古墳の約 2 分の 1 で、それに両者埴輪を持っているということです。この時期では、岡・銚子塚古墳と甲斐銚子塚古墳と丸山塚古墳にしか埴輪は無いんですね。そのような類似した様相があります。埴輪は、円筒埴輪の変遷の中で分類的に違うんですけども、かえって岡・銚子塚古墳の方が古いのではないかと思われる要素もあります。あと副葬された鏡の中で、三角縁神獸鏡の同范鏡をそれぞれが違う古墳ですけど持っています。さらに、仿製鏡の羅竜鏡に関しては、同種の鏡ですけども、むしろ甲斐銚子塚古墳よりも岡・銚子塚古墳の羅竜鏡のほうが型式的には古いタイプの鏡なんです。いずれにしても似たような在り方を示しています。これは、その首長系列の中の時間的前後関係ではなくて、同時期の中の主とサブみたいな関係が形成されていたと見ていいのではないかと思います。

そしてもう一つ、先程の天神山古墳にこだわるようですが、その立地が非常に特異な所にあります。宮澤先生の資料の第 38 図にありますが、他の前期古墳、小平沢古墳にしろ、大丸山古墳にしろ、それに続く甲斐銚子塚古墳にしろ、みんな平野側の眺望のよい所に立地しております。そういう意味では、岡・銚子塚古墳なども 180 度の範囲で盆地を見わたせる所に在ります。一方、犬神山古墳に関してはそうではないわけですね。そういう非常に立地の悪い所に造られているというのもですね、そういう点では非常に変な古墳であります。だから、そういう前期古墳の中に持つていかなくともいいのではないかというのが私の考え方であります。

(大塚)

はい。ありがとうございました。

天神山古墳については、宮澤先生からも埴輪の形態からいくとかなり古い古墳ではないかという問題提起もありました。だけども、調査が行われていないので、それ以上のことが言えないんですね。今、橋本先生からは、立地する位置というのが他の古墳とは少し違うので、これは問題だという指摘がございました。そこで、もう少し橋本先生にこだわるのですが、岡・銚子塚古墳には円筒埴輪がありましたよね。

(橋本)

はい。

(大塚)

岡・銚子塚古墳の系譜を引くというか、竜塚古墳には埴輪が無いんですよね。

(橋本)

はい。

(大塚)

この辺の何か関係論は、埴輪の専門家として何かございませんか。

(橋本)

岡・銚子塚古墳の埴輪の系譜というのは、おそらく大和東南部あたりにあると思います。それで、東日本では東海地方の静岡県磐田市の松林山古墳とか、関東ですと私の郷里ですが、群馬県の太田朝子塚古墳とか、栃木県の小曾根浅間山古墳とか、そういう所に非常に似た初期の埴輪があり、それらがずっと繋がってきます。そういう一連の系譜の中に位置付けられるんです。基本的には、そういうのは全部前方後円墳が持っているんですよね。そして、同時期の円墳とか方墳では、そういう埴輪というのは採用されないんです。だから、おそらくそれが格差なんだろうと思うんですね。そこで、そういう目で竜塚古墳を見ますと、この時期の他の古墳もそうなんですが、大師東丹保古墳もあれは壺形埴輪です。そして、物見塚古墳にしろ、亀甲塚古墳にしろ、鳥居原狐塚古墳にしろ、円筒系の埴輪が無いわけです。それで、方墳である竜塚古墳に関しても、埴輪がないというのは、やはり、墳形の違い、格差、系譜差を重視していいんじゃないかなと思います。

(大塚)

はい。私はそういう点で、今日、十生田先生から畿内の巨大・大型前方後円墳の陪塚論としての方墳の話が出ました。さらに、五条市の猫塚古墳とか、そういう面で蒙古鉢形の胄とか、そういう

非常に大陸的な関係を示すような遺物を持っている方墳というものが事実存在するというようなことを頭に入れるに、もしかすると竜塚古墳の被葬者は、ある特定の使命なり、特別な、政治的な意味を持って畿内なり、あるいは山陰、北陸なりそういう地域からこの甲斐の地域にやって来たというようなことを考えてみてもいいと思います。この頃、日本列島内で違う地域の土器が大量に遠くの地域から発見されます。つまり、集団移住とか、一言に移住、移動の問題がかなりあるということで、列島内は停滞的で、動きが無いのではなくて、相当激しい動きがあるということですから、そういう点で竜塚古墳、大方墳の首長の被葬者が、歴史的な関係、契機からこの地域にやって来て方墳にこだわったという考え方をしてみても、一つの考え方としてやってみてはどうかなって気も無いわけではないんです。ただし、これは盲うだけではなくて、ちゃんと考古学的な証明をしなければならないのですが、そういう私の考え方も含めて、各先生方からお互いに聞きたいことってございますか。上生田先生から橋本先生にとか、橋本先生から宮澤先生にとか、何かありませんか。

(上生田)

折角の機会ですから、橋本先生にうかがいたいと思いますが、古墳の大きさは、即、勢力の大小に比例するか否か、単刀直入におうかがいいたします。

(橋本)

即といわれると困りますが、ある程度、経済力とかそういうものを反映していると思います。

(大塚)

今日は、橋本先生、とても簡単に言われましたが。

(上生田)

私がうかがいましたのは、それは公式的にはそうかも知れませんが、先程、お話をあった東北南部なんかで、5世紀前半を境に古墳が小さくなるというように橋本先生ご自身がおっしゃいましたが、東北南部では5世紀の間中、豪族居館はどんどん大きくなるという事実がありますが、この矛盾についてご返答をお願いいたします。

(橋本)

それは説明がつかないんですが、例えばその居館と古墳との関係がどうえられないという点があります。東北南部で前期段階と中期段階のいわゆる豪族居館が見つかっているんですが、太平洋側のいわき市に前期段階の居館で結構大きいものがあるんです。それと、今お話しのあったのは、古量敷遺跡だと思いますが、会津盆地の中に5世紀代の居館があるということですが、ただ規模は同じ位かも知れないですね。ただし、これに対応する古墳がそれぞれ見つかっていません。だから、必ずしもそうではないのかなと思います。もう少し古墳と居館とを対応させながら総合的に考えていかないと、それは正しいと今は言い切れません。

(大塚)

はい。宮澤先生、先程も出てきた話ですが、東山北遺跡の低墳丘の方形周溝墓ですか。馬の骨が出土しましたよね。そして、その方形周溝墓は4世紀後半位ですよね。すると、甲府盆地では4世紀後半にすでに馬を所有していた集団の首長が居て、それがこの曾根丘陵の東山の上に大方形周溝墓を造ったということですから、馬の所有、馬の生産を4世紀後半から始めたと言いかつたけど、これは問題だけども、その馬を通じての、あるいは、馬の所有とか、もちろん始まっているであろう馬の生産を通じての竜塚古墳の歴史的背景というはどうでしょうか。

(宮澤)

ご質問を受けたんですが、ちょっとそれについて私はお答えできません。ただ、あの東山北遺跡の2号方形周溝墓でも馬の歯が出ていますし、橋本先生の資料をお借りして申し訳ないんですが、甲府工業高校のグランドの下になりますが、塩部遺跡です。そこを調査した時にも、方形周溝墓の溝の中から馬の歯が出てます。それもだいたい4世紀後半位とされておりますので、1例だけではなくて、そういういくつかの事例がありますので、その時期には、少なくとも馬とかかわった人が居た、甲斐の地域に居たんだということは確実だと思いますが、それと竜塚古墳を結びつけるというような材料は、今のところ持ち合わせていません。

(大塚)

はい。会場に来られている方から質問が寄せられています。「甲斐国は馬の産地になったと聞いておりますが、竜塚古墳の頃の実力者は、馬によってかなり裕福だったんじゃないかな。それゆえ、大和朝廷との結びつきも深かったと思いますが、竜塚古墳の大きさとは関係ないのでしょうか。また、騎馬隊を編成して、軍隊として強かったということは考えられませんか。」という質問です。この質問には、もう少し時間が必要ですね。将来、何年後のフォーラムでは、もっと具体的に言えるようになるかも分かりませんが、私が、今、宮澤先生に言ったのは、5世紀の前半位にあまりにも急激に竜塚古墳が出現して来るものだから、まあ、この状況からいくと、実は古墳時代の馬の飼育の問題があって、甲府盆地では4世紀後半に塩部遺跡でも東山北遺跡でも馬の骨が出てます。ということは、甲府盆地の有力な集団には馬がいた、ということは馬の飼育を行っていたのではないかということがあったので、まだ早いかも知れませんが、竜塚古墳が大型の方墳という形で登場していくということは、そのバックに新しい馬の飼育技術を身に付けた新しい集団がこの地域にあったのではないか、というように考えられないこともあります。だから、竜塚古墳が大型の方墳になったんだと言うと、その後は続かないじゃないか、一時的なことか、というように言われるので、もう少しこの辺は検討しないと、将来、問題になると思うんです。

それから、次の質問ですが、「竜塚古墳をより一層解明するためには、これからどのような手段をとったらしいのか。」と。それから、「笛吹市として国指定史跡にする意欲があるのか。」ですね。私は、有るというようにうかがっておりますし、私自身もそうすべきだというように思っておりまし

て、これだけ午前中から問題にしている竜塚ですから、国の指定にしないわけにはいかないと、私は命の限り頑張るつもりでいるんですけども、そのへんについて、伊藤さんどうでしょうか。

(伊藤)

まず、竜塚古墳の国の指定の問題ですが、これは今、非常に大きい課題として教育委員会で取組んでいるところです。現在、文化庁では、古墳を国の史跡指定にする場合、古墳単体だけの指定は行わないという見解を打ち出しています。このことは、竜塚古墳単体での指定は行わないというものであって、竜塚古墳にプラスして何か他の要素を加味しないと指定は難しいということあります。そこで、まず今日のこのフォーラムで竜塚古墳を深く掘り下げていって、その姿を浮かび上がらせて、なおかつその要素も加味して国の史跡指定への道筋をということを考えまして、フォーラムを開催させていただきました。

何か、竜塚の謎に迫ったところが、また謎が深くなってしまってというような感もありますが、国の史跡指定の件についても、保存、活用についても、遺り甲斐のある古墳だなと思っております。

(大塚)

はい、ありがとうございました。今、伊藤さんがおっしゃったように、今後、文化庁ではどんなに有名な古墳であっても、一つ単体だけで「何何古墳」というように、国の史跡に指定するのではなくて、もっとグループで、例えば岡・銚子塚古墳と盃塚古墳と竜塚古墳を全部含めて国の史跡とするということですね。むしろ、私はそれと一緒に甲斐銚子塚古墳、丸山塚古墳、あの一帯の全部の古墳を含めて国の史跡に指定するということもいいと思います。私の住んでいる千葉県の印旛沼のほとりでは、現在、国の史跡になっている岩屋古墳という一辺80mの大型方墳に加えて、114基の前方後円墳、円墳、方墳を全部含めて一括国の史跡にしようということで、半年後に文化庁へ申請することになっています。そういうように他の市町村も頑張っていますので、ぜひ、笛吹市も、甲府市とも相談するなどして頑張っていただければ、絶対に明るい見通しがつくのではないかというふうに思っております。

ところで、もう4時を回ってしまいました。今日の予定は、午後4時閉会ということになっておりました。ここにございますように、竜塚の謎に迫るというよりも、迫りきれなかったかな、ということで、総合司会の私としては、大変申し訳なく思っております。しかし、白状いたします。實に嬉しい、本当に嬉しいです。これまで、ずいぶん方々で私もこういうフォーラムなどの司会をやりましたが、今日のテーマは聽しかったです。

(橋本)

最後に一言いいですか。

今後のなんですが、先程の国指定の問題に絡むところなんですが、笛吹市八代町にある岡・銚子塚古墳の主体部の構造が本当に粘土構造なのか、堅穴式石室なのか、その辺のことを調査されているわけですけども、確実でしょうか。それと、盃塚古墳の資料・年代観などをしっかりと出していた

だいて、そういうようなところで議論していかないと、学問が前進しないのではないかと思います。

(人塚)

国の史跡指定にするには、ちゃんとしたレポートとか調査報告を付けないとダメですから、伊藤さん、これから大いに頑張ってください。

ということで、みなさんのご期待に添えなかつたかなと思いますけども、それにしても竜塚古墳というのは大変な古墳ですね。土生田先生、橋本先生、宮澤先生、伊藤さん、みんなでこれだけ知恵を絞ったけども、その前提になるいろんな考古学的な事象がまだまだ十分煮詰まっていないという点がありますので、これから竜塚古墳だけではなくて、全国の5世紀代前半の方墳についての注目度は高まりましたし、問題点が出たと思います。そういう点で、私は今日のフォーラムは、非常に意義がありました。土生田先生も言っておりましたけども、本当に方墳論の論文も本も無いんです。これから多分、こういう大型方墳等の研究が出てくるのではないかというように思います。

それでは、午後4時を回りましたので、私の司会進行が不十分で、先生方に嫌な思いやご迷惑をかけた点が多くあったと思います。ここでお詫びいたします。以上をもちまして、本日、行いました笛吹市歴史フォーラムを終わりたいと思います。ありがとうございました。

写真資料 1



フォーラムで講演を行う大塚初重氏



フォーラムの討論で発言する土生田純之氏



フォーラムで講演を行う橋本博文氏

写真資料 2



フォーラムで講演を行う宮澤公雄氏

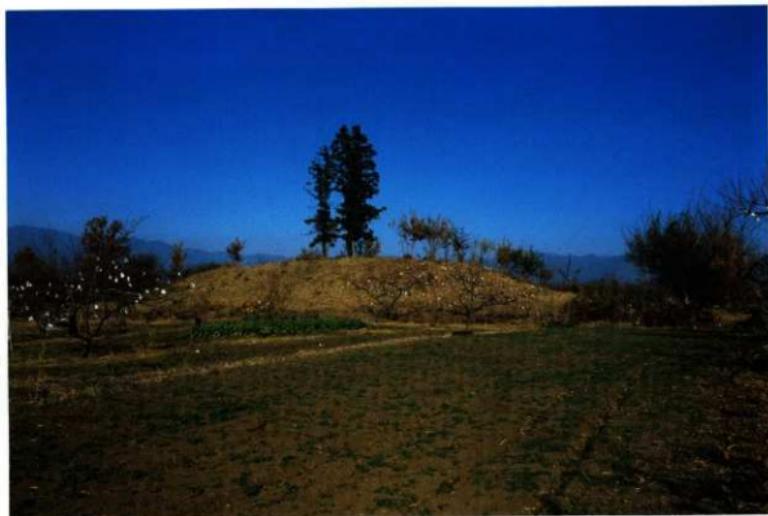


フォーラムで行われた討論の様子



講師の話を熱心に聞くフォーラム参加者

写真資料 3



竜塚古墳の近景（南西側から）



竜塚古墳の近景（北西側から）

写真資料 4



第 21 トレンチの北側墳丘斜面で検出された葺石（左斜めから）



第 21 トレンチの北側墳丘斜面で検出された葺石（正面から）

写真資料 5



第8 トレンチの墳丘斜面で検出された蓋石（右斜めから）



第8 トレンチの墳丘斜面で検出された蓋石（正面から）

写真資料 6



第3 トレンチでの周溝検出状況



第3 トレンチで検出された周溝の完掘状況

写真資料 7



第31 トレンチでの周溝検出状況



第31 トレンチで検出された周溝の完掘状況

写真資料8



第21 トレンチ北側調査区の全景



第21 トレンチ南側調査区の全景

写真資料9



墓坑検出状況



第21 トレンチ填頂部におけるサブ
トレンチの調査状況

笛吹市文化財調査報告書 第19集

山梨県最大の方墳、竜塚の謎に迫る
記録集

発行日 平成23年3月31日
発 行 笛吹市教育委員会
印 刷 株式会社 S P C
山梨県笛吹市石和町河内179

